

# 京都府遺跡調査概報

## 第 52 冊

1. 天 若 遺 跡
2. 日 置 遺 跡
3. 祇 園 谷 遺 跡
4. 上 中 遺 跡
5. 鹿 谷 遺 跡
6. 平安京跡右京七条三坊二町
7. 平安京跡左京一条二坊十町

1 9 9 3

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、発足以来はや10年余を経過し、さらに新しい10年に向かって踏み出そうとしています。この間、当センターの業務遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

過去10年をふりかえてみますと、公共事業は年々増大し、それに伴う発掘調査も単に件数の増加だけでなく、とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行し公表するとともに、毎年、展覧会や研修会等を開催し、発掘調査で出土した遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成2年度に実施した発掘調査のうち、水資源開発公団、京都府農林水産部、京都府教育委員会、京都府土木建築部、公立学校共済組合京都支部の依頼を受けて、天若遺跡、日置遺跡、祇園谷遺跡、上中遺跡、鹿谷遺跡、平安京跡右京七条三坊二町、平安京跡左京一条二坊十町に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・日吉町教育委員会・八木町教育委員会・京北町教育委員会・亀岡市教育委員会・京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの関係諸機関、ならびに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 天若遺跡    2. 日置遺跡    3. 祇園谷遺跡    4. 上中遺跡    5. 鹿谷遺跡  
6. 平安京跡右京七条三坊二町    7. 平安京跡左京一条二坊十町

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 天若遺跡	船井郡日吉町天若森形	平4.4.20～ 9.18	水資源開発公団	三好博喜 八木政明
2. 日置遺跡	船井郡八木町日置	平4.8.10～ 9.2	京都府農林水産部	小池 寛
3. 祇園谷遺跡	北桑田郡京北町下谷川尻	平4.7.6～ 8.11	京都府農林水産部	小池 寛
4. 上中遺跡	北桑田郡京北町上弓削沢の奥15	平4.5.25～ 7.24	京都府教育委員会	野島 永
5. 鹿谷遺跡	亀岡市蔭田野町鹿谷	平4.6.12～ 8.6	京都府農林水産部	野島 永 河野一隆
6. 平安京跡右京七条三坊二町	京都市西京区名倉町	平4.9.24～ 11.13	京都府土木建築部	小池 寛
7. 平安京跡左京一条二坊十町	京都市上京区東堀川下長者町	平4.5.6～ 6.29	公立学校共済組合 京都支部	柴 暁彦

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

## 目 次

1. 天若遺跡平成4年度発掘調査概要-----	1
2. 日置遺跡発掘調査概要-----	13
3. 祇園谷遺跡発掘調査概要-----	17
4. 上中遺跡第6次発掘調査概要-----	23
5. 鹿谷遺跡発掘調査概要-----	27
6. 平安京跡右京七条三坊二町発掘調査概要-----	67
7. 平安京跡左京一条二坊十町発掘調査概要-----	73

# 挿 図 目 次

<b>1. 天若遺跡</b>	
第1図	調査地位置図(1/50,000 京都西北部)-----1
第2図	調査トレンチ配置図-----3
第3図	検出遺構平面実測図-----5
第4図	検出土坑及び陥穴状遺構実測図-----8
第5図	出土遺物実測図-----9
第6図	縄文土器拓影-----11
第7図	縄文時代土坑及び陥穴状遺構分布図-----12
<b>2. 日置遺跡</b>	
第8図	調査地位置図(1/50,000)-----13
第9図	トレンチ位置図(1/2,000)-----14
第10図	出土土器実測図(1/4)-----15
<b>3. 祇園谷遺跡</b>	
第11図	調査地位置図・周辺遺跡分布図(1/50,000)-----17
第12図	周辺地形図(1/2,000)-----18
第13図	土層断面図(1/20)-----19
第14図	第1トレンチ遺構平面図(1/200)-----20
第15図	出土土器実測図(1/4)-----21
<b>4. 上中遺跡</b>	
第16図	上中遺跡と周辺遺跡分布図(1/25,000)-----23
第17図	トレンチ配置図-----24
第18図	トレンチ土層断面図-----25
第19図	遺物実測図-----26
<b>5. 鹿谷遺跡</b>	
第20図	調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)-----27
第21図	鹿谷遺跡トレンチ配置図-----28
第22図	第3トレンチ遺構平面図-----29

第23図	第9トレンチ遺構平面図	30
第24図	遺物実測図(1)	31
第25図	S H9207住居跡実測図(1/60)	32
第26図	S H9201住居跡実測図(1/60)	33
第27図	S H9202住居跡実測図(1/60)	34
第28図	S H9226住居跡実測図(1/60)	35
第29図	S H9229住居跡実測図(1/60)	36
第30図	S H9204住居跡実測図(1/60)	37
第31図	S H9205住居跡実測図(1/60)	38
第32図	S H9209住居跡実測図(1/60)	39
第33図	S H9211住居跡実測図(1/60)	40
第34図	S H9230住居跡実測図(1/60)	41
第35図	S H9239・S H9220住居跡実測図(1/60)	42
第36図	S H9240・S H9215住居跡実測図(断面図はS H9215住居跡 1/60)	43
第37図	S H9232・S H9236住居跡実測図(1/60)	44
第38図	S H9238住居跡実測図(1/60)	45
第39図	遺物実測図(2)	46
第40図	遺物実測図(3)	47
第41図	遺物実測図(4)	48
第42図	遺物実測図(5)	49
第43図	遺物実測図(6)	50
第44図	遺物実測図(7)	51
第45図	遺物実測図・拓本(8)	51
第46図	遺物実測図(9)	51
第47図	土師器分類模式図	52
第48図	甕形土器口縁部細部形態分類図	52
第49図	高杯口縁部細部形態分類図	52
第50図	高杯脚部細部形態分類図	52
第51図	高杯脚部接手法分類図	53
第52図	甕・高杯の細部形態の消長図	54
第53図	鹿谷遺跡土師器消長図	55
第54図	竪穴式住居跡及び支柱穴の規模分布図	57

第55図	S H9226住居跡竈断面図	58
第56図	鹿谷遺跡全調査区及び検出住居跡	59
<b>6. 平安京跡右京七条三坊二町</b>		
第57図	調査地位置図	67
第58図	調査地位置図	68
第59図	遺構実測図(1/250)	69
第60図	土層断面柱状図(1/60)	70
第61図	掘立柱建物跡平面図	71
第62図	出土土器実測図(1/4)	72
<b>7. 平安京跡左京一条二坊十町</b>		
第63図	調査地位置図(1/25,000)	73
第64図	調査トレンチ配置図	74
第65図	1 トレンチ土層断面図	75
第66図	2 トレンチ土層断面図	76
第67図	1 トレンチ遺構配置図	77
第68図	掘立柱建物跡 S B 149実測図	78
第69図	掘立柱建物跡 S B 150実測図	78
第70図	井戸跡実測図	79
第71図	土坑 S K 173実測図	80
第72図	2 トレンチ検出遺構平面図	81
第73図	漆喰溝 S D 210実測図	82
第74図	掘立柱建物跡 S B 253実測図	82
第75図	出土遺物実測図(1)	83
第76図	出土遺物実測図(2)	84
第77図	出土遺物実測図(3)	85
第78図	出土遺物実測図(4)	86
第79図	出土遺物実測図(5)	88

# 図 版 目 次

## 1. 天若遺跡

- 図版第1 (1) 空中写真(南西から) (2) 空中写真(南東から)
- 図版第2 (1) 土坑 S K 40j-P4 全景(西から) (2) 土坑 S K 35e-SK4 全景(東から)
- 図版第3 (1) 陥穴状遺構40a-SK3 全景(北東から)  
(2) 陥穴状遺構42h-P1(南東から)
- 図版第4 (1) 陥穴状遺構46i-P1 断面(南から)  
(2) 陥穴状遺構40a-SK3ほか復原(南西から)
- 図版第5 (1) 竪穴式住居跡 S H 9201 全景(北東から)  
(2) 竪穴式住居跡 S H 9202 全景(南東から)
- 図版第6 (1) 竪穴式住居跡 S H 9203 全景(南東から)  
(2) 竪穴式住居跡 S H 9204 全景(南東から)
- 図版第7 (1) 竪穴式住居跡 S H 9205 全景(南から)  
(2) 掘立柱建物跡 S B 9211 全景(南西から)
- 図版第8 出土遺物

## 2. 日置遺跡

- 図版第9 (1) 第1 トレンチ全景(東から) (2) 第1 トレンチ全景(西から)
- 図版第10 (1) 第2 トレンチ全景(西から) (2) 出土遺物

## 3. 祇園谷遺跡

- 図版第11 (1) 調査地遠景(中央奥の建物跡が周山廃寺)  
(2) 第1 トレンチ空中写真
- 図版第12 (1) 建物跡1 完掘状況(南から) (2) 溝1 完掘状況(南から)
- 図版第13 (1) 柱穴(P1) 完掘状況(東から) (2) 柱穴(P2) 完掘状況(西から)
- 図版第14 (1) 関連遺跡現況=周山廃寺= (2) 関連遺跡現況=周山瓦窯跡=

## 4. 上中遺跡

- 図版第15 (1) 調査地近景(西から) (2) 第1 トレンチ北壁深掘り部分  
(3) 第1 トレンチ全景(南から)
- 図版第16 (1) 調査後全景(南から) (2) 出土遺物

## 5. 鹿谷遺跡

- 図版第17 (1)調査地全景(北西から) (2)第9トレンチ調査風景(東から)
- 図版第18 (1)第3トレンチS H9207住居跡(南から)  
(2)S H9207高杯検出状況(22)  
(3)第3トレンチS H9207住居跡(南東から)
- 図版第19 (1)第3トレンチS H9201住居跡(南東から)  
(2)S H9201住居跡高杯検出状況(15)  
(3)S H9201住居跡高杯検出状況(24)
- 図版第20 (1)第3トレンチS H9204住居跡(南から)  
(2)S H9204住居跡竈内高杯転用支脚(67)  
(3)S H9204住居跡 P01土坑上検出遺物(38)
- 図版第21 (1)S H9204住居跡 P01土器検出状況(38・41)  
(2)S H9204住居跡 P01土坑上土器検出状況(59・74)  
(3)第3トレンチS H9202住居跡(南から)
- 図版第22 (1)第3トレンチS H9209住居跡(南から)  
(2)第3トレンチ遺構検出状況(西から)
- 図版第23 (1)第9トレンチS H9226住居跡(南から)  
(2)S H9226住居跡竈内高杯転用支脚(60・73)  
(3)S H9226住居跡竈半截状況(60・73)
- 図版第24 (1)第9トレンチS H9230住居跡(南から)  
(2)S H9230竈西側土器破碎状況  
(3)S H9230竈西側土器完掘状況
- 図版第25 (1)第9トレンチS H9229住居跡  
(2)S H9229住居跡内須恵器検出状況(46)  
(3)S H9229住居跡高杯検出状況(64)
- 図版第26 (1)第9トレンチS H9211住居跡竈内高杯検出状況(61)  
(2)第3トレンチS H9205住居跡(南から)
- 図版第27 (1)第9トレンチS H9215住居跡(南から)  
(2)S H9215住居跡内柱穴検出状況  
(3)S H9215住居跡床面遺物出土状況
- 図版第28 (1)第9トレンチS H9220住居跡(中央)及びS H9219住居跡(左上)(南から)  
(2)第9トレンチS H9239住居跡(南から)

- 図版第29 (1)第9トレンチS H9228住居跡(中央)(南から)  
(2)第9トレンチS H9238住居跡(南から)
- 図版第30 (1)第9トレンチ遺構検出状況(東から)  
(2)第9トレンチ遺構検出状況(北から)
- 図版第31 (1)第3トレンチ全景(東側は亀岡市教育委員会調査地)  
(2)第9トレンチ全景
- 図版第32 出土遺物(1)
- 図版第33 出土遺物(2)
- 図版第34 出土遺物(3)
- 図版第35 出土遺物(4)
- 図版第36 出土遺物(5)

#### 6. 平安京跡右京七条三坊二町

- 図版第37 (1)調査地遠景(右下が調査地：1992年11月撮影)  
(2)トレンチ空中写真
- 図版第38 (1)調査地及び道祖大路・七条坊門小路全景 (2)土層堆積状況(西から)
- 図版第39 (1)トレンチ全景(北から) (2)建物跡1検出状況(北から)
- 図版第40 (1)柱穴(P6)完掘状況(北から) (2)柱穴(P7)完掘状況(北から)

#### 7. 平安京跡左京一条二坊十町

- 図版第41 (1)1トレンチ全景(南から) (2)2トレンチ全景(北から)
- 図版第42 (1)S K146遺物出土状況 (2)S K173検出状況(北から)
- 図版第43 出土遺物(1)
- 図版第44 出土遺物(2)
- 図版第45 出土遺物(3)
- 図版第46 出土遺物(4)

## 付 表 目 次

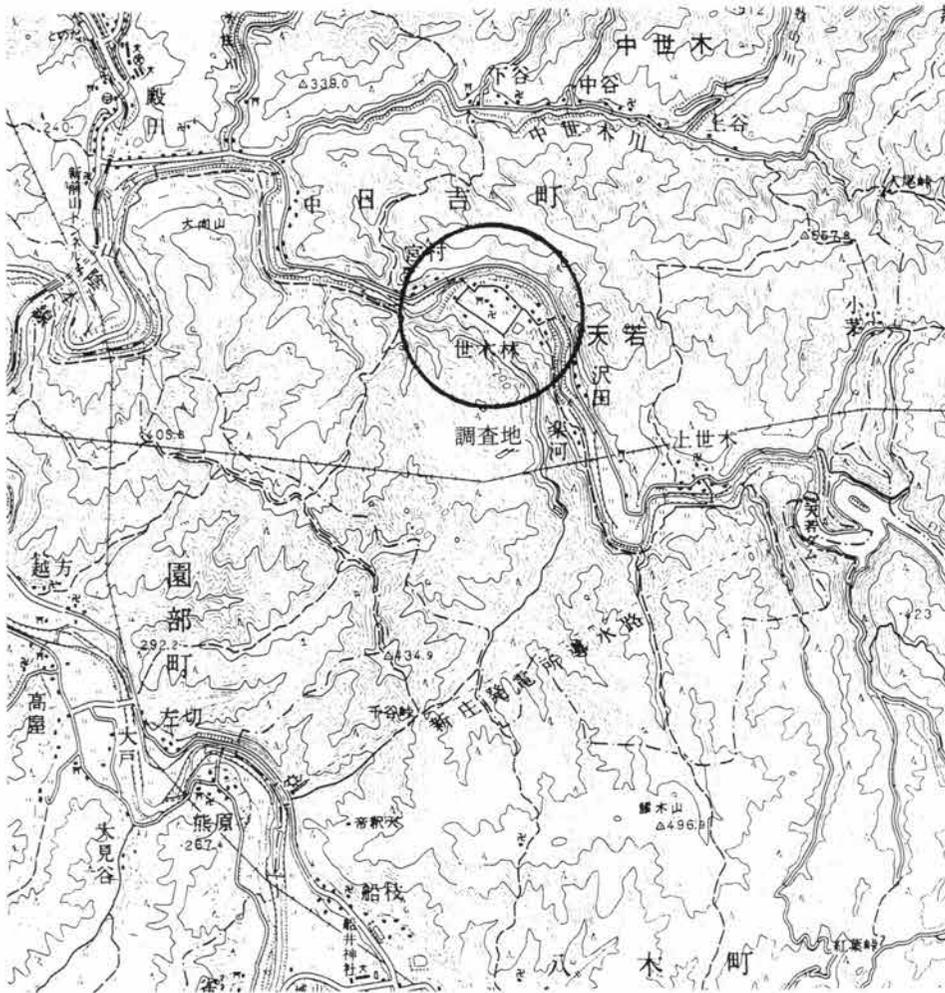
5. 鹿谷遺跡	
付表1 出土遺物觀察表-----	61
7. 平安京跡左京一条二坊十町	
付表2 出土遺物觀察表-----	89

# 1. 天若遺跡平成4年度発掘調査概要

## 1. はじめに

天若遺跡の調査は、日吉ダムの建設が計画され水没地となることから、水資源開発公団の依頼を受け、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが平成元年度から継続している。

平成4年度の現地調査は、平成4年4月20日から平成4年9月18日まで行った。掘削面積は、約3,200㎡で、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員



第1図 調査地位置図(1/50,000 京都西北部)

三好博喜・八木政明・野島 永が担当した。本概要の執筆は三好・八木が行い、文末に明記した。なお、挿図中の方位は第Ⅵ座標系の座標北を示している。

現地での調査及び整理作業にあたっては、地元有志ならびに学生諸氏<sup>(注1)</sup>、日吉町教育委員会・世木財産区管理委員会をはじめ、多くの方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

なお、調査に係る費用は、全額、水資源開発公団が負担した。

(三好博喜)

## 2. 調査の経過

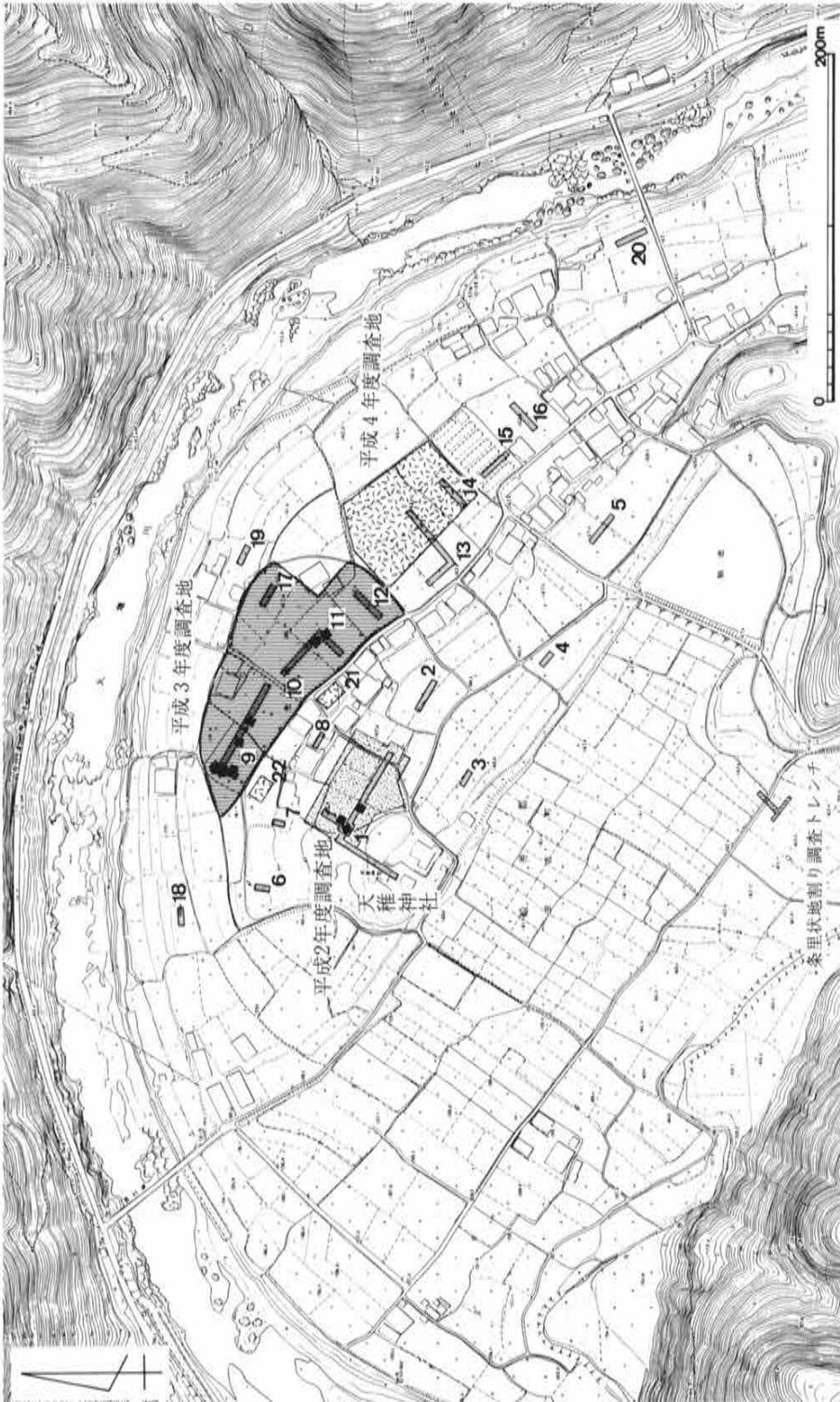
昭和47年、「淀川水系における水資源開発基本計画」が公示され、日吉ダムの建設計画が明らかにされた。その後、水没地域には天若遺跡が存在することが明らかとなり、平成元年度から当調査研究センターが主体となって発掘調査を実施することとなった。

天若遺跡は京都府船井郡日吉町天若小字森形ほかにあり、遺跡の範囲は旧世木林集落の地域にあたる。遺跡は、丹波山地を流れる桂川が形成した河岸段丘上に立地しており、調査地での標高は、162m程度を測る。天若遺跡の周辺地域での埋蔵文化財の分布密度は希薄であり、古代の状況は明らかではない地域であった。中世以後、文献史料に散見するようになるものの、史料が豊富となるのは近世以後である。

平成元年度の試掘調査は、約20,000㎡の調査対象地内に20か所のトレンチを設定した。この試掘調査で天若遺跡が古墳時代から江戸時代まで断続的に形成された集落遺跡であることを確認した。平成2年度は、元年度試掘調査の1トレンチ周辺を約2,000㎡にわたって拡張した。調査の結果、古墳時代の竪穴式住居跡5棟、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡6棟以上、奈良時代の井戸跡1基、飛鳥時代の土坑1基などのほか、時期不明の土坑やピットなどを多数検出した<sup>(注2)</sup>。第2次調査では、古墳時代集落が形成されて以降、飛鳥時代、奈良時代、平安時代と引き続いて集落が営まれていたことを確認できた。

平成3年度は第3次調査として、元年度試掘調査の9～12トレンチ及び17トレンチ周辺を約6,900㎡にわたり拡張した。調査の結果、古墳時代の竪穴式住居跡28棟、掘立柱建物跡1基、縄文時代の土坑2基などのほか、時期不明の土坑やピットなどを多数検出した<sup>(注3)</sup>。また、条里状の水田地割りの残る地域についても、調査の可能な地点にトレンチを設け調査した。しかし、期待した成果を挙げることはできなかった。第3次調査では、古墳時代の集落の中心と思われる地点と、縄文時代から人々の往来が確実にあったことを確認した。

平成4年度は第4次調査として、元年度試掘調査の13・14トレンチ周辺を約3,200㎡にわたって拡張した。また、現代まで家屋が建ち並んでいた地域についても調査可能な地点にトレンチを設け、調査を行った(21・22トレンチ)。



第2図 調査トレンチ配置図

1~20:平成元年度試掘トレンチ ■印:試掘調査時検出竪穴式住居跡

重機掘削は、平成4年4月20日から6月16日までのうちの26日間で行い、その後人力で掘削を行った。基本的な層位は、耕作土・床土・茶褐色土・黄褐色土・礫層の順であり、遺構はほぼ全域で耕作土・床土を除去した時点で現われた。ただし、北東側を中心として茶褐色土の存在しない部分も多かった。茶褐色土の存在する部分では、竪穴式住居跡の埋土も茶褐色に近い土色を呈しているため、明確に住居跡として判断がついたのは黄褐色土地山上面まで掘削した時点である。このことから本来の遺構は、茶褐色土層中から掘り込まれていたものと思われる。調査の結果、竪穴式住居跡5棟・掘立柱建物跡2棟、縄文時代の土坑2基・陥穴状遺構17基をはじめ土坑・ピットなどを多数検出した。これら人力による掘削作業は、平成4年9月11日に終了した。写真撮影、測量・実測作業はその都度行い、平成4年9月18日にはすべての現地作業を終了し、撤収した。なお、平成4年9月4日に現地説明会を実施している。なお、現地調査は第4次調査をもって終了した。

また、今回の調査地の地区割りは、第3次調査の地区割りを踏襲し、1a杭を起点とした任意の5m方眼を用いた。ラインの名称は、縦軸に算用数字を、横軸にアルファベットをそれぞれ付した。地区名称は、東側交点を地区名とした。なお、31d杭の座標値は、 $X=-95,029.523$ ・ $Y=-42,172.600$ である。

(三好博喜)

### 3. 平成4年度検出遺構

今回検出した遺構には竪穴式住居跡5棟、掘立柱建物跡2棟、縄文時代の土坑2基・陥穴状遺構17基などのほか、多数の土坑・ピットがある(第3図)。

#### (1)竪穴式住居跡

S H9201 44a地区付近で検出した一辺4.6mを測る正方形の竪穴式住居跡である。遺存状況は悪い。主柱穴は4本で、南西側壁中央に竈を設けている。竈は焼土だけを検出した。北側主柱穴脇には甕を据えたピットがある。

S H9202 43a地区付近で検出した長辺約4.8m×短辺約4.0mを測る方形の竪穴式住居跡である。遺存状況はきわめて悪く、壁はほとんど残っていない。主柱穴は4本で、北西側壁中央に竈を設けている。竈は焼土だけを検出した。支脚として用いられたチャート系統の立石がある。

S H9203 43c地区付近で検出した一辺約6.2mを測る正方形の竪穴式住居跡である。遺存状況はきわめて悪く、壁はほとんど残っていない。主柱穴は4本で、北西側壁中央に竈を設けている。竈は焼土だけを検出した。南東壁に沿って遺物がまとまって出土した。

S H9204 38e地区付近で検出した長辺約5.1m×短辺約4.8mを測る方形の竪穴式住居



第3図 検出遺構平面実測図

跡である。遺存状況は悪い。主柱穴は4本で、西側壁中央に竈を設けている。竈はチャート系の石材を焚き口に2石立て、さらにチャート系の石材を架けて構築していたようである。支脚として用いられたチャート系統の立石もある。

S H9205 37g地区付近で検出した東西辺約4.5mを測る方形の竪穴式住居跡である。遺存状況は悪く、南側の壁を検出できなかった。主柱穴は4本で、北側壁中央に竈を設ける。竈はチャート系の石材を焚き口に2石立て、さらにチャート系の石材を架けて構築していたようである。支脚として用いられたチャート系統の立石もある。

## (2) 掘立柱建物跡

S B9211 38b地区付近で検出した。2間×3間の総柱の建物跡で、柱間寸法は、梁間約3.6m(約1.2尺)・桁行約4.1m(約1.4尺)を測る。時期は不明である。

S B9212 45f地区付近で検出した。不明な部分もあるが3間×5間の建物跡で、柱間寸法は、梁間4.8m(約1.6尺)・桁行6.7m(約2.2尺)を測る。時期は不明である。

## (3) 土坑

土坑40j-P4 40j地区で検出した土坑で、長さ約1.7m・幅約1.0m・深さ約0.4mを測る。土坑底は平坦である。上部に自然石が置かれており、土壙墓となる可能性が高い。土坑底付近から縄文土器が出土した。

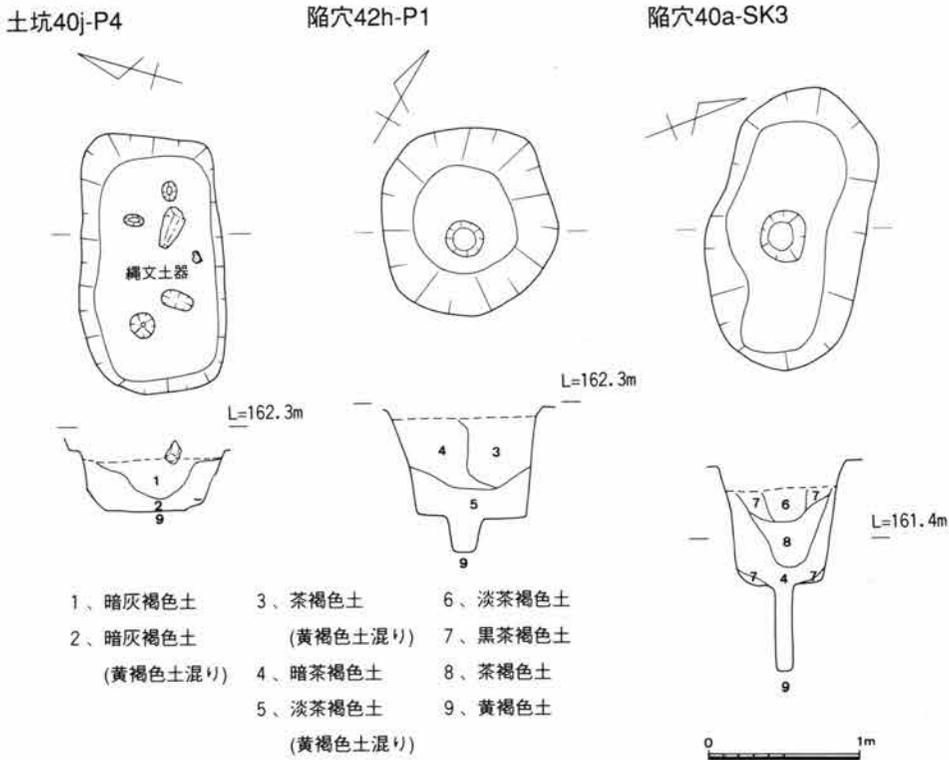
土坑35e-SK4 35e地区付近で検出した土坑で、長さ約2.7m・幅約1.4m・深さ約0.6mを測る。土坑底は平坦である。土坑内から縄文土器に酷似した胎土をもつ土器片が出土した。

## (4) 陥穴状遺構

土坑底面にピットをもつものを陥穴状遺構として認識した。今回は陥穴状遺構36i-P2、陥穴状遺構37i-P3、陥穴状遺構39j-P4、陥穴状遺構40h-P7、陥穴状遺構42h-P1、陥穴状遺構46i-P1、陥穴状遺構38d-SK1、陥穴状遺構38d-SK2、陥穴状遺構41d-SK1、陥穴状遺構42e-P2、陥穴状遺構40b-P1、陥穴状遺構40b-P2、陥穴状遺構40a-SK3、陥穴状遺構41b-P9、陥穴状遺構42b-P2、陥穴状遺構43a-SK1、陥穴状遺構44b-SK1の17基を検出した。

ほとんどの陥穴状遺構は、径1.5m前後・現存する深さ1m前後を測る円形土坑状を呈し、土坑底に径0.3m程度・深さ0.3～0.5m程度のピットを一つもつ。長楕円形を呈するものには陥穴状遺構37i-P3と陥穴状遺構40a-SK3とがある。陥穴状遺構40a-SK3は、長さ1.9m・幅1.0m・現存する深さ0.8mを測る長楕円形の土坑である。土坑底に径25cm程度・深さ50cm程度のピットを一つもつ。

出土遺物はほとんどないが、陥穴状遺構39j-P4及び陥穴状遺構42h-P1内から縄文土器に近似する胎土をもつ土器片が出土したことや周辺から縄文時代後期前半期の土器片が出土していることから、これらの陥穴状遺構は縄文時代後期前半期に構築された可能性が高い。



第4図 検出土坑及び陥穴状遺構実測図

このような観点からこれまでの調査で検出した土坑を再検討すると、少なくとも24基の陥穴状遺構が存在することがわかる。

(三好博喜)

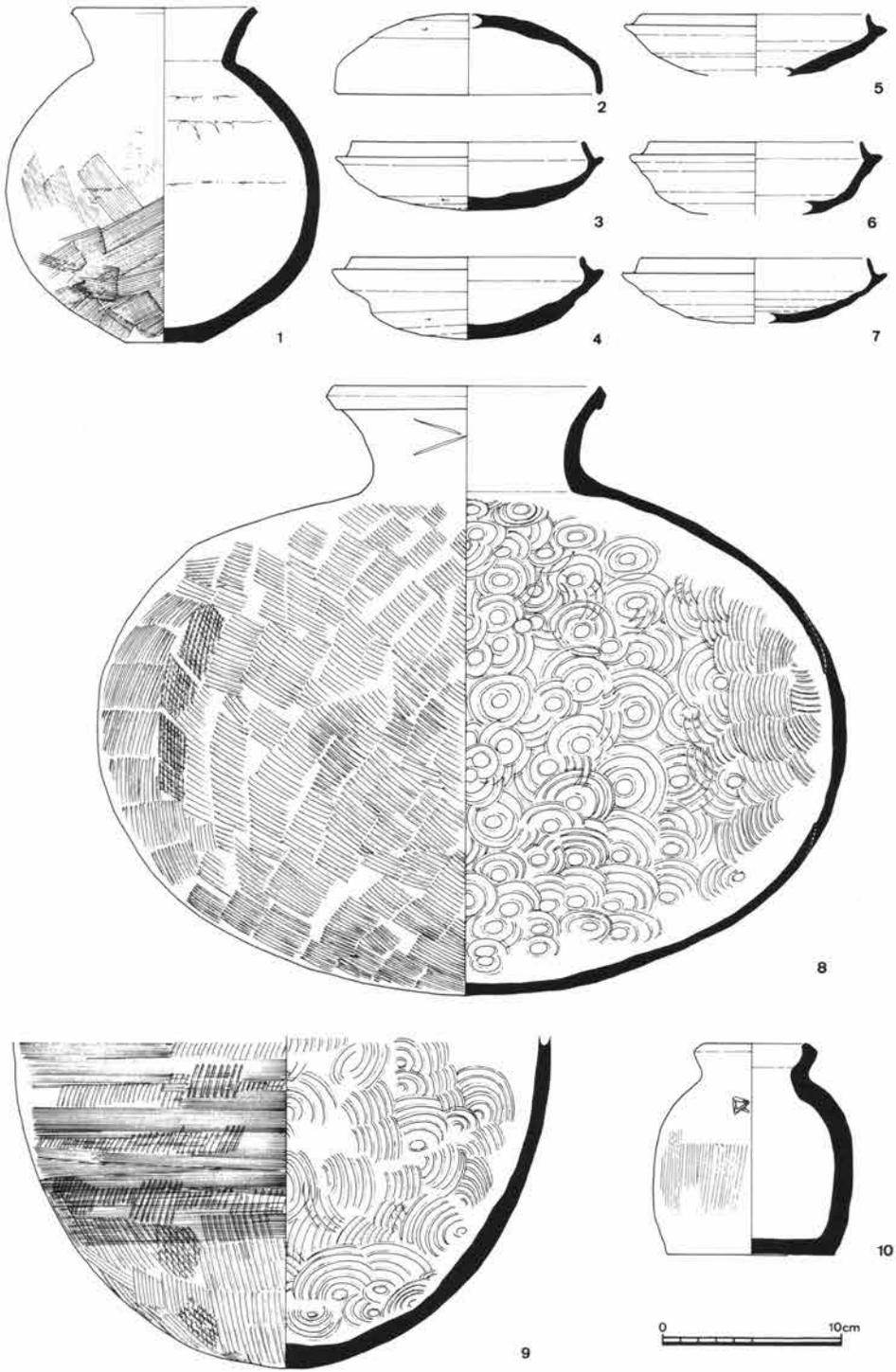
#### 4. 出土遺物

第4次調査での出土遺物の総量は、整理箱5箱程度である。ほとんどが土師器や須恵器・瓦器で、縄文土器が少量ある。ここでは、整理の進んだ一部の遺物(第5・6図)について記述し、詳細については最終年度に改めて報告を行う予定である。

(三好博喜)

**S H9201出土遺物(第5図9)** 9は、須恵器甕の底部である。平行タタキの後に細かいカキ目を施す。色調は淡青灰色である。住居跡内のピット中に据えられた状態で出土したため、口縁部を打ち欠いて再利用した可能性もある。

**S H9203出土遺物(第5図2～4・8)** 8は須恵器の横瓶である。口径14.9cm・器高34.3cmを測る。片方に穴ふさぎの痕跡を残す。体部は大半を左上がり、ふさいだ部分の



第5図 出土遺物実測図

み垂直方向にタタキを施す。口縁部は全体を完成した後、貼り付けている。口縁部にヘラ記号を残す。色調は灰白色である。年代は6世紀後半のものと考えられる。

2は須恵器の杯蓋である。口径14.6cm・器高4.6cmを測る。ヘラケズリは右回りに施す。天井部付近は未調整である。かすかにマキアゲ痕が残る。色調は暗灰色で、他と異なる。

3・4は須恵器の杯身である。3は口径12.8cm・器高3.8cmを測る。ヘラケズリは右回りで、底部全体の約1/2に及ぶ。見込み部分に幅7mmの粘土紐マキアゲ痕が残る。胎土には砂粒を多く含む。4は口径12.8cm・器高4.8cmを測る。受け部下端にはヘラにより、波状の文様を刻む。底部中位には強い横ナデにより段が生じている。

これらの須恵器は陶邑編年TK43型式の新相に属し、6世紀後半のものと考えられる。

S H9204出土遺物(第5図5～7) 5～7は須恵器の杯身である。5は口径12.7cm・器高3.5cmを測る。ヘラケズリは右回りで、底部全体の約2/3に及ぶ。受け部の蓋の端部が融着し、蓋をしたまま焼成したと考えられる。見込み部分に粘土紐マキアゲ痕が残る。6は口径11.8cm・器高4.0cmを測る。ヘラケズリは左回りで、底部全体の約1/3に及ぶ。底部は中位より強く屈曲して立ち上がるのが特徴である。7は口径12.6cm・器高3.7cmを測る。ヘラケズリは右回りで、底部全体の約1/2に及ぶ。外面が内面に比べて荒れており、蓋をしたまま焼成したと考えられる。

これらの須恵器は陶邑編年TK209型式に並行し、6世紀末のものと考えられる。

21トレンチ出土遺物(第5図10) 10は丹波焼の壺である。口径5.6cm・底径9.3cm・器高12.0cmを測る。徳利形の平底の土器である。体部下半には荒いハケ目がみられる。肩部にヘラ記号を残す。一方に注ぎ口が付き、その内面にヘラで溝を作る。16世紀後半のものと考えられる。

22トレンチ出土遺物(第5図1) 1は土師器の甕である。復原口径9.8cm・底径4.2cm・器高18.9cmを測る。球形の体部に短く外反する口縁部をもつ平底の土器である。体部下半は右上がり、上半は左上がりの斜めのハケを施す。両者の境目の内面には接合痕が残り、分割成形の可能性がある。片面には下半に、その反対側には上半に煤が付着する。これは一方から火を受けて使用されたことを示し、竈のような火所かけられたものである。色調は橙褐色である。年代は古墳時代前期にさかのぼる可能性がある。

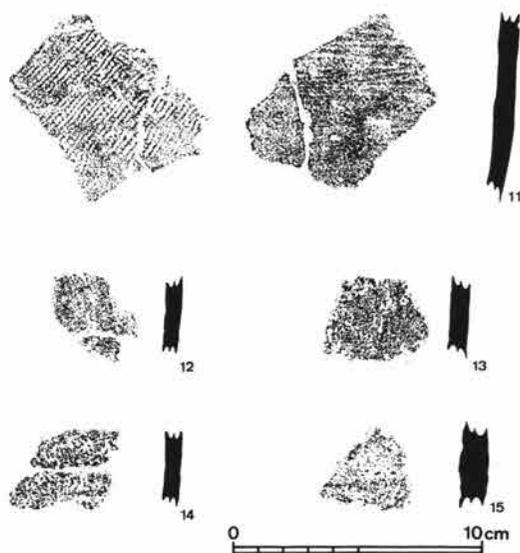
(八木政明)

#### 縄文土器(第6図11～15)

11～15は第4次調査において、遺構内から出土した縄文土器もしくは縄文土器に酷似した胎土をもつ土器である。11は土坑40j-P4から出土した。RLの縄文を施し、上部に沈線が一条認められる。裏面には条痕調整が施されている。縄文時代後期前半期、北白川上層式

土器に類似する土器である。12は土坑35e-SK4から出土した。施文は認められない。胎土に金雲母などを含み、縄文土器に近い胎土を示す。13・14は陥穴状遺構39j-P4から出土した。施文は認められない。いずれも胎土に金雲母・長石・石英などを含み、縄文土器に近い胎土を示す。15は陥穴状遺構42h-P1から出土した。施文は認められない。胎土に長石・石英などを多量に含み、縄文土器に近い胎土を示す。

(三好博喜)



第6図 縄文土器拓影

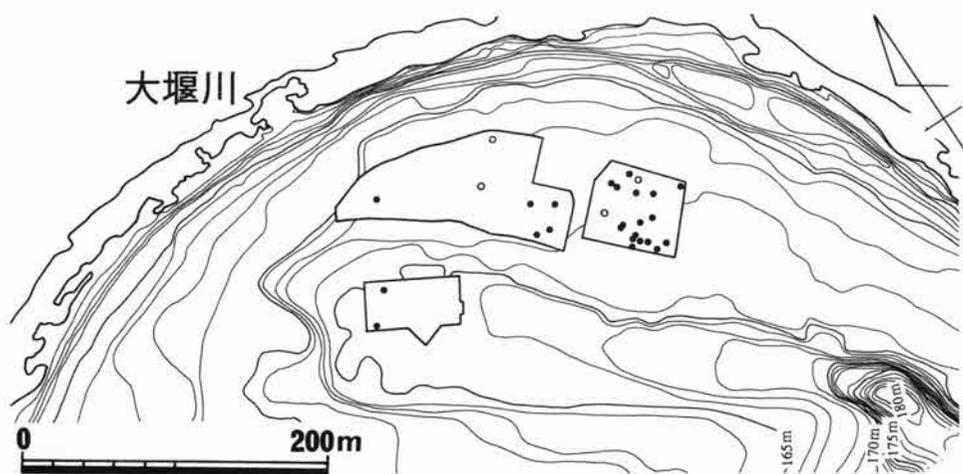
11. 土坑40j-P4    12. 土坑35e-SK4出土  
13・14. 陥穴状遺構39j-P4出土  
15. 陥穴状遺構42h-P1出土

#### 4. ま と め

縄文時代の陥穴状遺構を多数検出したことで、この台地が狩猟の場所であったことが判明した(第7図)。縄文時代の陥穴状遺構は、関東及び中部や東北・北海道といった東日本地域や九州・中国といった西日本地域では数多く調査されている。しかし、これまで近畿でのまとまった調査例は稀であった。今回の調査により、陥穴を用いた狩猟方法は地域的な狩猟方法ではなく、縄文時代を通じて日本各地で行われていた狩猟方法であることが確認できた。

また、台地上では縄文時代の住居跡は検出できておらず、縄文時代の集落は別地点に求めざるをえない。台地前面を流れる大堰川沿いでは、周山盆地もしくは園部盆地まで出なければ定住できるようなまとまった平地はなく、いずれも5 km以上の距離がある。縄文時代のテリトリーを考えるうえでは、こうした地域での調査成果が期待される。

古墳時代後期の集落を確認したことにより、天若遺跡が丹波山地の谷間に位置するにもかかわらず、この地域の開発が比較的早くから行われていたことが確かめられた。大堰川の最上流地域である周山盆地の地域は、遅くとも弥生時代には開発が行われていたことが知られている。天若遺跡は、この周山盆地と亀岡盆地とを繋ぐ交通の要衝にあっていたものと考えられる。これまでに検出した古墳時代の竪穴式住居跡は38棟にのぼり、集落の主要部分については調査できたものと理解している。これらの住居跡は、出土遺物からみて、6世紀初頭から7世紀半ば頃まで間断なく数棟ずつの単位で存在していたことが予測



第7図 縄文時代土坑及び陥穴状遺構分布図

○;土坑 ●;陥穴状遺構

される。住居の規模をみると、群を抜いて大きなものが数棟存在しており、一時期に一棟的なあり方らしい。一集落内における住居の変遷や居住域内での住居の構成などがある程度理解できそうであり、詳細な検討が必要であろう。

これまでの調査で、縄文時代の土坑4基・陥穴状遺構24基、6世紀から7世紀前半期にかけての竪穴式住居跡38棟、7世紀後半期の土坑1基、8世紀前半期の井戸跡1基、及び奈良時代から平安時代にかけてと思われる掘立柱建物跡数棟を検出した。また、遺物には、縄文時代の土器及び石器・石片や、弥生時代及び古墳時代前半期の石器、古墳時代の土師器・須恵器、中世の瓦器や陶器・磁器などがある。このことから古くから人々の営みがあり、古墳時代後期には集落が形成されていたことが確認できた。今後、詳細に検討したい。

(三好博喜)

注1 平成4年度調査参加者

橋本 稔・吉田 靖・木村隆之・水谷幸子・吉田八重子・浅井義久・中川美津枝・和田 豊・中川幸三・俣野加代子・中川亀三・近藤久雄・谷 春子・野瀬 弘・上手安一・寺田あき・香川友子・栃下富江・木村恵子・横井裕子・栃下 緑・井上恵子・田村末雄・石橋愛子・山田きん子・湯浅義雄・中川君代・平野すまえ・片山八重子・湯浅彰朗・西田笑子

注2 日吉ダム水没地区文化財等調査委員会『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』日吉町 1988

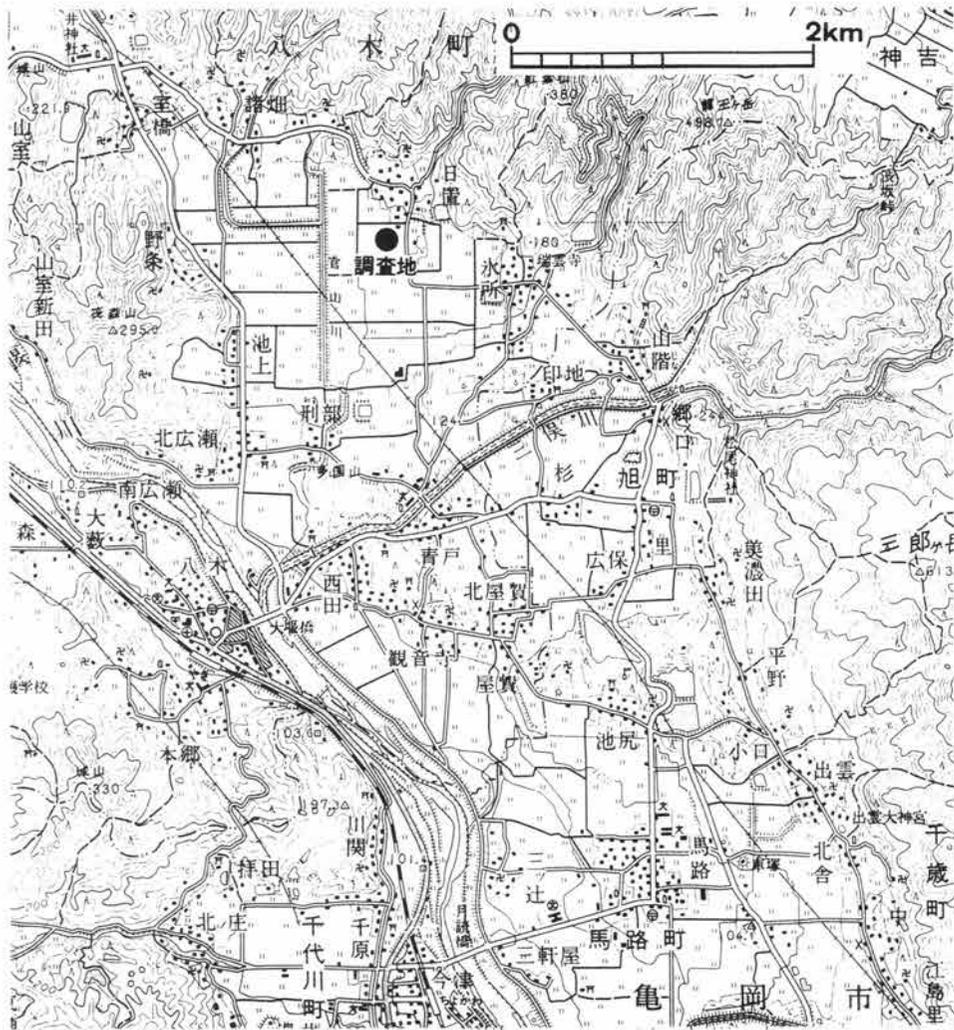
注3 三好博喜・鍋田 勇「天若遺跡平成元・2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第42冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注4 三好博喜・柴 暁彦・野島 永「天若遺跡平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第48冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

## 2. 日置遺跡発掘調査概要

### 1. はじめに

日置遺跡は、京都府船井郡八木町日置(第8図)に所在する遺物散布地であり、今回の発掘調査は、京都府南丹土地改良事務所が計画・施工する府営圃場整備事業に伴う事前調査である。発掘調査は、遺構・遺物が検出される可能性が高いか所に合計320m<sup>2</sup>、2か所に



第8図 調査地位置図(1/50,000)

トレンチを設定し、平成4年8月10日から同年9月2日の期間行った。その結果、明確な遺構の検出が見られなかったため、京都府南丹土地改良事務所・京都府教育委員会・八木町教育委員会に調査成果を随時、公表し、現地調査を終了した。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長 奥村清一郎、同調査員 小池寛が担当した。また、本概要報告の執筆・編集は小池が行った。

発掘調査を進めるにあたり、八木町教育委員会をはじめ、関係諸機関の方々からは、多くの御協力をえた。また、酷暑の中、調査に従事された地元の方々にあわせて感謝の意を表したい。<sup>(註1)</sup>なお、本調査に係わる経費は、すべて京都府農林水産部が負担した。

## 2. 周辺の歴史的環境

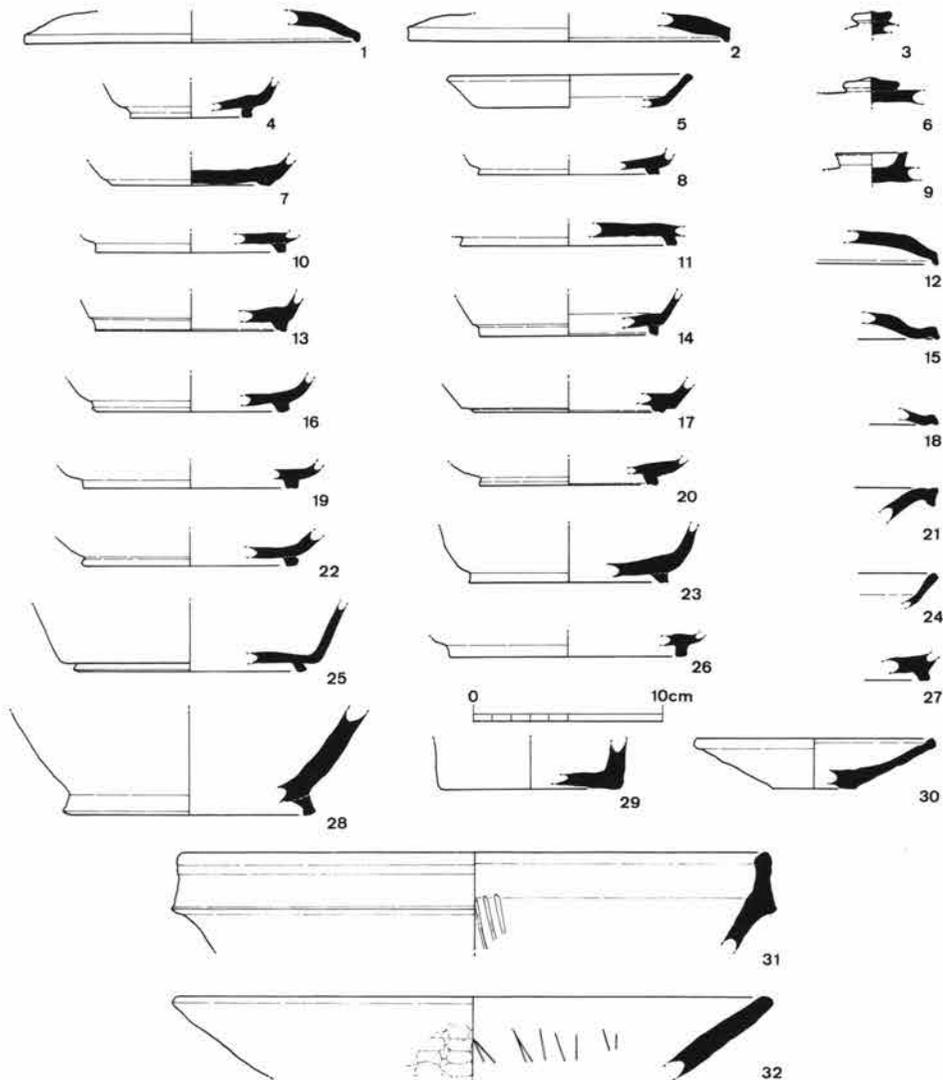
日置遺跡が所在する周辺地域の考古学的調査はなく、確実な遺跡を挙げることはできな



第9図 トレンチ位置図(1/2,000)  
(第2トレンチ西方網部は、遺物包含層を示す。)

いが、分布調査などによってその存在が確認されている遺跡としては、日置遺跡の西北200mの丘陵端に横穴式石室を埋葬主体部とする西上里古墳群や西方600mの丘陵の鎧塚古墳がある。これらに伴う集落は現在確認されていない。

一方、日置遺跡と同時代の遺跡は、現在知られていないが、それ以後の遺跡としては、鎧塚古墳を取り囲むように、中世か近世の城館に伴う堀割が確認されている。八木町内でも当該地域一帯は、遺跡が希薄な地域ではあるが、今後、関連遺跡が確認されれば、歴史的環境を更に詳細に復原できる。



第10図 出土土器実測図(1/4)  
1~29. 遺物包含層 30~32. 土坑 1

### 3. 調査概要

#### (1)基本層序

第1トレンチ・第2トレンチを設定した周辺の地形は、階段状を呈しており、20cm前後の耕作土・床土が遺物包含層上層に堆積している。遺物包含層は、第2トレンチ全面で確認できたが、主に、西方に集中している。

#### (2)遺構(第9図、図版第9・第10-(1))

第1トレンチでは、明確な遺構・遺物包含層を検出し得なかった。第2トレンチでは、トレンチのほぼ中央で、ピット・近世土坑を検出した。ピットは、遺物包含層を除去した段階で検出した。直径30cm・深さ20cmを測るが、出土遺物は検出できなかった。近世土坑は、直径40cmを測り、摺鉢31・32と皿30が出土している。

#### (3)出土遺物(第10図、図版第9・第10-(2))

出土遺物の多くは細片であり、反転復原によって図化した資料が大半であるが、日置遺跡の帰属時期を示す資料群でもあり、図示を行った。

須恵器・蓋は、口縁端部が垂下する型式で、扁平なつまみをもつ3・6と環状つまみの9に分類できる。杯身は、貼り付け高台が底部と体部の稜線よりも内方に付く。

近世陶器・摺鉢32は、信楽焼であり、単体の摺目が観察できる。

### 4. まとめ

今回の発掘調査地は、現在の日置集落の南西隣接点にあたり、南西に階段状に傾斜する地形の最高点に位置する。また、分布調査時に土器群が表面採集された地点を中心にトレンチを設定して、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、西方に位置する第1トレンチでは、明確な遺構も存在せず、遺物の出土も見られなかった。また、第2トレンチでは、希薄ではあるが、トレンチ全面で遺物包含層を確認し、ピット・近世土坑を検出した。各々の遺構は、関連遺構が検出されていない現状では、その性格を論じることはできないが、遺物包含層の土器群から奈良時代に何らかの土地利用があったものと考えられる。しかし、出土遺物の大半がローリングを受け、細片であることを考えれば、現在の日置集落周辺に何らかの施設が存在した可能性が想定できる。

(小池 寛)

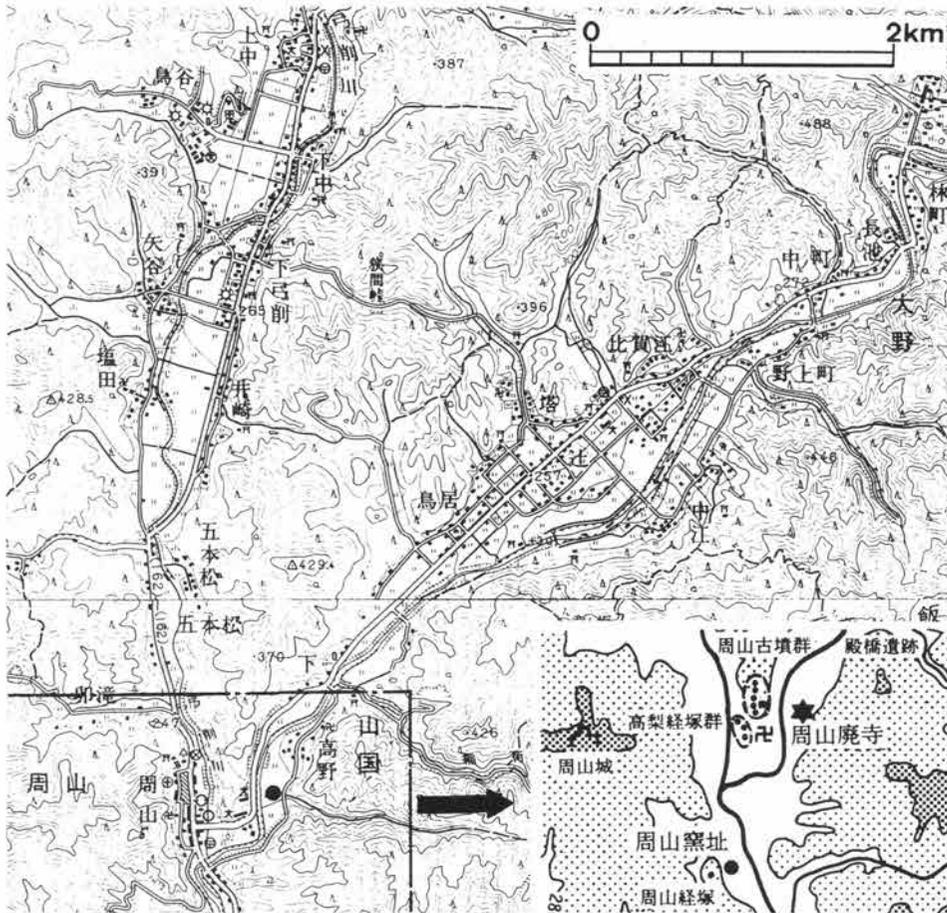
注1 調査参加者(順不同・敬称略)

前田暁宏・西川悦子・小田栄子・森川敦子・中瀬かほり・馬淵和子・浅田きぬえ・浅田彩子・馬淵幸栄・浅田 勉・八木勝郎・中川恵子・中川艶子・中川よし子・中川清子・中川晴美・浅田サダ枝・浅田一枝

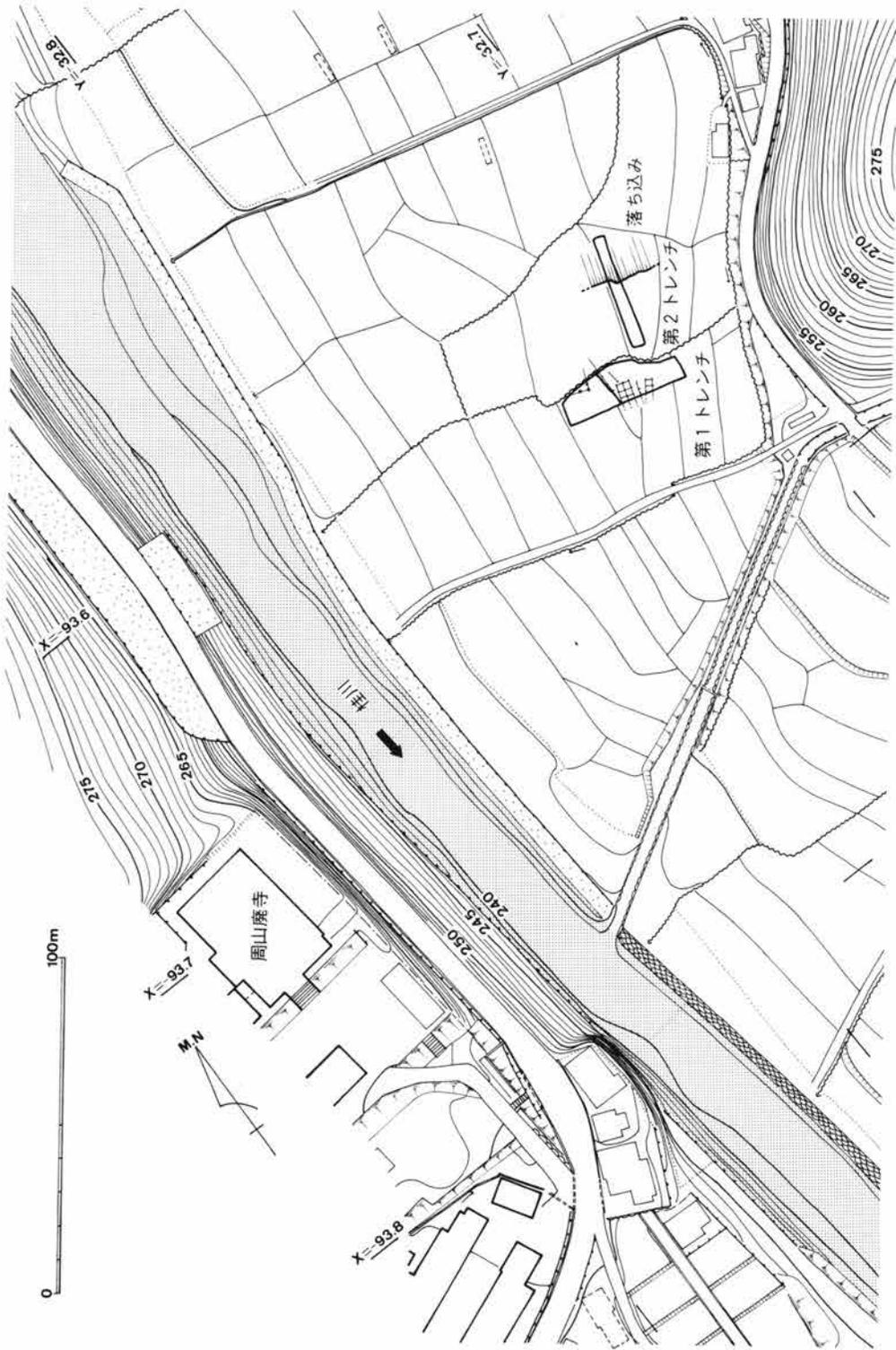
### 3. 祇園谷遺跡発掘調査概要

#### 1. はじめに

祇園谷遺跡は、北桑田郡京北町大字下小字谷川尻に所在する集落跡である。今回の発掘調査は、京都府中丹土地改良事務所が計画・施工する府営圃場整備事業に伴う事前調査である。発掘調査は、1991年11月に京都府教育委員会が行った立会調査の成果を参考にして、2か所に合計410㎡のトレンチを設定して実施した。調査期間は、平成4年7月6日から同年8月11日までで、調査成果の一部は、同年8月5日に行った現地説明会で公表した。<sup>(注1)</sup>



第11図 調査地位置図・周辺遺跡分布図(1/50,000)  
(分布図は、注3に加筆・転載：星印が調査地)



第12図 周辺地形図(1/2,000)

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長 奥村清一郎、調査員 小池寛が担当し、本概要報告は、小池が執筆・編集を行った。調査経費は、京都府農林水産部が負担した。

## 2. 歴史的環境

祇園谷遺跡が所在する京北町には、旧石器・縄文時代に帰属する遺構・遺物の存在は確認されていないが、弥生時代になると、下弓削の扁平鈕式四区袈裟襷文銅鐸や北桑田高校校地内の上中遺跡などが見られる。古墳時代では、弓削川・大堰川の東西丘陵部に古墳群が築造される。特に、六獣鏡や石製装身具が出土した愛宕山古墳の存在は、当該地が、日本海沿岸部と畿内周辺を結ぶ、交通路上の要地であったことをうかがわせている。<sup>(注2)</sup>

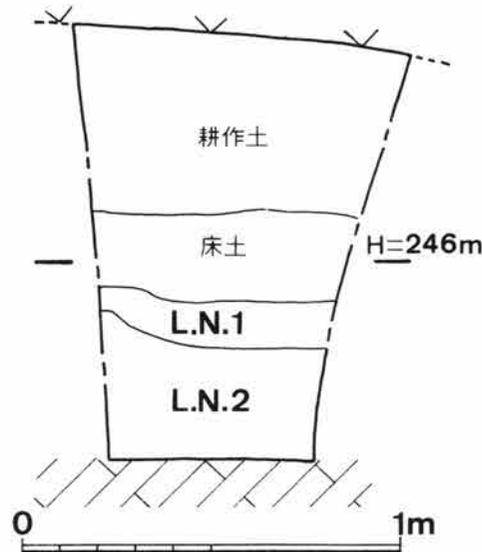
祇園谷遺跡は、後述するように奈良時代の集落跡であるが、直接的・間接的に関連する遺跡について概観しておく。当該遺跡から桂川を挟んで西方の丘陵部には、飛鳥時代末期から奈良時代にかけて建立された周山廃寺が位置している。<sup>(注3)</sup> 周山廃寺は、1947年に東京帝室博物館(石田茂作代表)が発掘調査を行い、「塔址・東堂址・中堂址・北堂址・西堂址・南門址」の建物跡を確認した。また、川原寺式線鋸齒文緑複弁八葉蓮華文軒丸瓦や施釉陶器が出土しており、「□田部連君足」の窺描きをもつ平瓦も出土している。

周山廃寺から南方には、周山廃寺に瓦を供給した周山瓦窯跡が所在する。<sup>(注4)</sup> 1980～1981年に京北町教育委員会の依頼を受け、京都大学文学部考古学研究室が発掘調査を行った。4基の瓦陶兼業窯跡が確認され、須恵器・軒丸瓦・平瓦・丸瓦のほか、「大家皿」の窺描きをもつ直口壺などが確認されている(第11図、図版第11-(1)・第14)。

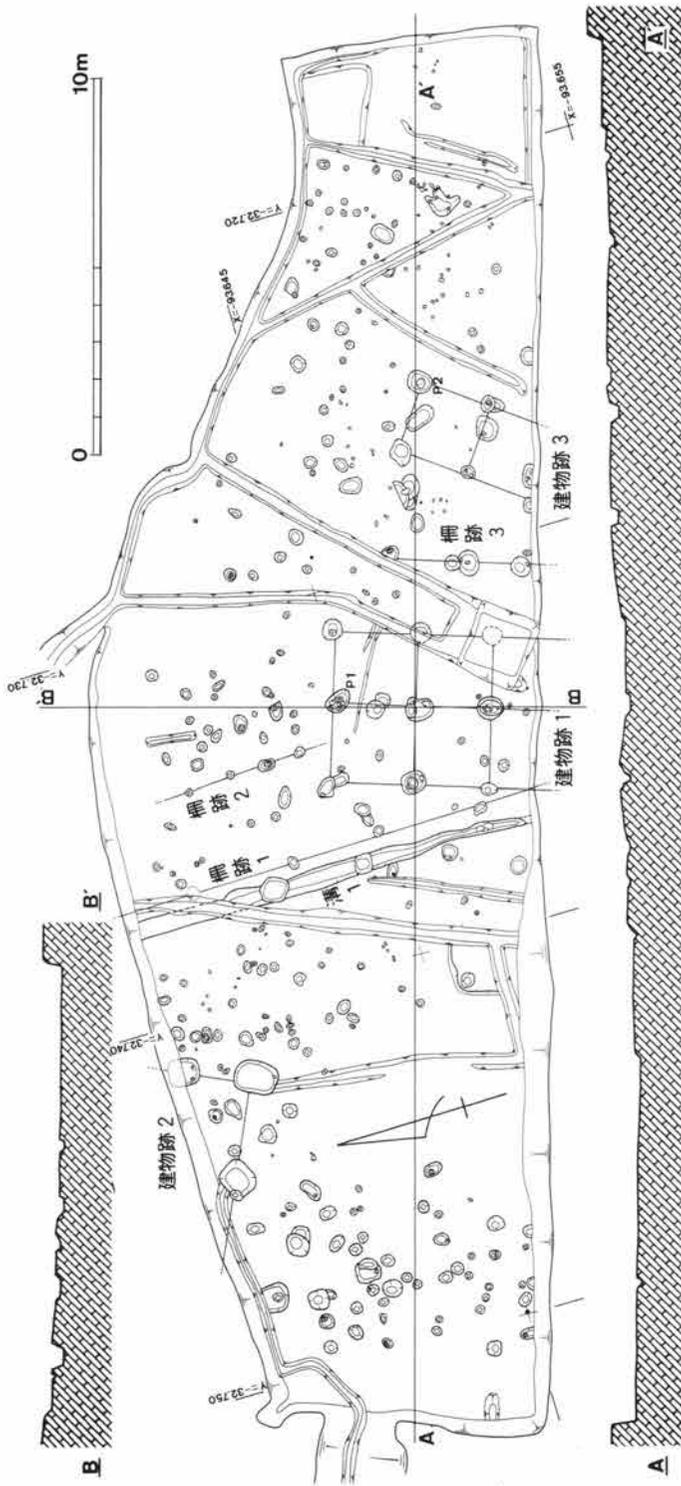
## 3. 調査概要

### (1)基本層序(第13図)

祇園谷遺跡は、先述した周山廃寺から桂川を挟んだ北方の平坦地上にある。基本的な標高は、246mを測り、東方から西方にかけて緩やかに傾斜している。柱穴・溝を検出した遺構面(L.N.2)の直上には、わずかではあるが遺物包含層が確認できる。その上層に、耕作土・床土が



第13図 土層断面図(1/20)



60cm堆積している。これらは、東に薄く西に厚く堆積している。

(2)検出遺構  
(第14図、図版第11-(2)・第12・第13)

第1トレンチ検出した遺構は、200の柱穴・柵列・一条の溝等である。調査面積が狭小であり、掘立柱建物跡を正確に復原するには至らなかったが、3棟の掘立柱建物跡を推定復原した。掘立柱建物跡1は、南北2間以上×東西2間の規模を有し、南北の柱間距離は2.2m、東西の柱間距離は、1.9mを測る。柱穴は直径0.5mの円形を呈し、柱穴底部

第14図 第1トレンチ遺構平面図(1/200)

には、拳大の礫の充填が見られる。掘立柱建物跡2は、トレンチ西端で検出したため、建物跡の一部を検出したにすぎない。南北の柱間距離は2m、東西は2.4mを測る。柱穴は、一辺0.8mの方形を呈している。掘立柱建物跡3は、南北2間以上×東西1間を測る。各辺の柱間距離は、1.8mで、柱穴は、直径0.3mの円形を呈している。

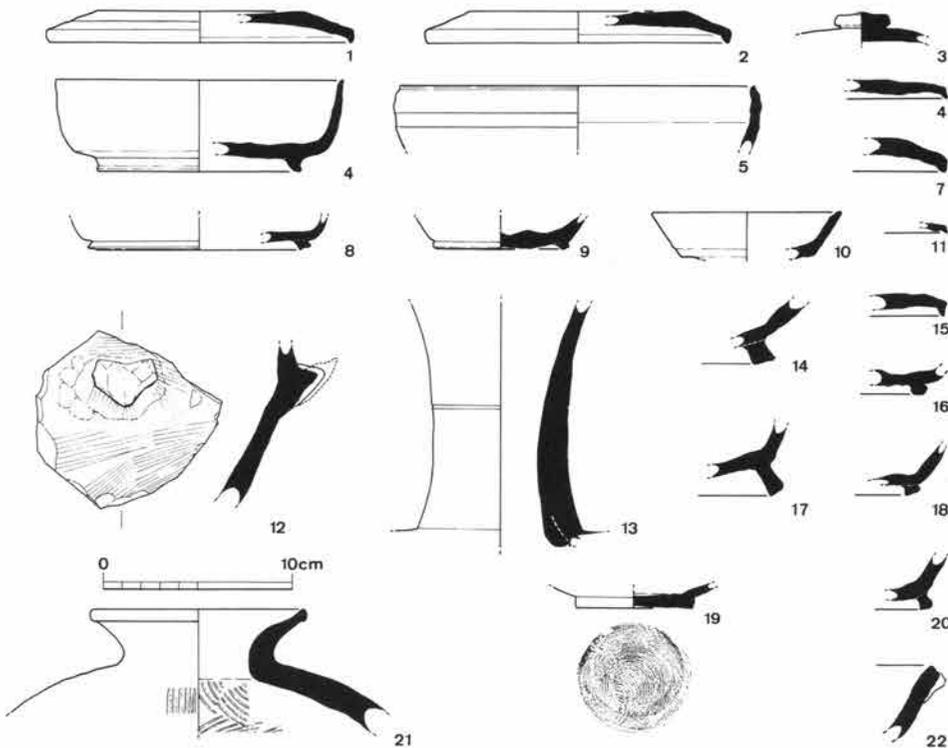
溝1は、トレンチのほぼ中央で検出し、最大幅0.58m・深さ0.2mを測る。溝の主軸線は、磁北とほぼ一致している。この溝の主軸線に沿うように柵列1が東側にはしる。柱間距離は2.6mを測る。また、柵列1の東側2.6mのラインには、柵列2がはしっている。

第2トレンチ 第1トレンチの北方に設定したもので、明確な遺構を検出することはできなかったが、北半部では、旧流路の堆積を示す、谷状の落ち込みを検出している。

(3)出土遺物

出土遺物の大半は、反転復原によってかろうじて図示できる資料であり、正確な法量を測れない個体が含まれている。出土土器は、須恵器・土師器が大半であり、わずかではあるが、中世に關係する土器資料も確認している(第15図)。

須恵器・蓋は、口縁端部が下方に屈曲する形態を呈しており、7のように口縁端部が肥厚するものも確認できる。須恵器・杯身は、底部からほぼ垂直にのびる口縁部をもつ。貼



第15図 出土土器実測図(1/4)

り付け高台は、口縁部と底部の屈曲部に付くものと屈曲部内方に付く個体がある。19は、糸切り底である。須恵器・長頸壺13は、口縁端部を欠いているが、頸部中央に凹線がはいる。須恵器・甕は、外面に平行叩き、内面には青海波文が観察できる。

中世須恵器・摺鉢22は、細片であるが、東播系である。中世土器としては、他に瓦器・瓦質土器がわずかであるが出土している。

#### 4. ま と め

今回、発掘調査を行った祇園谷遺跡は、先述した周山廃寺東方に広がる平坦地での初めての考古学的調査である。調査の結果、奈良時代の掘立柱建物跡群や溝を検出し、掘立柱建物跡の主軸線から少なくとも2時期の建物群を想定できた。掘立柱建物跡を構成する柱穴内の土器資料は、ごくわずかであり、正確に時期差を抽出することはできないが、周山瓦窯跡で焼成された須恵器や周山廃寺で使用された瓦片が出土していることから、祇園谷遺跡が周山瓦窯・周山廃寺と同時期に存在していたことは、まず間違いのない事実として認識できる条件下にある。特に、検出した掘立柱建物跡1・2は、規模も大きく、また、それを裏付けるかのように柱穴底部を拳大の礫で充填していることから勘案して、集落の中心的建物群が存在した可能性が指摘できる。周山廃寺周辺には、広い平坦地がないことを考えれば、今回、検出した掘立柱建物跡群は、寺院を運営する上で重要な施設が存在したものと考えられる。

寺院・集落・瓦窯がセットとなって確認された例は、全国的に見ても稀であり、それらがどのような地理的条件をもって運営されたかを知る手掛かりとしての資料的価値は、高いと言えよう。

(小池 寛)

注1 調査参加者(順不同・敬称略)

前田暁宏・岡本美和子・荻野富紗子・西川悦子・松下道子・細見正一・大栢義美・細見修二・大栢文雄・大栢婦み枝・細見ちか枝・林 一郎・室佳弥子・人魯保子・水口敏枝・渋谷敏子・橋爪とき栄・細見 秋

注2 奥村清一郎「愛宕山古墳発掘調査概報」(『京都府京北町埋蔵文化財調査報告書』第2集 京北町教育委員会) 1983

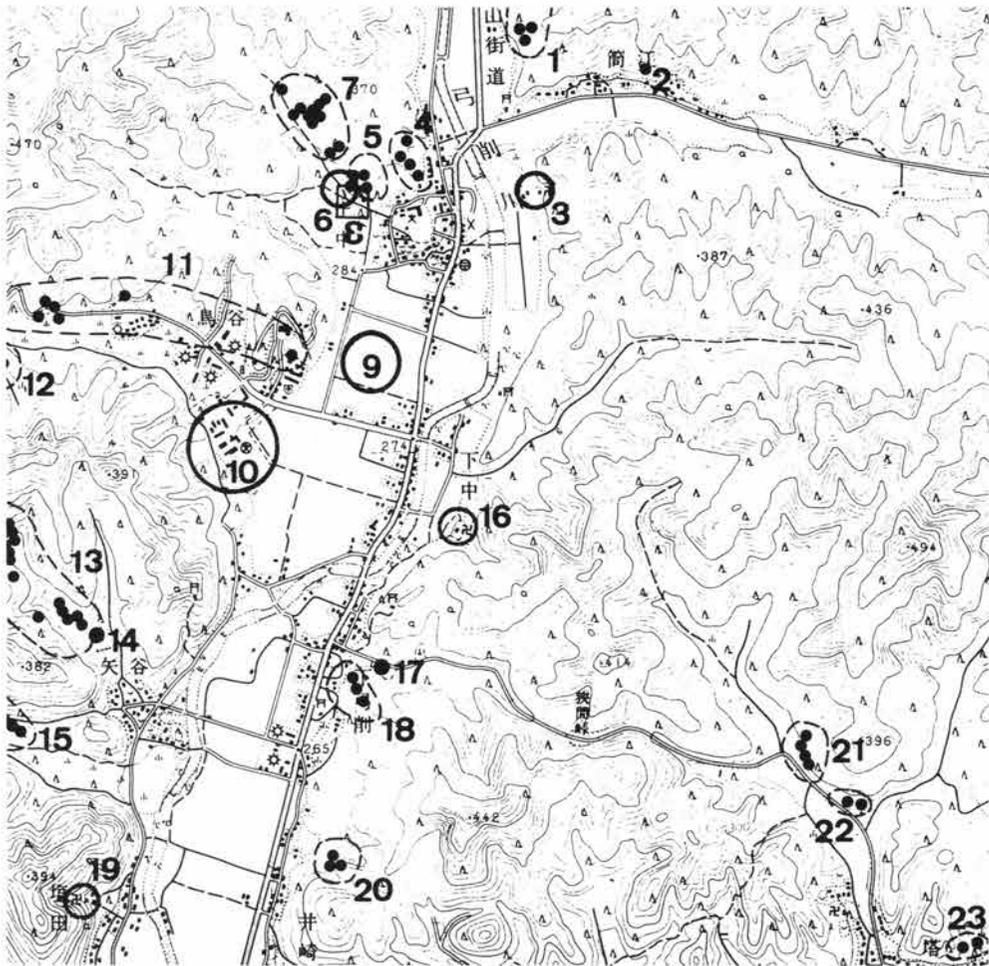
注3 石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」(『考古学雑誌』第45巻第2号 日本考古学会) 1959

注4 宇野隆夫・岡内三真『周山瓦窯跡発掘調査報告書』 京北町教育委員会 1981

## 4. 上中遺跡第6次発掘調査概要

### 1. はじめに

今回の発掘調査は府立北桑田高等学校構内(北桑田郡京北町大字上弓削小字沢の奥15番地)の林業科校舎の増改築に伴い、京都府教育委員会管理部の依頼を受けて実施した。調



第16図 上中遺跡と周辺遺跡分布図(1/25,000)

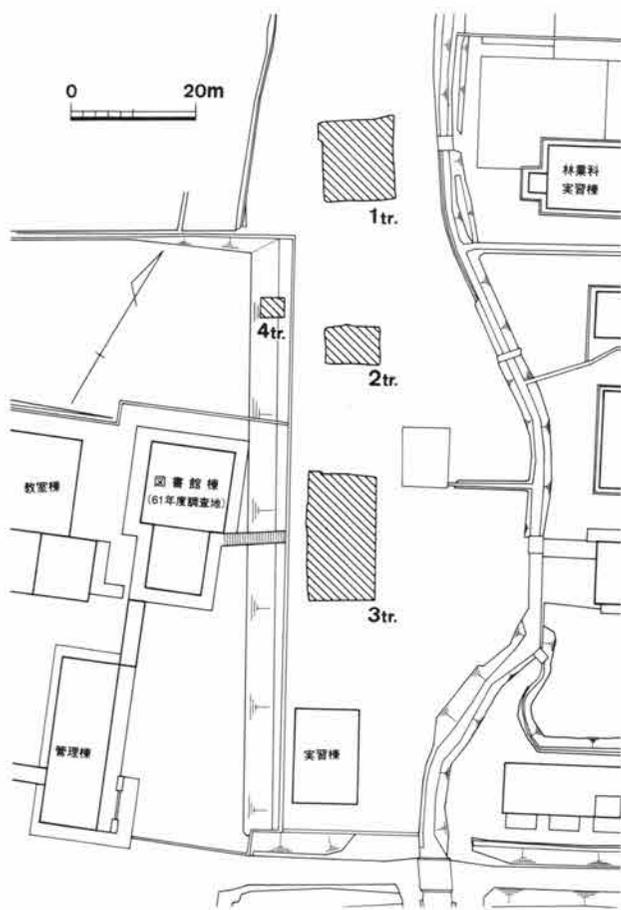
- |           |              |            |           |             |
|-----------|--------------|------------|-----------|-------------|
| 1. 岩ヶ鼻古墳群 | 2. 筒江古墳      | 3. 中島寺跡    | 4. 弾正古墳群  | 5. 八幡宮裏山古墳群 |
| 6. 宮の谷遺跡  | 7. 宮の谷古墳群    | 8. 八幡宮社    | 9. 上中城跡   | 10. 上中遺跡    |
| 11. 鳥谷古墳群 | 12. ふくがなる古墳群 | 13. 矢谷古墳群  | 14. 矢谷奥経塚 | 15. 矢谷奥古墳群  |
| 16. 福德寺   | 17. 狭間谷経塚    | 18. 狭間谷古墳群 | 19. 永林寺   | 20. しが田古墳群  |
| 21. 三宅古墳群 | 22. 塔村古墳群    | 23. 愛宕山古墳群 |           |             |

査期間は平成4年5月25日から7月24日にわたり、調査第2課調査第2係長奥村清一郎、調査員野島 永が担当した。調査にあたっては、京北町教育委員会・府立北桑田高等学校の協力をえた。記して感謝したい。

上中遺跡は京北町下弓削から下中に広がる遺跡であり、弓削川右岸の河岸段丘上に位置している。北桑田高等学校内の校舎等の改築に伴い、過去5回の発掘調査がなされ、古墳時代から、中世にかけての竪穴式住居跡や土坑・ピット・旧河道などの遺構や、弥生時代中期以降の各時代の遺物が検出されている。

## 2. 周辺 の 遺 跡(第16図)

上中遺跡は丹波高原を西流して亀岡盆地に向かう大堰川と、その支流の弓削川の合流地点から弓削川を約5km上流にさかのぼった右岸の河岸段丘上に位置する。弓削川流域の遺跡の調査例は少なく、弥生時代のものとして上中遺跡における過去5回の調査のほか、



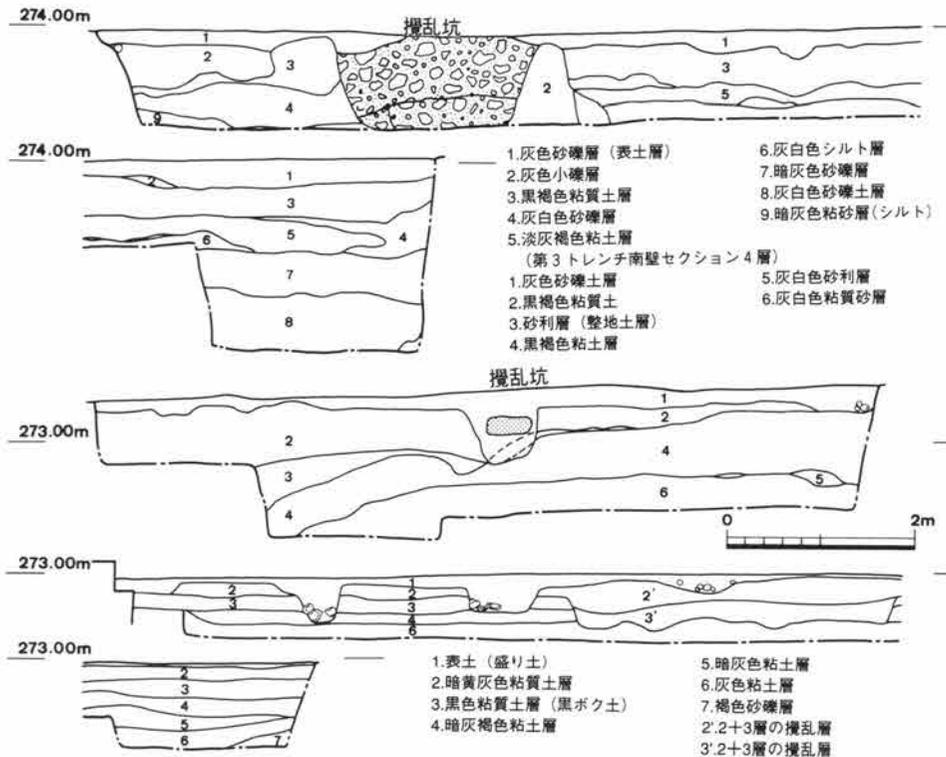
第17図 トレンチ配置図

断片的資料として、富岡鐵齋旧蔵の下弓削出土と伝える扁平鈕式袷袢文の銅鐸<sup>(注2)</sup>がある。このほかにも卯滝谷遺跡出土の柱状片刃石斧や石庖丁<sup>(注3)</sup>などがある。また京北町では100基以上の古墳が確認されており、その多くが古墳時代後期の小規模な群集墳であるが、その中でも愛宕山1号墳や周山1号墳<sup>(注4)</sup>は前半期の古墳調査例として注目できる。愛宕山1号墳は大堰川の谷間の山国盆地にあり、1辺20m前後の方墳で割竹形木棺を主体部としていた。棺内から仿製鏡や鉄製武器・工具・装身具などが検出された。大堰川と弓削川の合流地点、明智光秀の築造した周山城に由来する

周山の地には白鳳期創建の周山廃寺<sup>(注5)</sup>や周山瓦窯跡<sup>(注6)</sup>が調査されており、周山廃寺の対岸に位置する祇園谷遺跡(集落跡)も近年調査された<sup>(注7)</sup>。古代から当地が豊富な林業を中心とした生産基盤によって中央と関係を持っていたことが推測される。

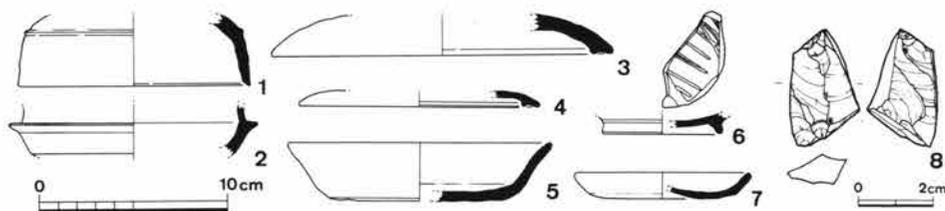
### 3. 調査概要

今回の調査地は昭和61年度調査地の東側に位置しているが、第4次調査の遺構(土坑)の遺存したレベルより2m以上低くなる。増改築される校舎にあわせて南北に長い調査地区となったが、試掘のため、4つの正方形に近いトレンチを設定して、掘削を行った(第17図)。最も北側の第1トレンチでは学校内の廃棄物処理のための攪乱が激しく、段丘礫の上面まで攪乱土層と最近の整地層が堆積していた。また第2トレンチでも過去の養鶏施設を処理した攪乱により遺構、遺物の検出はできなかった。最も南側の第3トレンチでは建物基礎の河原石が埋め込まれており、整地面下の旧耕作土(第3トレンチ南壁第3層)の下には灰色粘土層、段丘礫層が堆積しており、遺構面は認められなかった。旧耕作土からは開墾によって細片化した遺物が検出された(第19図)。遺物はローリングを受けており、2



第18図 トレンチ土層断面図

上：第1トレンチ西壁 中：第2トレンチ南壁 下：第3トレンチ南壁



第19図 遺物実測図

次堆積によるものである。出土遺物には図化できるものとして、須恵器杯蓋(1・3・4)、杯身(2・5)、瓦器底部(6)、土師器皿(7)、チャート剥片があった。

#### 4. ま と め

今回の調査では造成により遺構の遺存は認められず、過去の調査結果からすれば遺構面は削平されたものと考えられる。古墳時代以降、中世に至るまでの各時期の出土遺物の存在から長期間にわたる居住域が想定できる。また、調査地周辺には褶曲した丹波帯のチャート層の露頭が見られ、今回出土した剥片や周山瓦窯跡出土のチャート製の剥片石器<sup>(注8)</sup>などからすれば、当地における石器製作跡の存在も考えられる。

(野島 永)

注1 増田孝彦「上中遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984、同「上中遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985、同「上中遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986、岡崎研一「上中遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987、同「上中遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注2 梅原末治「下弓削発見の銅鐸」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第七冊 京都府) 1926

注3 奥村清一郎ほか『日本の古代遺跡』京都I 保育社 1986

注4 奥村清一郎『愛宕山古墳発掘調査概報』(京都府京北町埋蔵文化財調査報告書第2集 京北町教育委員会) 1983、森 浩一「周山1号墳」(『日本考古学協会年報』27 日本考古学協会) 1976

注5 石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」『考古学雑誌』第45巻第2号 1959

注6 平良泰久ほか「周山瓦窯跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会) 1979、宇野隆夫編『周山瓦窯跡発掘調査報告書』 京都大学考古学研究室・京北町教育委員会 1982

注7 小池 寛「祇園谷遺跡発掘調査概要」(本冊所収)

注8 平良泰久ほか「周山瓦窯跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』 京都府教育委員会) 1979 p. 259参照。

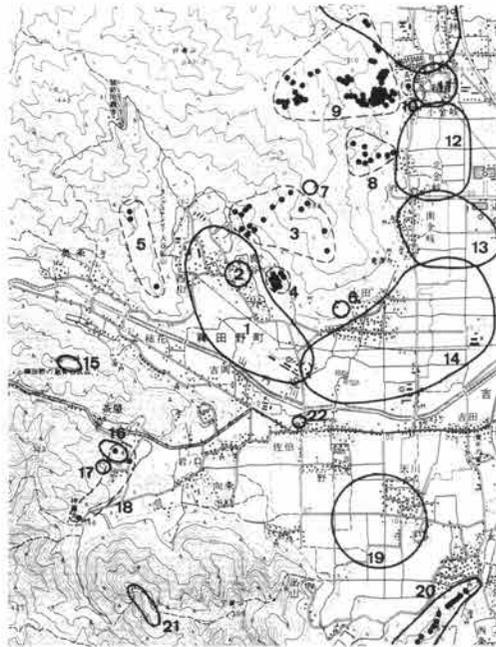
## 5. 鹿谷遺跡発掘調査概要

### 1. はじめに

平成4年度鹿谷遺跡の調査は府営の公害防除特別土地改良事業に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。鹿谷遺跡は京都府亀岡市礪田野町鹿谷に所在しており、現地調査は、平成4年6月12日から8月6日までと平成4年9月12日から11月13日までの両期間に行った。現地調査は調査第2課調査第2係長奥村清一郎・同調査員野島 永・河野一隆が担当した。調査に当たっては京都府教育委員会文化財保護課をはじめ、亀岡土地改良事務所・亀岡市教育委員会に御協力いただいた。発掘調査の作業に関しても地元の方がたをはじめ、多くの方がたに御協力いただいた<sup>(注1)</sup>。さらに通商産業省工業技術院地質調査所近畿・中部地域地質センター主任研究官 寒川 旭氏及び(財)向日市埋蔵文化財センター技師 中塚 良・秋山浩三の両氏には現地で御指導いただいた。また、(財)向日市埋蔵文化財センター長 山中 章氏にはX線写真撮影に御協力いただいた。記して感謝したい。

### 2. 位置と環境(第20図)

鹿谷遺跡は、行者山南麓に展開した扇状地ならびにその周囲の沖積平野に位置している。当調査研究センターと亀岡市教育委員会によって、過去2度にわたる調査が行われており、調査地北部の丘陵斜面に群在した鹿谷古墳群及び、鹿谷池田古墳群の被葬者に関わる集団の生活域と考えられた。このなかには明治年間に



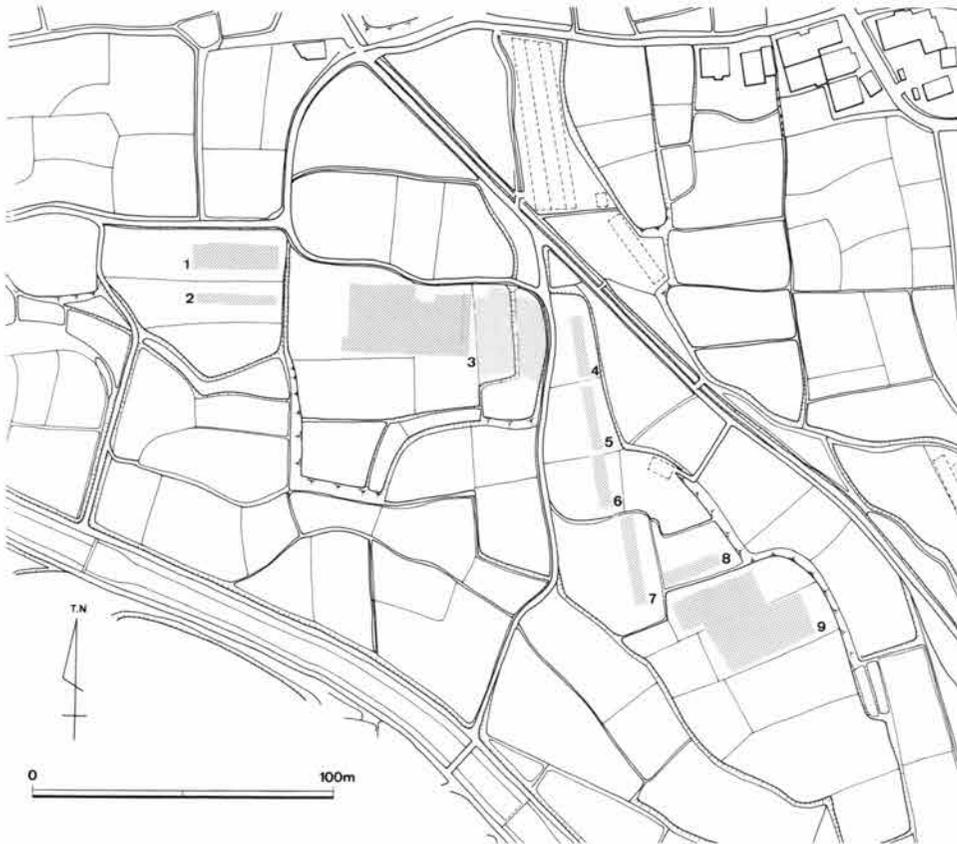
第20図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

- |                    |               |           |
|--------------------|---------------|-----------|
| 1. 鹿谷遺跡            | 2. 丸勘(鹿谷)城跡   | 3. 鹿谷古墳群  |
| 4. 鹿谷池田古墳群         | 5. 礪田野西山古墳群   |           |
| 6. 太田城跡            | 7. 東谷遺跡       | 8. 北金岐古墳群 |
| 9. 小金岐古墳群          | 10. 馬場ヶ崎古墳群   |           |
| 11. 馬場ヶ崎遺跡         | 12. 北金岐遺跡     | 13. 南金岐遺跡 |
| 14. 太田遺跡           | 15. 牛松山(柿花)城跡 |           |
| 16. 丸山(茶屋)城跡       | 17. 佐伯遺跡      | 18. 佐伯古墳群 |
| 19. 天川遺跡           | 20. 穴太古墳群     | 21. 高岳城跡  |
| 22. 礪田野神社文化財環境保全地区 |               |           |

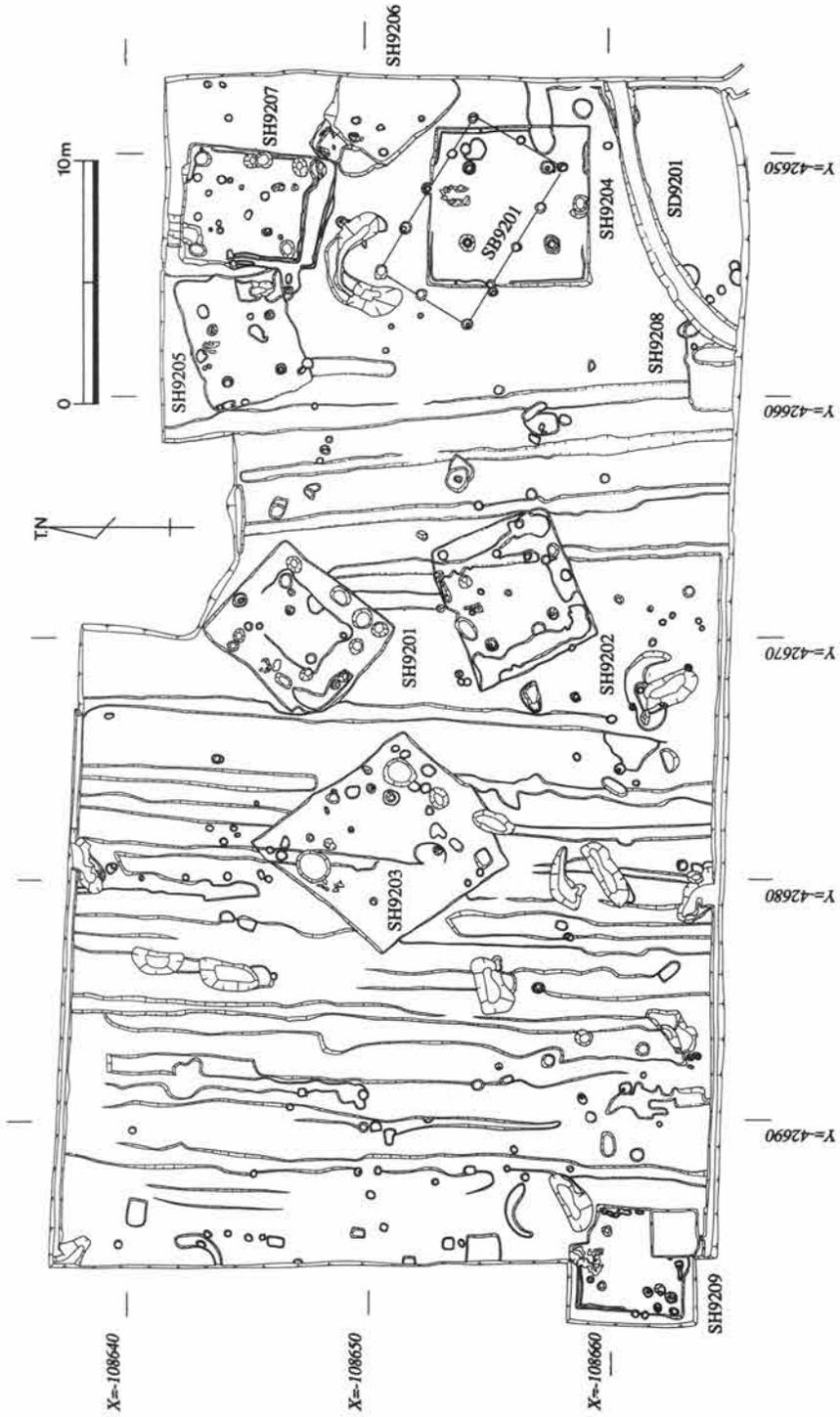
英国人ウィリアム＝ガウランドが調査し、近年その撮影写真が公開された鹿谷古墳が存在した<sup>(註4)</sup>。現在、正確な位置は特定しがたいが、石棚付きの横穴式石室である。鹿谷遺跡の東方に隣接して存在する太田遺跡<sup>(註5)</sup>では弥生時代前期の土坑群や三重の環濠が報告されており、縄文時代晩期から鎌倉時代にわたる複合遺跡であることが判明している。

### 3. 調査概要

鹿谷遺跡調査地はほ場整備事業の計画に規制されて舌状の台地部分の細長い調査範囲となったため、調査地に平行した長い試掘トレンチを設定し、遺構の顕著な部分において調査範囲の拡張及び遺構精査を行った(第21図)。調査区の基本層位は耕作土の床土の下(地表下30～50cm)に黄褐色の古墳時代遺構面が存在した<sup>(註6)</sup>。精査の結果、古墳時代の竪穴式住居跡が36棟、掘立柱建物跡3棟、そのほか古墳時代と考えられる土坑や平安時代前期の土坑等が検出された。なお、住居跡の遺構精査時には古墳時代以前の遺物も出土したため、時代及び時期ごとにその遺構・遺物の概要を報告していきたい<sup>(註7)</sup>。



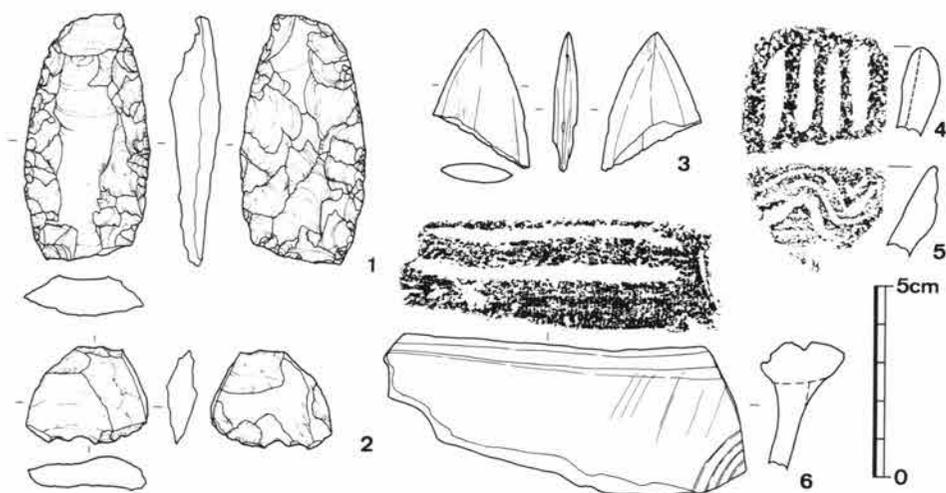
第21図 鹿谷遺跡トレンチ配置図



第22図 第3トレンチ遺構平面図



第23図 第9トレンチ遺構平面図



第24図 遺物実測図(1)

1. S H9202埋土 2. 第3トレンチ南西基盤層下 3. 第9トレンチ耕作土 4-6. 第3トレンチ耕作土

#### a. 古墳時代以前の遺物(第24図、図版第36)

古墳時代以前の遺物はすべて遺構に伴うものではない。1は黒曜石製の木葉形の尖頭器である。背面下端は剥離時に先端が欠損している。隠岐産の石材を使用したと考えられる。全長6.5cm・最大幅3.3cm。第3トレンチS H9202埋土より検出した。2は第3トレンチ南西隅の古墳時代竪穴式住居跡が掘り込まれた黄褐色土のベース層より出土した。背面に自然面が残る。上下端とも使用時の剥離があり、楔形石器と考えられる。3は弥生時代石剣の切先。粘板岩製。4・6は縄文後期土器。縁帯文系の土器口縁。5は波状文を施す。

#### b. 古墳時代の遺構

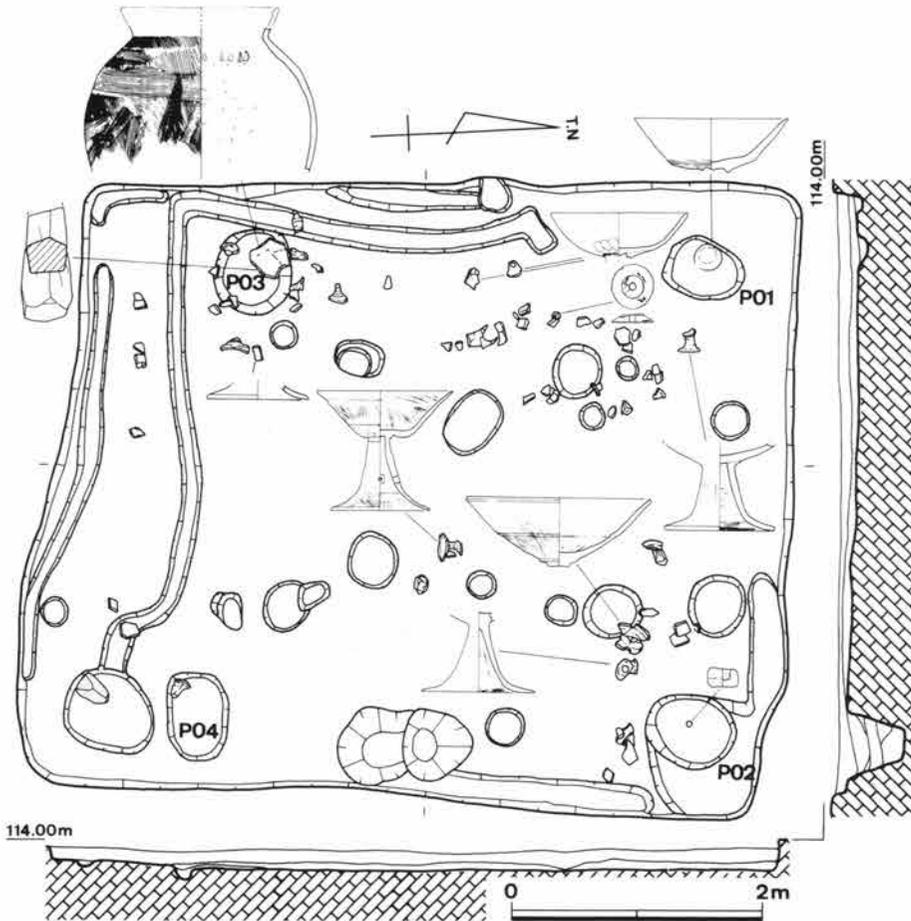
古墳時代の遺構・遺物は5世紀後半から7世紀前半にわたる。古墳時代の遺構は3・8・9の各トレンチより検出した。第3トレンチでは住居跡が9棟、2間×4間の掘立柱建物跡1棟を検出した。第9トレンチでは住居跡を27棟検出した(第22・23図、図版第31)。また、第8トレンチでは製塩土器が廃棄された土坑を検出した。煩雑さを避けるため、時期ごとにその概略を述べていきたい。後述するように、時期はおもに住居跡床面で出土した土器群や住居跡形態を主体的根拠として設定している。また、各期の中でも出土した土器の部分的な属性の変化に伴う様式内の様相の小変化によって、小期(a・b・c)を設定した。36棟の住居跡から検出した土器総量はコンテナ60箱程度であり、多くは細片であるため、すべての住居跡出土土器についてその様式的把握は困難であるが、調査地内の集落の存続のあり方を探るため、あえて時期細分を行った。

鹿谷 I a 期

鹿谷遺跡調査地内において、一辺が6m以上の正方形に近い住居跡を3棟確認した。住居跡には貯蔵穴と考えられる屋内土坑が複数設置され、周壁溝のめぐるものやベッド状の遺構が存在するものなどバラエティがある。I a 期は竈が付設されない段階で、やや横長の長方形を呈し、四隅及び一辺の中央に屋内土坑をもつ。四隅の土坑には、ミニチュア土器あるいは破碎土器の供献が認められる。

S H9207住居跡(第25図、図版第18)(出土遺物; 7・9・10・13・14・16~20・22・23・26~33・35~37・136・142・143)

第3トレンチ北東隅で検出。南北約6.0m・東西5.1m。平面形が長方形の住居跡で、西隣りのS H9205より低いレベルで輪郭を確認した。遺構の検出面直上では土師器高杯片など多くの土器片が散乱して検出された。竈は付設されていない。南側には拡張に伴い、周壁

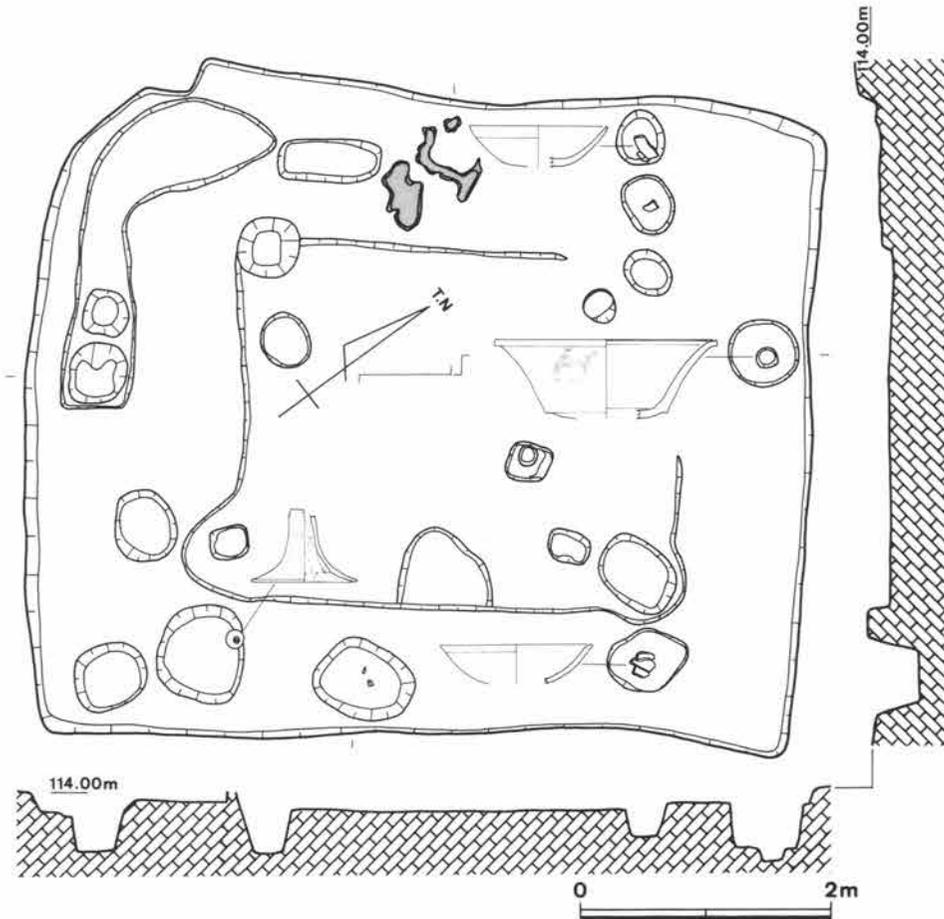


第25図 S H9207住居跡実測図(1/60)

溝が二重にめぐっているのが確認された。貯蔵穴と考えられる屋内土坑が5つ設けられている。支柱穴は4本であるが南側の住居拡張に伴い、柱穴が2本追加されたものと思われる。床面からは少なくとも8個体の高杯が検出され、埋土に含まれるものをあわせれば18以上の固体数になる。住居跡内P01埋土からは高杯の杯部、P02底面からは手捏ね土器、またP03から、甕体部及び砥石が出土した(第46図143)。このほかにも紡錘車が床面から出土した。また、陶質土器と考えられる細片が住居跡埋土から検出された(第45図136)。埋土上面の遺構確認面からも精製ミニチュア土器が検出され(第39図10)、住居跡廃絶後の祭祀行為を推測させる。

### 鹿谷 I b 期

横長に近い正方形を呈し、屋内土坑は、竈対辺、竈際及び壁沿いに取り付き、数も多い。これらには破碎土器の供献が認められる。



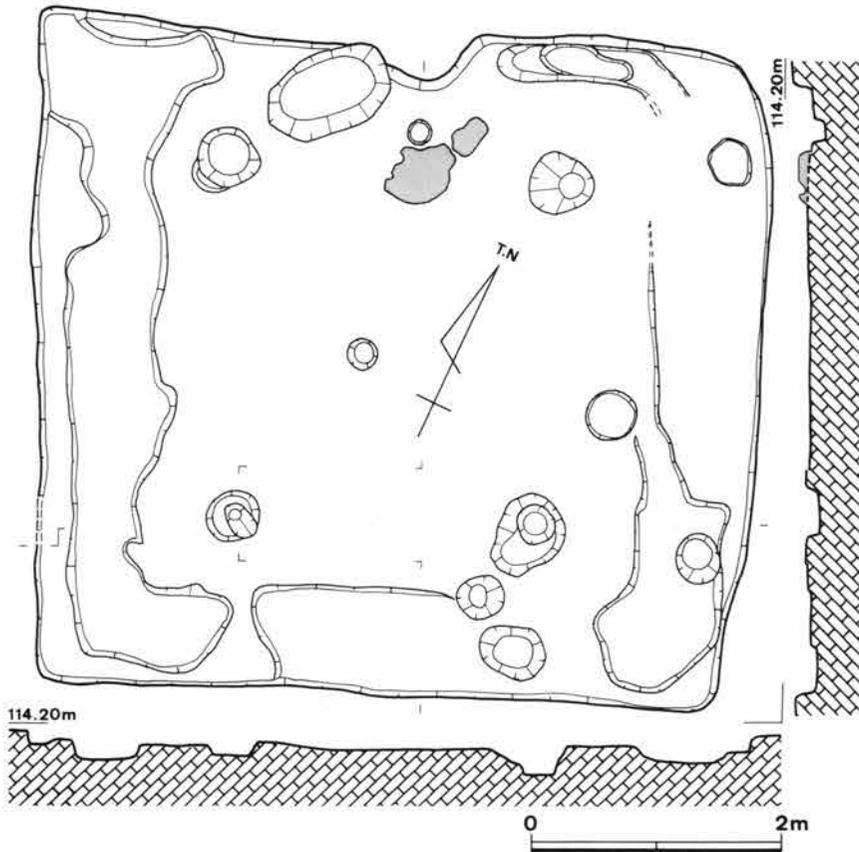
第26図 S H9201住居跡実測図(1/60)

S H9201住居跡(第26図、図版第19)(出土遺物; 11・12・15・21・24・25・134)

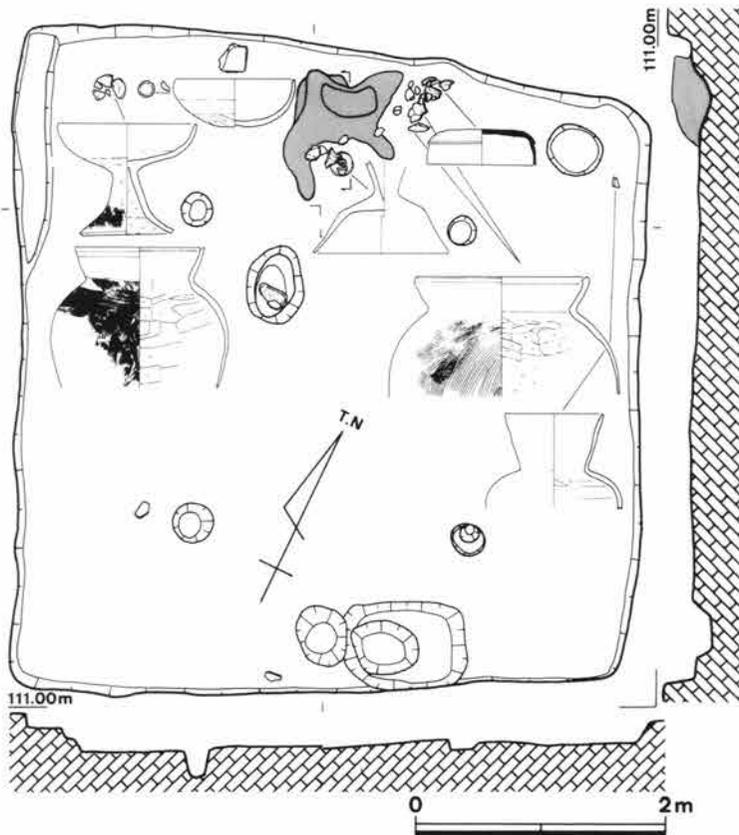
第3トレンチ北側中央付近で検出。長辺6.3m・短辺5.2m。長方形住居跡。住居跡の四周が一段高くなる。竈は住居の北西の周壁中央の高床部分に位置する。いわゆるベッド状遺構と言われる高床部分床面には12の土坑が掘り込まれており、周壁溝はない。支柱穴は4本で高床部分床面での土器は少なく、土坑内底部及び上面から高杯を破碎した状況で検出した。いわゆるベッド状遺構は、時期がやや先行する千代川遺跡3次調査S B8202や千代川遺跡5次調査S B01においてもみられる<sup>(注8)</sup>。

S H9203住居跡(出土遺物; 135)

第3トレンチ中央西よりで検出。長辺6.6m・短辺6.4m。南北に長い菱形に近い平面形をもつ。竈は北西の周壁中央に残る。削平が著しく、わずかな焼土面しか遺存していなかった。支柱穴は4本で長辺3.4m・単辺3.0mの長方形に配置する。周壁溝はない。床面から遺物はほとんど出土しなかったため、明確な所属時期は判断できないが、周壁沿いに貯蔵穴と考えられる屋内土坑が複数存在する住居跡形態からI期に属する可能性が高い。



第27図 S H9202住居跡実測図(1/60)



第28図 S H9226住居跡実測図(1/60)

## 鹿谷Ⅱa期

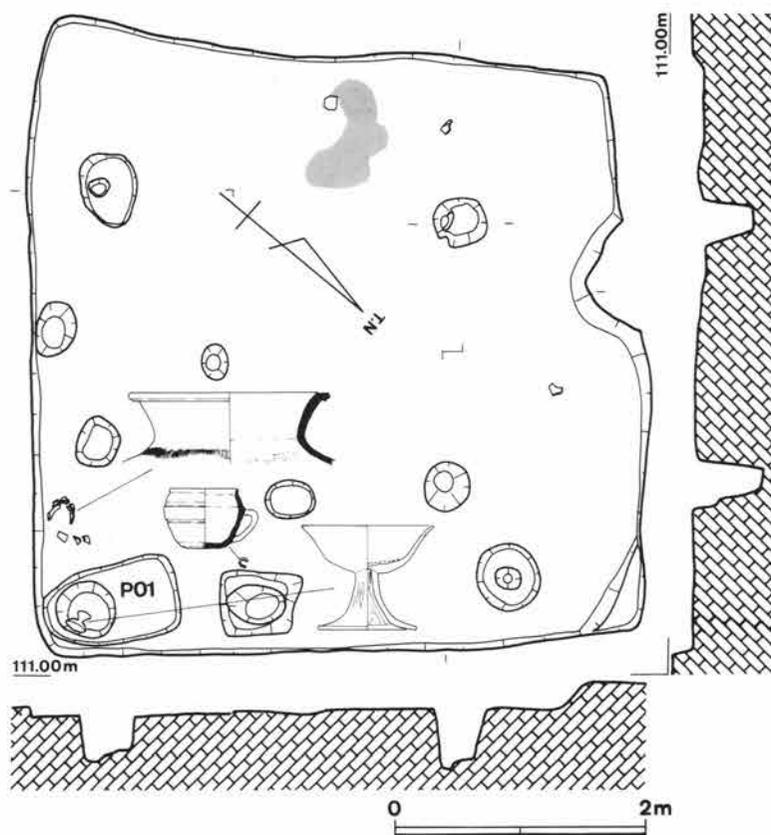
Ⅱ期には住居跡が正方形に近く、支柱穴の配置も正方形に近くなる。住居跡内には竈が定着し、竈内に土師器高杯を反転させた状態で、支脚として使用している。竈の対辺の周壁沿い及び竈際に屋内土坑が普遍的に認められる。Ⅱa期には住居跡は周壁溝が部分的か、存在しないものも多い。鹿谷遺跡において、住居跡の分布域の拡大する画期であり、恒常的な集落が想定できる。

## S H9202住居跡(第27図、図版第21)(出土遺物; 48・79)

第3トレンチ中央で検出。長辺6.0m・短辺5.3m。竈は北側周壁中央に取り付く。周壁部分は一部掘り残され、住居跡内に張り出し、入り口部と推測させる。周壁溝は竈の東側に部分的に存在する。支柱穴は一辺2.7mの正方形に配置される。支柱穴の周囲には溝状の幅の広い落ち込みが部分的にめぐる。

## S H9226住居跡(第28図、図版第23)(出土遺物; 44・53・54・60・63・68・71・73・141)

第9トレンチ南側中央で検出。長辺5.2m・短辺5.0m。竈は北側中央に設置され、竈内で



第29図 SH9229住居跡実測図(1/60)

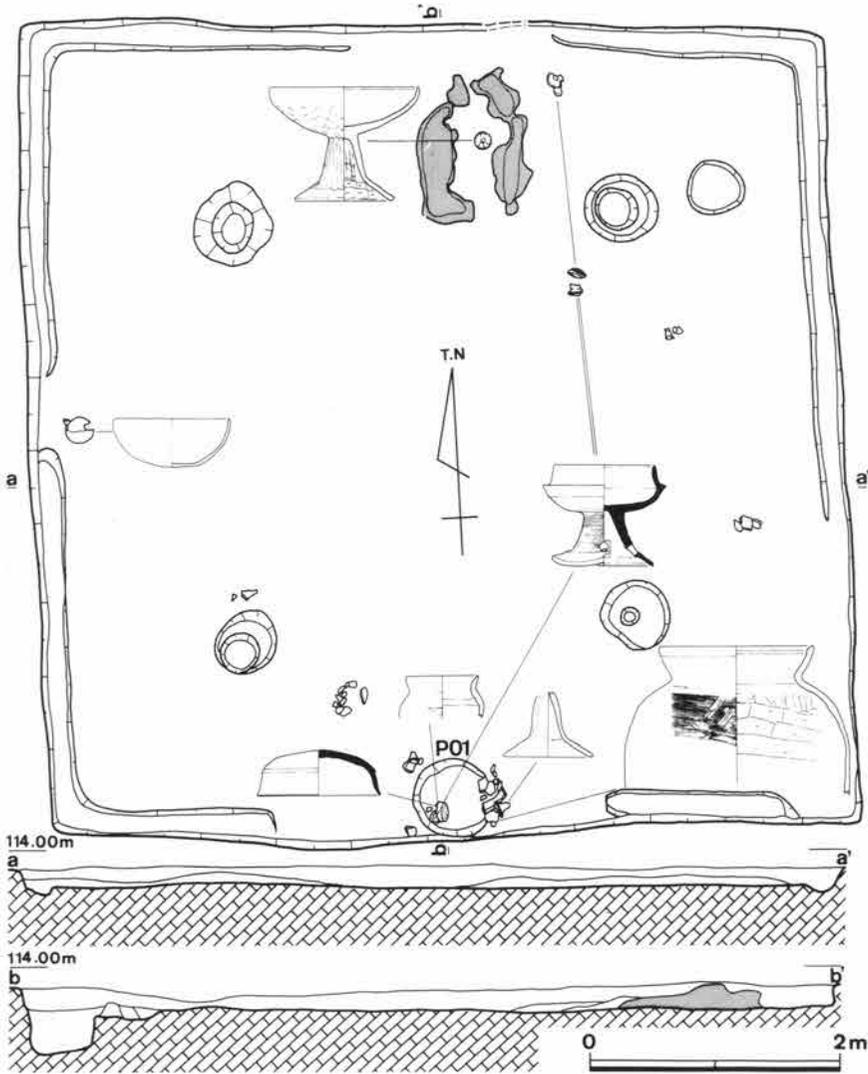
反転状態の高杯脚部を検出した。脚部には粘土が巻かれており、煮沸用具の支脚として使用されたものであろう。支柱穴は2.2~2.5mの間隔ではほぼ正方形に配置する。周壁溝は認められないが、西側で段状に掘り残された部分が存在する。竈の対辺の南側周壁沿いに屋内土坑が存在する。竈の周囲から椀・高杯(竈西側)、杯身・甕(東側)を検出した。

SH9229住居跡(第29図、図版第25)(出土遺物; 40・46・64・66)

第9トレンチ南東で検出。長辺5.2m・短辺4.4m。竈は遺存状況が悪く、明瞭ではないが、西側周壁中央に焼土が遺存した。支柱穴は2.0~2.8mの平行四辺形に近い配置で、住居跡の南側に偏る。周壁北側には台状の掘り残しがあり、入り口踏み台になると思われる。南東隅のP01からは高杯が、南壁東側から須恵器甕の口縁部分が出土した。

#### 鹿谷II b期

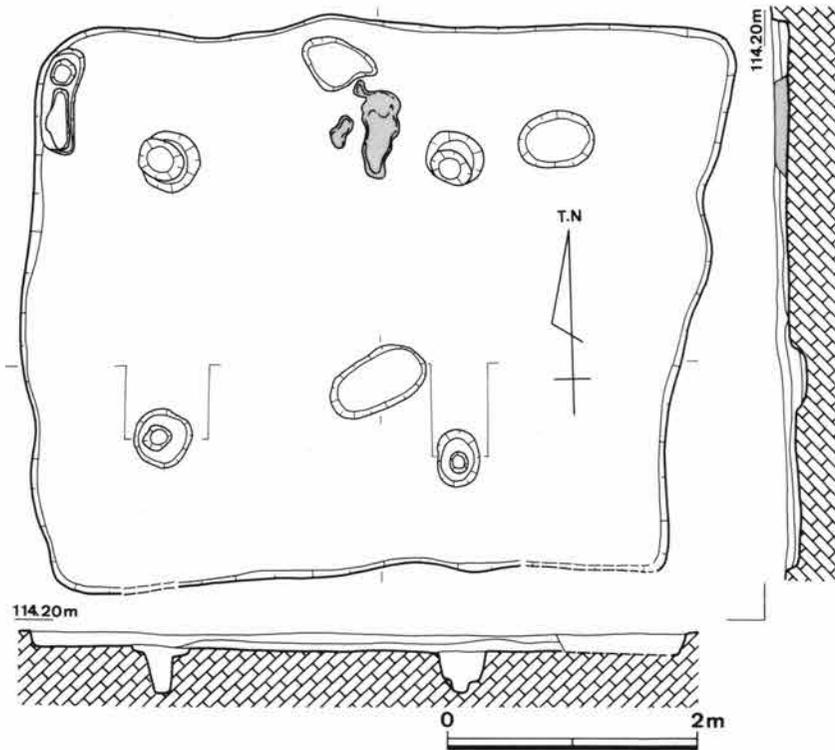
II b期の住居跡にはII a期と同様に竈の対辺の周壁沿いに屋内土坑が存在する。周壁溝をもつものが多い。



第30図 S H9204住居跡実測図(1/60)

S H9204住居跡(第30図、図版第20・21)(出土遺物；38・41・51・58・59・67・74・77・78・117・118・124)

第3トレンチ東隅検出。長辺6.5m・短辺6.2m。竈は北側周壁中央からやや離れて内側に付設される。竈内には土師器高杯脚部を反転して使用。周壁溝がめぐる。支柱穴は一辺3.2~3.4mの正方形に近い配置である。南側壁際のP01屋内土坑から須恵器杯蓋・高杯・土師器甕・高杯脚部などを検出した。須恵器高杯は、住居廃絶時に破碎、分散されたものとみられる。



第31図 SH9205住居跡実測図(1/60)

S H9205住居跡(第31図、図版第26-(2))(出土遺物; 72・75)

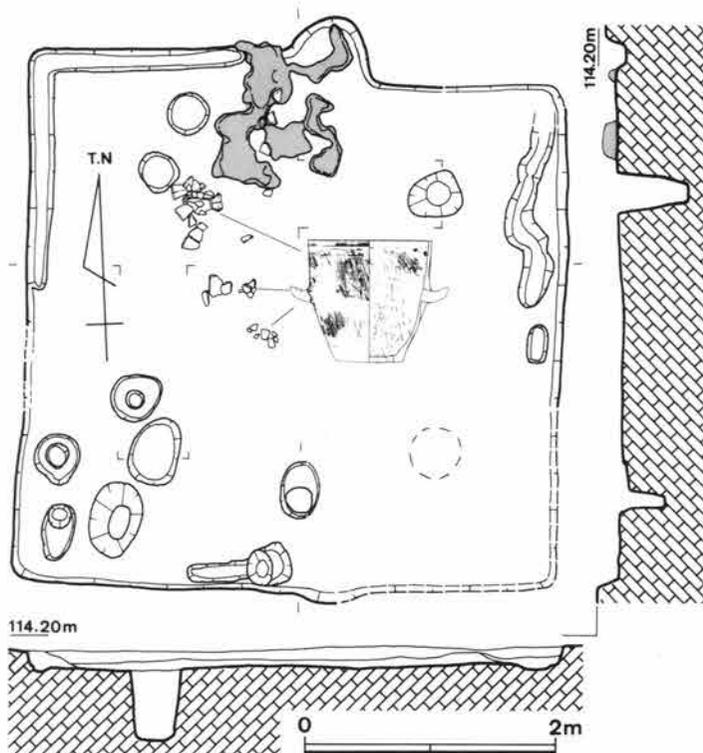
第3トレンチ北東、I期のS H9207住居跡の西側で検出。長辺5.6m・短辺4.6m。竈は遺存状況が悪く、焼土のみ北側周壁中央のやや内側で検出した。周壁溝はない。主柱穴は一辺2.2mの正方形に配置するが、住居跡の西側に偏る。出土遺物は少ないが、床面で検出された甕A類の存在から鹿谷Ⅱb期を下限とする。

S H9209住居跡(第32図、図版第22)(出土遺物; 8・34・39・42・43・47・70・76)

第3トレンチ西南隅で検出。長辺4.4m・短辺4.2m。北側中央の周壁が掘り込まれて、竈が設置される。竈部分では甌を破砕した状態で検出。周壁溝は南西部分にめぐり、全周しない。東南の一部分が攪乱のため不明であるが、主柱穴は長辺2.4m・短辺2.2mの長方形に配置されるものと思われる。

S H9211住居跡(第33図、図版第26)(出土遺物; 52・56・57・61・62・69・85・119～123・128・129・131～133・137)

第9トレンチ北西隅で検出。一辺5.1mの正方形に近い。竈は北側周壁の内側に取り付く。燃焼部では反転した状態の高杯を検出した。周壁溝は認められず、竈の対辺の南側壁際にはⅡ期住居を特徴づける屋内土坑が存在する。主柱穴間隔は一辺3.05m・短辺2.1mのやや



第32図 SH9209住居跡実測図(1/60)

歪んだ四角形に配置する。床面からは土師器高杯片や製塩土器・鉄鏃を検出した。

S H9230住居跡(第34図、図版第24)(出土遺物49・50・65・86)

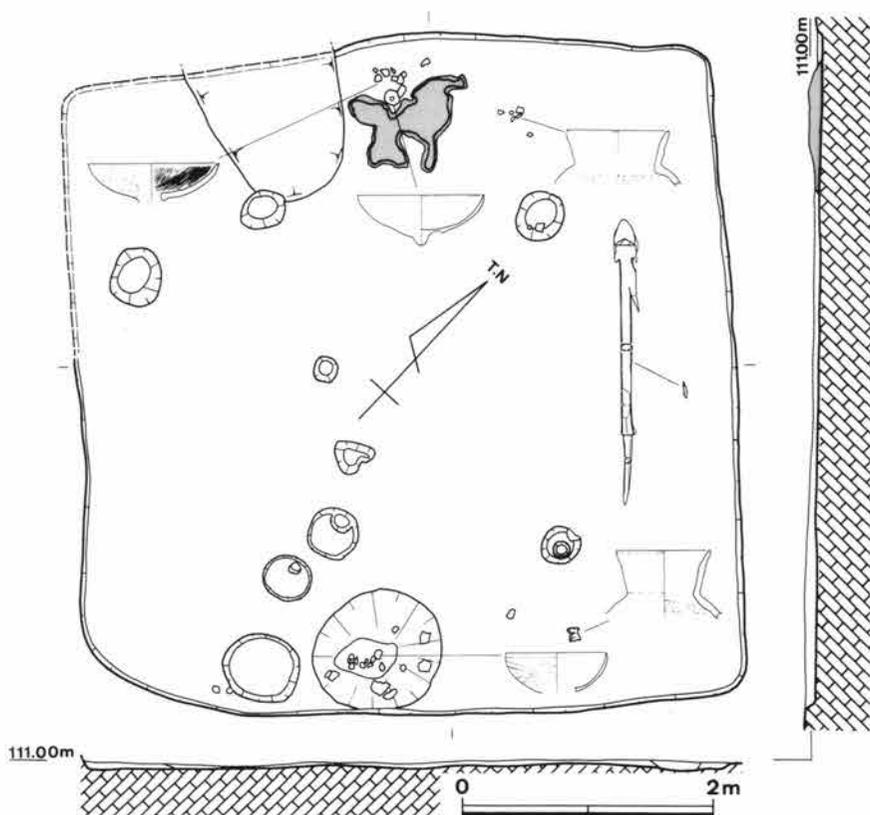
第9トレンチ中央西寄りで検出。長辺5.0m・短辺4.3m。竈は北側周壁の壁際やや内側に付設される。竈内の支脚には方柱状の花崗岩を使用している。また、竈の西側には使用されていたと思われる甕を検出した。周壁の東側と南西隅が部分的に段状に掘り残される。支柱穴は長辺2.1m・短辺1.9mの正方形に近い配置である。

S H9237住居跡(出土遺物；45・55)

第9トレンチ南東隅で検出。全形は不明であるが、一辺4mほどの方形住居跡になる。竈は北側周壁のやや内側に付設される。遺存状況は悪いが、竈付近から検出した須恵器杯からⅡb期に属するものと判断した。

### 鹿谷Ⅲ期

今回の調査地からは6世紀前半と考えられる遺構・遺物は検出できなかった。そのため、6世紀前半にⅢ期を設定することは不可能であるが、亀岡市教育委員会による鹿谷遺跡の調査等により、6世紀前半の遺構・遺物が把握されているため、遺跡全体の評価を重視し



第33図 S H9211住居跡実測図(1/60)

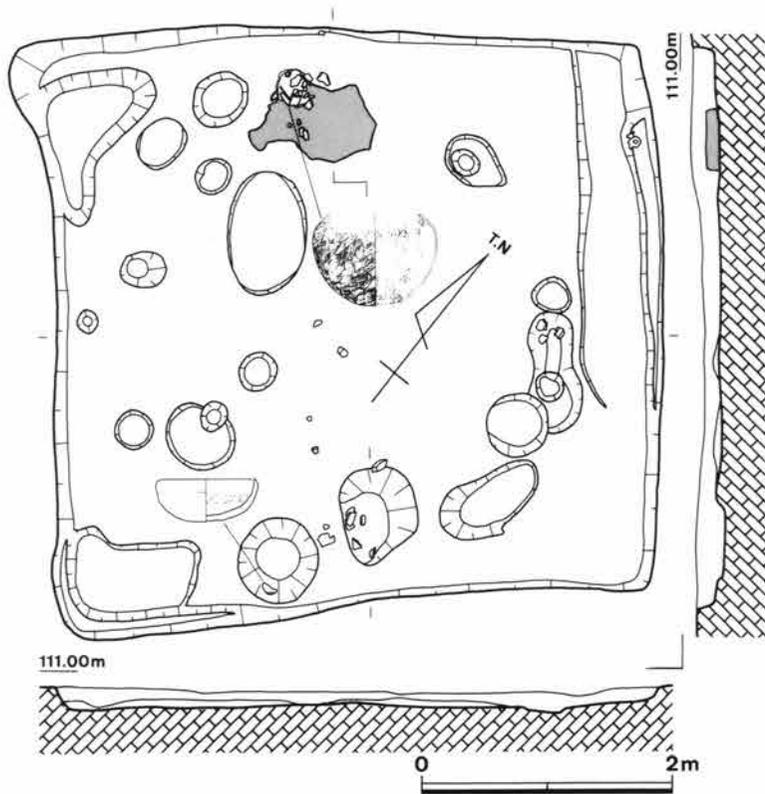
て、Ⅲ期を設定した。亀岡市教育委員会の調査地からすれば、Ⅲ期に設定できうる遺構群は今回調査地の北東で、南面する扇状地上に位置することとなる(第56図<sup>(注9)</sup>)。

#### 鹿谷Ⅳa期

Ⅳ期には住居跡の規模がばらつき、4本柱の支柱穴の配置が長方形になるものが多くなる。竈が周壁近くに取り付く。周壁溝はすでに認められない。竈土の範囲からみてⅡ期のもより小形のものが多い周壁に近い場所に作られたと考えられる。竈内の支脚にはⅡ期に特徴的な土師器高杯はみられず、方柱状の花崗岩を据え置いている。Ⅳ期に属する住居跡は遺存が悪く、検出面から10cm未満で床面に達するものであったが、小形の住居跡と重複し、建て替えられたと考えられる住居跡が特徴的に存在する。住居跡内検出遺物の総量はⅡ期に比べて激減するため、土器による所属時期の確定が困難である。Ⅳa期に属する住居跡ではTK43型式及びTK209型式の須恵器が出土している。

#### S D9201溝状遺構(第22図)(出土遺物; 80・110・144)

第3トレンチ南東で検出。第3トレンチの南東を弧状に囲むように掘削される。溝内か



第34図 S H9230住居跡実測図(1/60)

らは須恵器杯蓋、短頸壺が出土(第42図80・110)。掘削時期はIV期初頭か。

#### S H9228住居跡

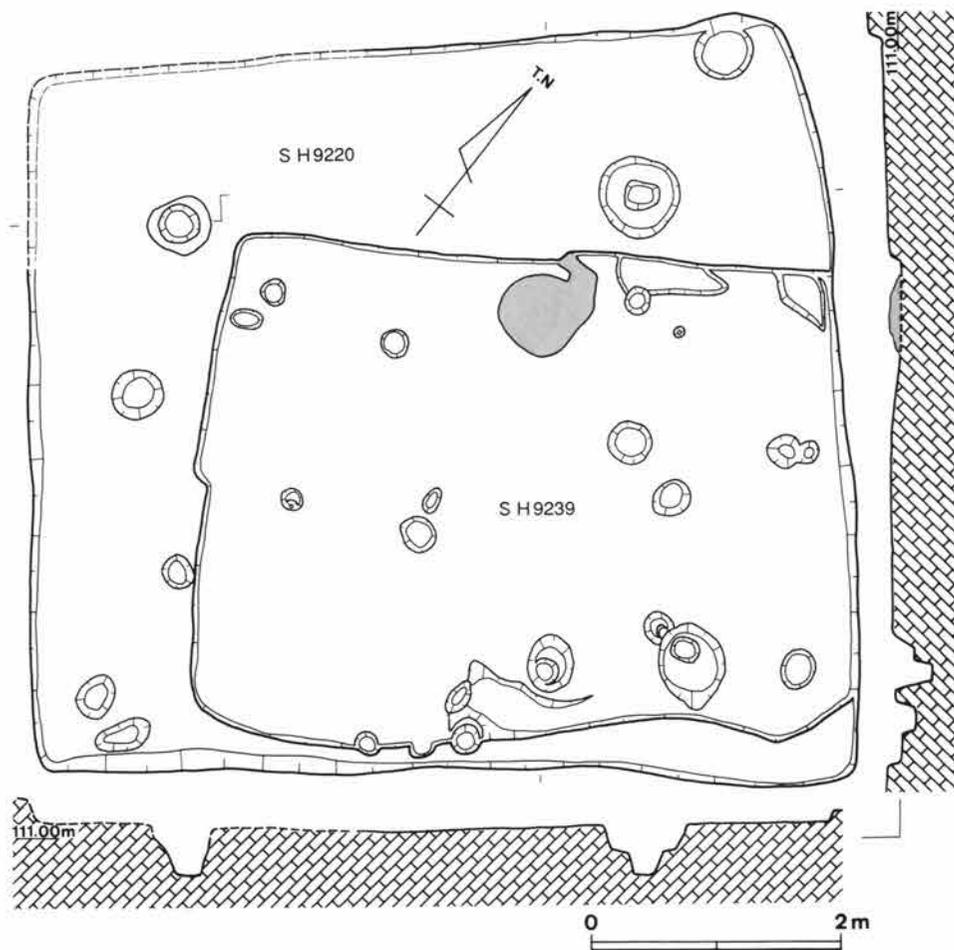
第9トレンチ南西で検出。わずかな細片であるが、後述する甕B類の検出から、S H9228住居跡もIV a期に属するものと考えられる。長辺6.0m・短辺5.7m。S H9233に切られる。支柱穴は3.5~3.7mほどの方形に近い配置をとる。

#### S H9239・9220住居跡(第35図、図版第29)(出土遺物S H9239; 82/S H9220; 102)

第9トレンチ北西で検出。S H9219に切られる東側一辺を共有する拡張住居跡である。竈はS H9239住居跡は長辺3.2m・短辺4.0mの小形住居跡である。竈が北側周壁に取り付く。S H9220は一辺6mほどである。支柱穴は一辺3.8mほどの方形に配置している。竈が北側周壁中央に取り付く。明確な柱穴は認められない。

#### S H9218住居跡(出土遺物; 81・105)

第9トレンチ中央北側で検出。長辺6.0m・短辺4.4m。支柱穴は3.0~3.4mの長方形に配置する。わずかな焼土しか遺存しなかったが、竈は周壁の北側に取り付くようである。竈



第35図 S H9239・S H9220住居跡実測図(1/60)

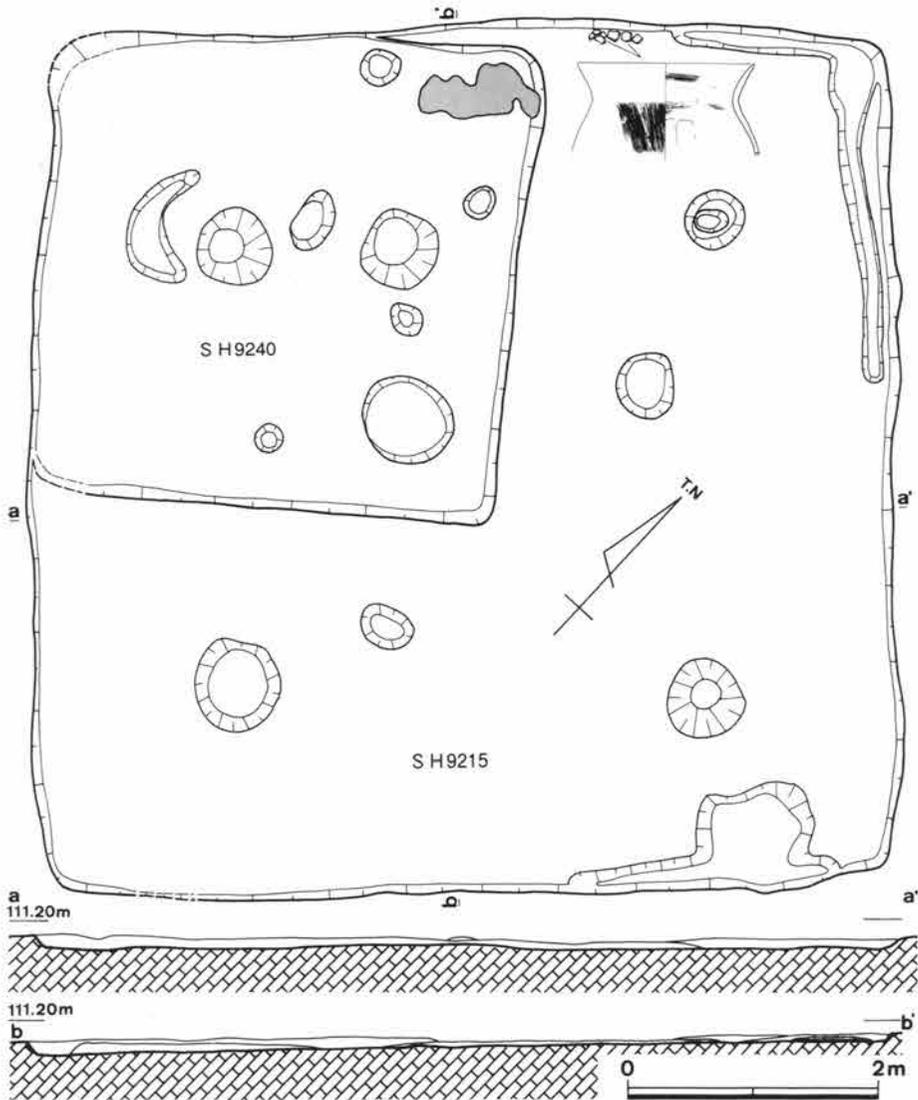
の西側に台状の掘り残しが存在する。

#### 鹿谷IV b・c期

IV b期及びIV c期の住居跡はすべて第9トレンチで検出した。わずかな出土遺物からは住居跡の時期が確定できない。住居跡の平面形が小形化及び長方形になる時期をIV c期に区分する。小形の住居跡には4本柱の建つ構造は考えられず、新しい家屋形態、もしくは小屋・工房と考えられるものも存在する。

S H9240・9215住居跡(第36図、図版第27)(S H9215; 84・98・99・103・104・111・113・115・140)

第9トレンチ北西で検出。S H9215は長辺7.0m・短辺6.6mで、支柱穴は長辺4.0m・短辺3.6mで台形に近い。北側周壁中央に焼土が遺存しており、竈が周壁に取り付いたものと思われる。S H9240は北西隅に配置している。柱穴については明確ではない。S H9215の竈

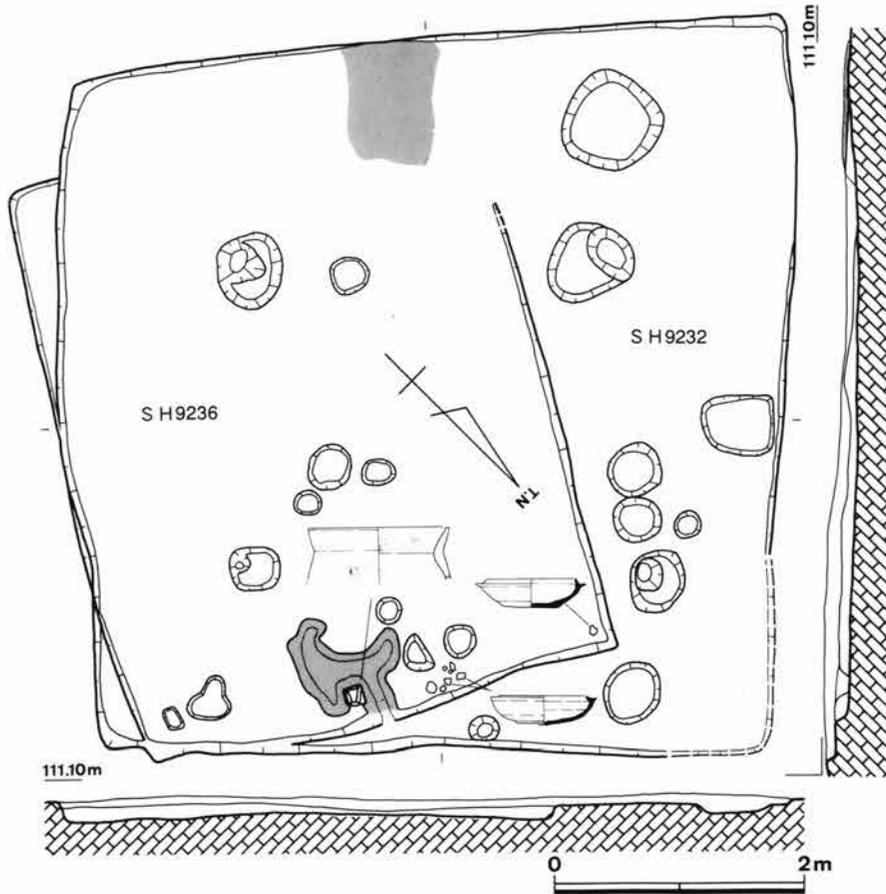


第36図 S H9240・S H9215住居跡実測図(断面図はS H9215住居跡 1/60)

がS H9240の埋土上面に設置されることから、S H9215の方が新しくなるものといえる。

S H9232・9236住居跡(第37図)(S H9232; 87・94・96/S H9236; 101・109)

第9トレンチ中央東寄りで見出。S H9232は北東隅の一部が近世の攪乱により、不明であるがおおよそ長辺6.0m・5.4mになる。長辺3.2m・短辺2.8mのやや歪んだ主柱穴の配置。S H9232の竈は西側周壁に取り付き、S H9236の床面によって削平されていた。S H9236は長辺4.8m・短辺3.8mの長方形住居跡である。竈は東側周壁に取り付き、竈内に方柱状の花崗岩が支脚としてそえられていた。柱穴は不明瞭。



第37図 S H9232・S H9236住居跡実測図(1/60)

S H9238住居跡(第38図、図版第29)(出土遺物;112)

第9トレンチ中央南側で検出。長辺5.4m・短辺3.6mの長方形住居跡である。南西部の一隅が掘り残される青野型住居跡の類型に属するものである。<sup>(註10)</sup> 竈は周壁南側に取り付き、周壁西側中央には黄白色の粘質土の堆積が検出された。柱穴は不明瞭で4本柱とは考えられない。

c. 古墳時代の遺物(第39～46図(一部、古墳時代以降の遺物も含む))

土師器の分類

検出遺物の大半を占める土師器は、詳細な記載を観察表に譲り、鹿谷遺跡の分期ごとの土器群を提示した。この場合、様式論の方法に立ってまとめたが、すべての住居跡に各器種がそろっているわけではない。加えて、当該時期の土器様式は弥生時代や律令期ほどの

定見があるとは言いがたい。したがって、器種分類を基礎作業として、さらに下位の分類項目である細部形態の変化を操作することで、土器編年を構成した。と同時に、器種の消長を考慮して、先述している鹿谷Ⅰ～Ⅳ期の時期区分を説明する。

まず、器種分類の結果を第47図に示した。容器の本来の機能にしたがって、煮沸、貯蔵、供膳の用途を推定し、次に各々を甗、甕などの器種に分けた。

**甗A**；口縁端部が肥厚し、頸部に強いヨコナデがめぐる。布留形甗の伝統を引き、胴部最大径が口縁部径をこえ、球体に近い胴部をもつ。

**甗B**；口縁端部が尖って終わり、卵形の胴部をもつ。

**甗C**；口縁部が直立気味となり、口縁端部に面をもつ。器壁が厚く、長胴化が甗Bよりも一層進む。

**大形甗**；全体のわかる資料は1点のみである。平底で2孔をもち、無溝の牛角状把手がつく。

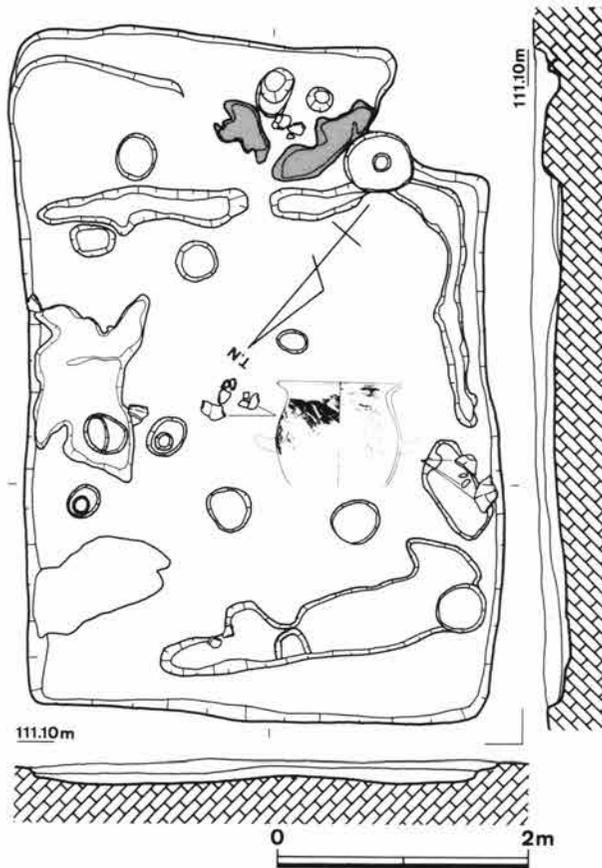
**把手付鍋**；胴部中央に1対の把手をもち、口縁部は強く外反する。

**壺**；偏球胴で、直口の壺。

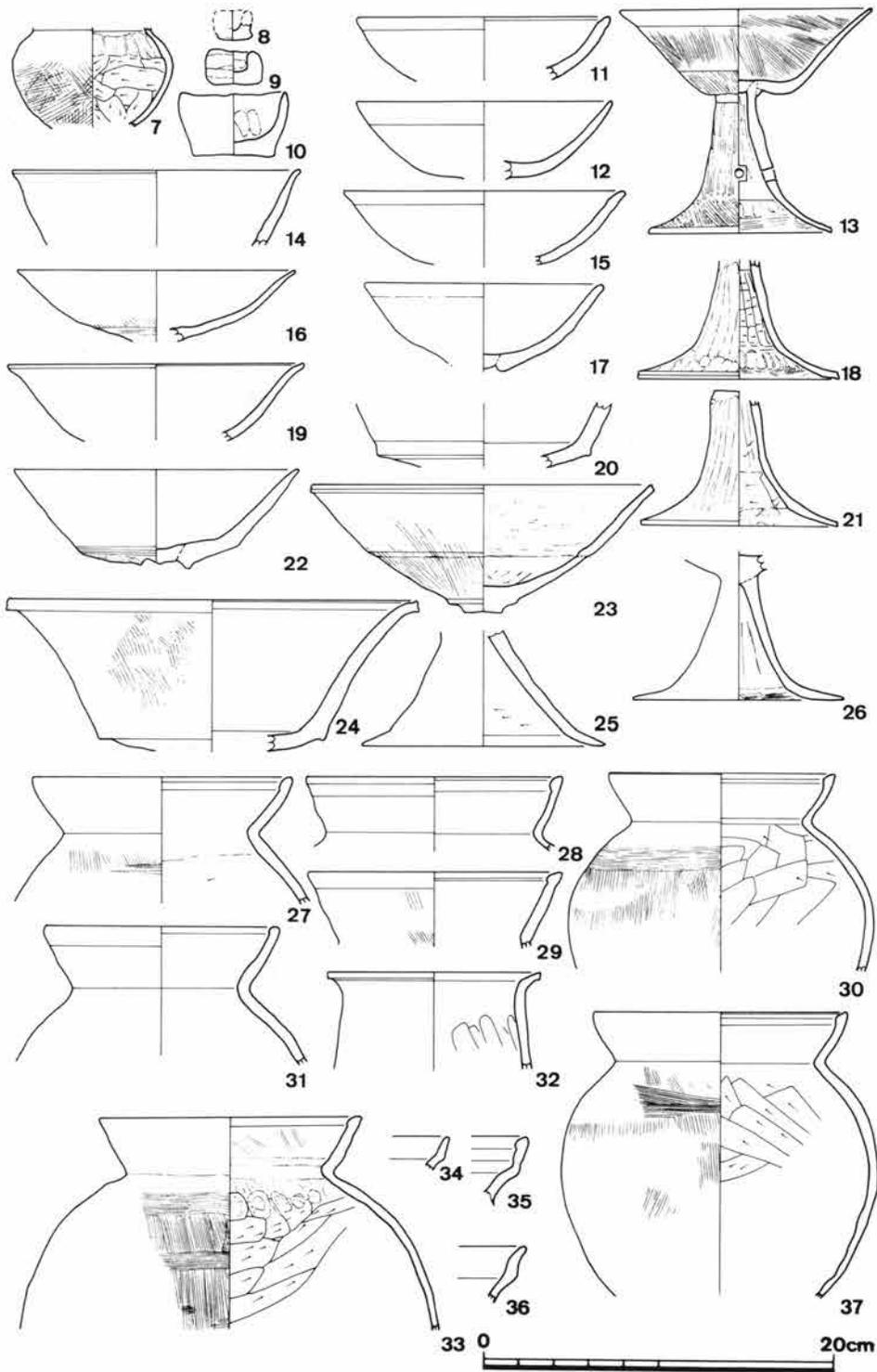
**高杯A**；杯部が稜をもって屈曲し、口縁部は外反して立ち上がる。

**高杯B**；杯部の屈曲が高杯Aよりも緩くなるが、段状に痕跡を留め、脚部は緩やかに広がる。

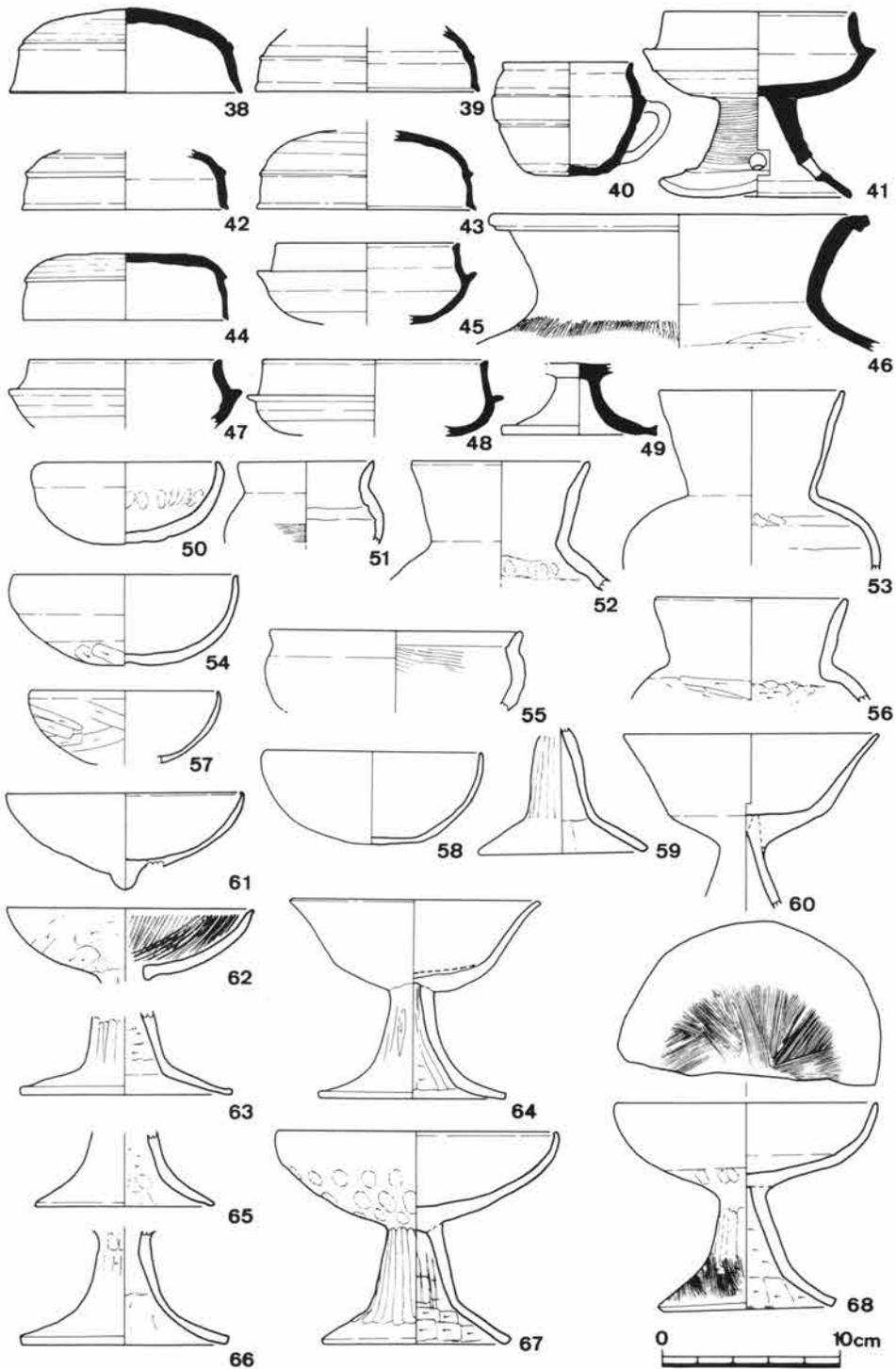
**高杯C**；杯部が椀状に内湾しつつ、立ち上がり、脚部裾は屈曲して広がり、内面にヘラ



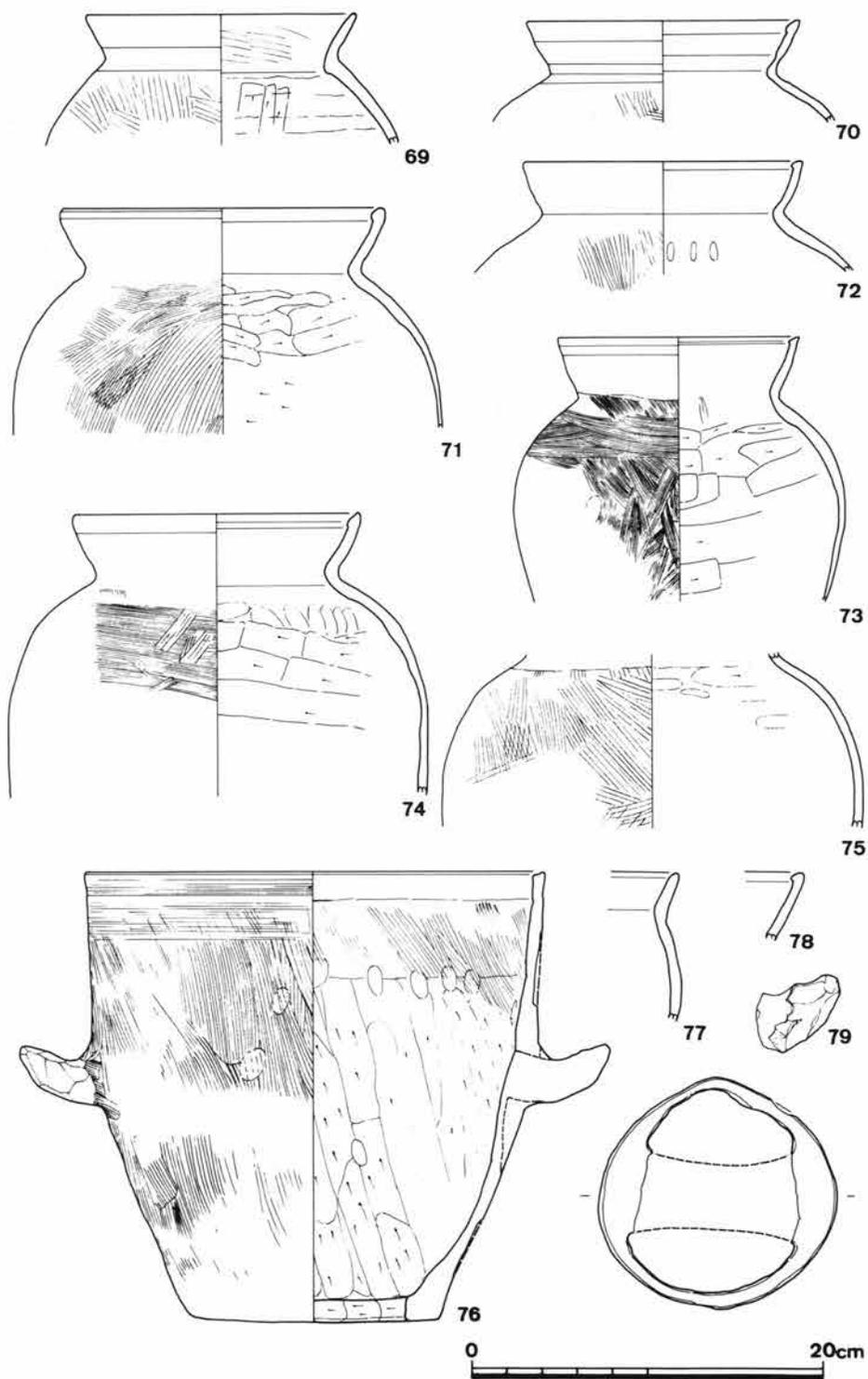
第38図 S H9238住居跡実測図(1/60)



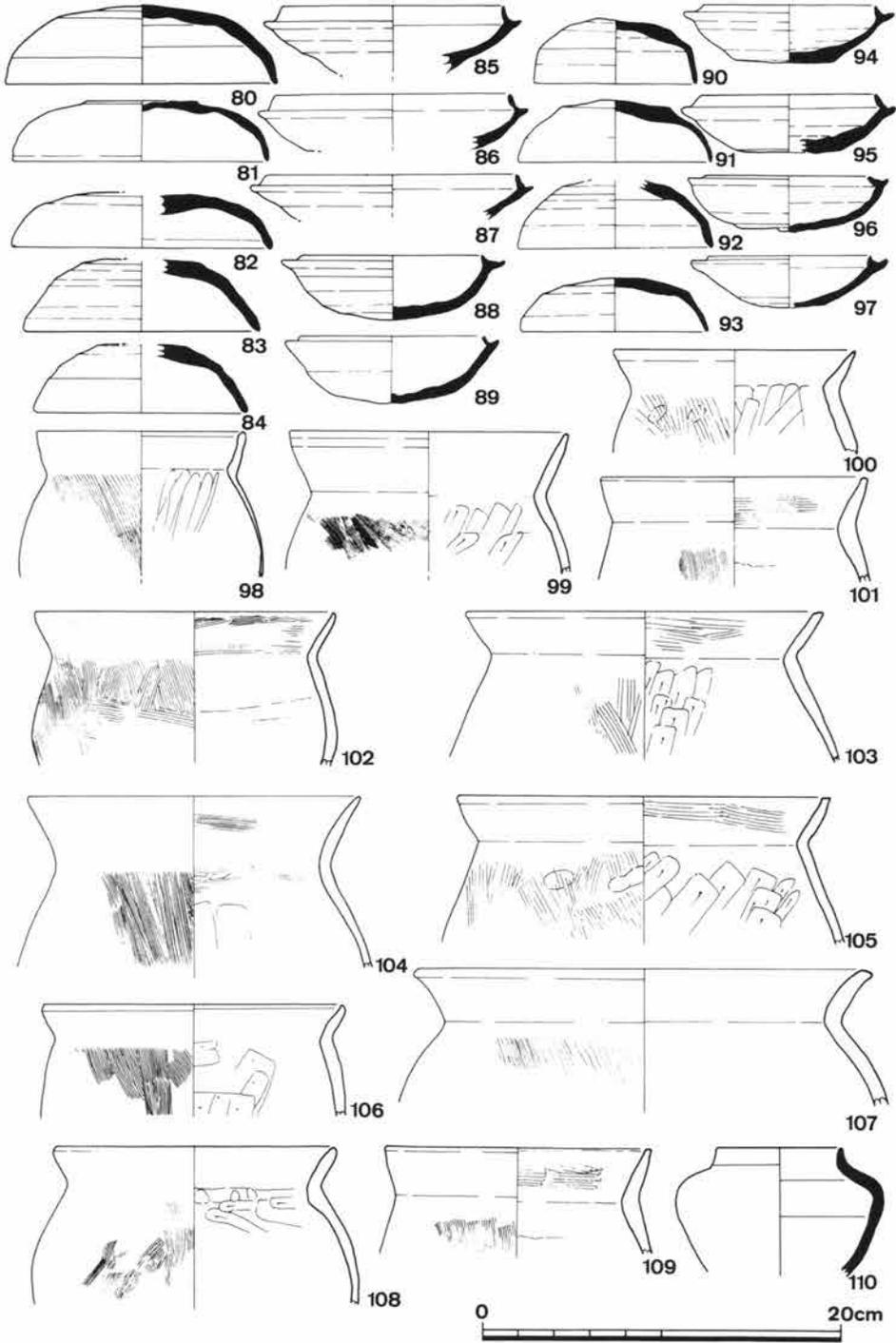
第39図 遺物実測図(2)



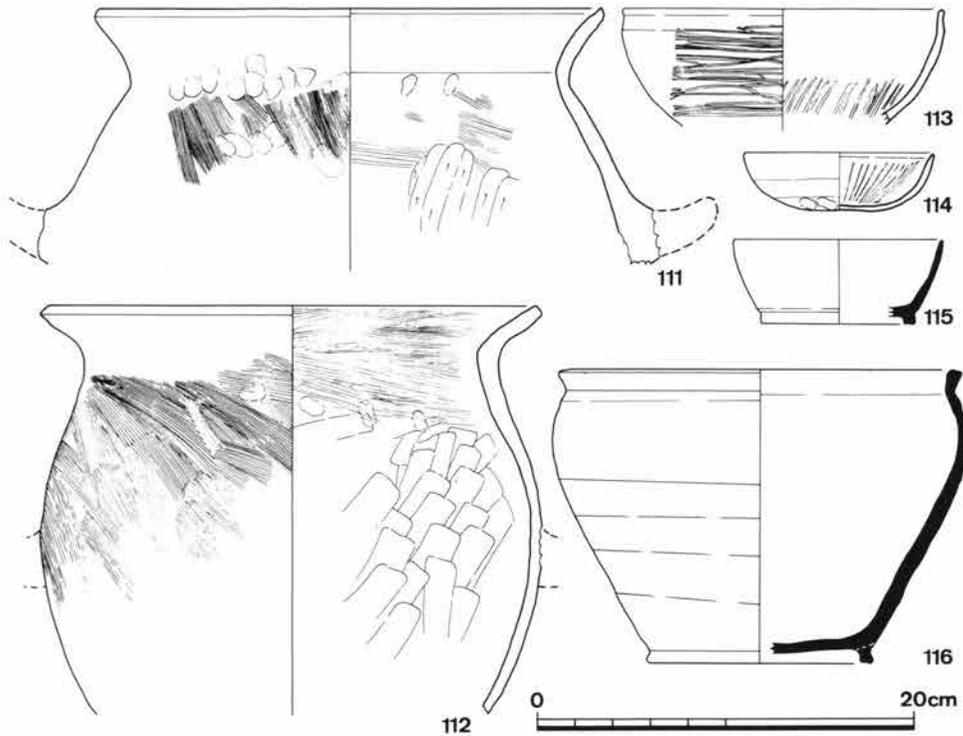
第40図 遺物実測図(3)



第41図 遺物実測図(4)



第42図 遺物実測図(5)



第43図 遺物実測図(6)

削りを施すもの。

鉢A；口縁部が短く立ち上がる小形丸底鉢。

鉢B；口縁部が強く外反して、短く立ち上がる鉢。

椀；大小の法量分化が認められる。暗文状ミガキを施すものがある。

以上の器種分類を行ったうえで、点数の多い甕と高杯について、細部形態を検討した。

甕は、口縁端部に最も敏感な変化を看取できたので、6類に分けた(第48図)。

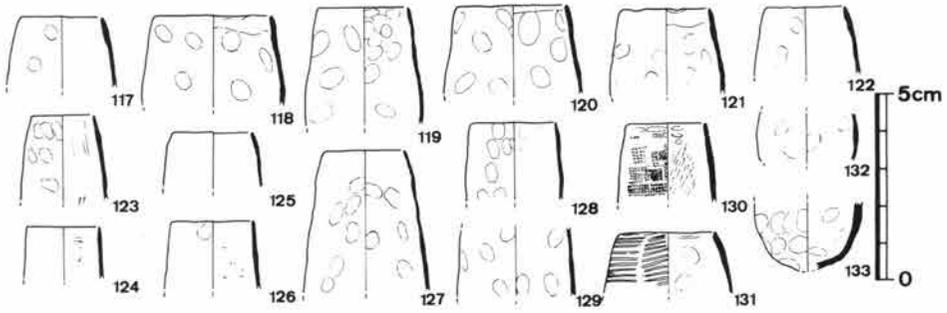
a類；口縁端部を肥厚させたもので、折り返して作るもの(a-1類)と肥厚部を貼り付けて作るもの(a-2類)とがある。

b類；口縁端部が丸く終わるもの。頸部から強く外反して、口縁端部に向かって外反しつつ立ち上がるもの(b-1類)と頸部から緩やかに外反してまっすぐに立ち上がるもの(b-2類)とがある。

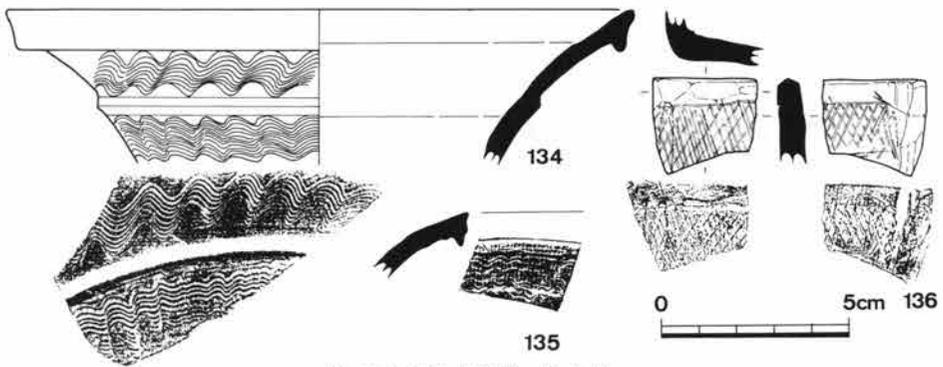
c類；口縁端部に面をもつもの。端面が内傾あるいは外傾するもの(c-1類)と頸部・口縁部に強いナデを施し、端面が水平に終わるもの(c-2類)とがある。

これらを、各住居跡床面での共伴関係を検討すると、以下の通りになる(第52図)。

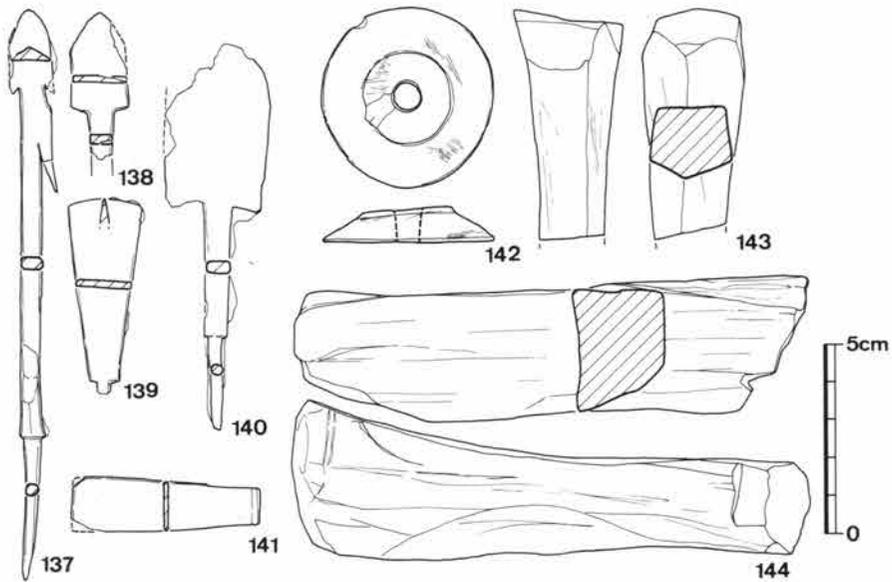
a類とc類とは共伴せず、b-1類は少量だがa類と伴う。b-2類はc-1類、c-



第44図 遺物実測図(7)



第45図 遺物実測図・拓本(8)



第46図 遺物実測図(9)

2類と共伴する。c類内の細別は時期差を表さないが、c類のみでb類を伴わない住居跡がある。したがって、a類からc類へと段階的に移行する組列を組むことが可能である。

高杯については、細部形態や調整技法を確認できる小破片は多いが、完形に復原できうるものは少ない。そのため、口縁部及び杯部と脚部との接合手法の形態と脚部内面の調

煮沸容器					貯蔵容器	
甕 A	甕 B	甕 C	把手付鍋	大形甌	直口壺	
供膳容器						
高杯 A	高杯 B	高杯 C	鉢 A	鉢 B	小形碗	大形碗

第47図 土師器分類模式図

a-1類	a-2類	b-1類	b-2類	c-1類	c-2類

第48図 甕形土器口縁部細部形態分類図

a 類	b 類	c 類

第49図 高杯口縁部細部形態分類図

d類	e類	f-1類	f-2類	g類
 指頭圧痕 ハケ	 ケズリ	 布痕	 布痕後 ケズリ	 ナデ

第50図 高杯脚部細部形態分類図

整を個々に類型化し、各属性の破片が住居跡でどのように共伴、対応しているか見てみる。モデルを第49・50・51図に示した。高杯口縁部は、次のように細分した。

a類；口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部付近をやや外反させたもの。

b類；口縁部が直線的に立ち上がるもの。

c類；口縁部が内湾し、杯部が碗状を呈するもの。

この3類は、甕ほどの明瞭な組列をうかがうことはできないが、a・b類からc類に緩やかに移行する。

脚部内面の調整は次のように分けられる。

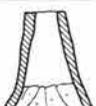
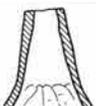
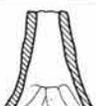
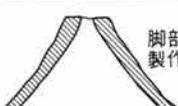
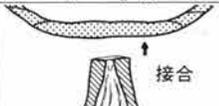
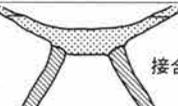
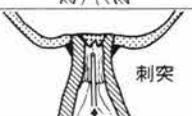
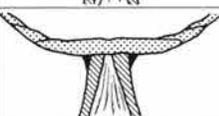
d類；裾部上端に指頭圧をめぐらせ、それ以下をハケ調整したもの。

e類；裾部をケズリ調整したもの。

f類；裾端部に布目圧痕が残るもの(f-1類)と布押さえの後にケズリ調整を行うもの(f-2類)。

g類；裾部内面をナデ調整するもの。

この分類に立ったうえで、時期の組列を検討すると次のようになる。a類は、f-1類と住居跡で共伴するが、e類・f-2類には伴わない。c類はe・f-2類と共伴する。したがって、脚部内面の調整の変化は、d類・f-1類からe類・f-2類への変化、言い換えるならば、ハケ・布による調整からケズリ調整への移行をうかがうことができる。なお、裾部内面に認められる布目圧痕は、安達厚三、木下正史両氏が指摘したように飛鳥地域の上ノ井手遺跡井戸上層(船橋O1併行期)においてみられ、大和から山城、摂津地域一帯に普及した技法<sup>(注1)</sup>である。

	手法1	手法2	手法3	手法4
工程1	 円筒製作	 円筒製作	 円筒製作	 脚部製作
工程2	 シボリ	 シボリ	 シボリ	 杯部製作
工程3	 接合充填	 接合充填	 接合	 接合
工程4	 刺突			

第51図 高杯脚部接手法分類図

次に、高杯脚部と杯部の接合方法の変化について検討する。手法1・2は円盤充填法、手法3・4は杯部と脚部とを分割成形する。とくに、手法1では円盤充填部内面に棒状刺突痕の見られる点が特徴になる。手法の変化は、おおむね手法1の減少、手法3の増加と見ることができる。手法3・4については、手法1と共伴する例がみられるものの、脚部上端を絞り込まない大形高杯の成形にも用いている。このことから、手法3・4ははじめに大形高杯の成形法として登場し、後に小形高杯の成形にも採用されたと考えられる。

以上の検討によって明らかとなった細部形態のセリエーションをまとめたものが、第52図である。

その他の器種について

さらに、既述の検討から漏れた若干の器種についても触れておく。まず、煮沸容器では、大形甑は甑Cと共伴せず、把手付鍋は甑口縁形態c類と伴うものが多い。壺は甑Cと共伴する例はない。供膳容器では鉢A・Bは小形碗との共伴が少ない。ところが一方で、碗を検出した住居跡をみると、高杯の保有数が1点前後となっている。つまり、供膳容器の変遷を図式的に示すならば、鉢から碗へと器種交代が起こり、高杯の減少は新来の器種である大形碗によって補完されたことになる。この変化は大形甑の登場と軌を一にし、須恵器が床面から検出される時期もこれ以降である。したがって、炊飯様式の変化に由来した土器様式の画期を器種の消長から認めることができる。また、搬入土器として、極めて細片

	甑口縁						高杯口縁			高杯脚調整			接合手法				画期			
	a		b		c		a	b	c	d	e	f		g	1	2		3	4	
	1	2	1	2	1	2						1	2							
1	○	○					○	○		○		○		○	○	○	○	○	鹿谷Ⅰ期	a
2	○	○					○	○		○		○		○	○	○	○	○		b
3	○	○	○					○	○		○		○		○	○	○	○	鹿谷Ⅱ期	a
4	○	○	○					○	○		○		○		○	○	○	○		b
5																			鹿谷Ⅲ期	a
6																				b
7			○	○	○														鹿谷Ⅳ期	a
8			○	○	○															b
9					○															c

第52図 甑・高杯の細部形態の消長図

だが近江、山陰、山陰一布留折衷形などがある。ミニチュア土器についても大形でいいいな精製品と手捏ねによる小形粗製品の別がある。また、製塩土器はナデ及び指頭圧で調整した大阪湾岸系と、少量だが備讃瀬戸系のタタキ調整のものがある(第44図)。特に、第8トレンチでは、製塩土器片(125・126・130)が出土した小形長方形の土坑があり、集落内での焼塩を想定できる<sup>(注12)</sup>。

### 須恵器

須恵器の器種には、杯蓋・杯身・コップ形土器・甕・高杯・杯Bが見られる。なかでも、第40図38の蓋は、厚手の作りで端部にシャープさがなく、陶邑窯産とは考えられない。第40図41の短脚高杯は円孔スカシの存在から園部窯産の可能性が高いが<sup>(注13)</sup>、最古段階となる園部町大向1号窯の須恵器は、形態的にはこれらに後出するものである。したがって、園部窯跡群内<sup>(注15)</sup>における、未発見の最古の窯跡でこれらの生産が行われたことを想定したい。第40図40のコップ形土器も胎土の状態から園部窯1期以前に相当するもので、遊離資料だが園部町小山東地区に所在する桑の内9号窯の採集品の中に類例がある。

### 鹿谷遺跡の分期と土器の様相(第53図)

以上の検討の結果、鹿谷遺跡出土土器は四期9小期に分けることが適当と判断して、前述の分期を構成した。ただし、当調査研究センターの調査では空白となる時期及び型式については、亀岡市教育委員会の資料を実見したうえで、説明に加えてある。

器種 画期	煮 沸 容 器					貯 蔵 容 器 壺	供 膳 容 器						
	甕形土器			把手 付鍋	大形 甌		高杯形土器			鉢形土器		椀形土器	
	A	B	C				A	B	C	A	B	大形	小形
鹿谷Ⅰ期	a	■				■	■	■					
	b	■				■	■	■					
鹿谷Ⅱ期	a	■	■			■	■	■	■			■	■
	b	■	■			■	■	■	■			■	■
鹿谷Ⅲ期	a	■	■			■	■	■	■			■	■
	b	■	■			■	■	■	■			■	■
鹿谷Ⅳ期	a	■	■	■								■	■
	b	■	■	■								■	■
	c			■	■							■	■

第53図 鹿谷遺跡土器消長図

**鹿谷Ⅰ期** 煮沸容器では、甕Aが主体。高杯は、SH9207のみ床面検出が8個体と多いものの、他の住居跡では2～3個体を数える。細部形態については、接手法1・2類がほぼ拮抗し、口縁端部を外反させるa類、脚部内面は裾部をハケ・布で調整するd類・f-1類が盛行する。高杯A・Bはほぼ同量だが高杯Cは少ない。なお、布留式の小形丸底鉢、有段口縁鉢の伝統を引く鉢A・Bもこの時期に見られる。壺は亀岡市教育委員会調査区(1992年春期)のSH01にあって、その存在が確認される。搬入系土器には、近江、山陰、山陰-布留折衷形がある。製塩土器、須恵器は床面から検出されていない。ただし、SH9201、SH9203は埋土に須恵器を含んでおり、この2基には竈が付設されるので、鹿谷Ⅰ期は前後2小期(a・b)に区分できる。

**鹿谷Ⅱ期** 煮沸容器では大形甕、供膳容器では椀及び須恵器、製塩土器の登場を画期とする。さらに、甕Bの登場、鉢と小形椀の器種交代を重視して、前後2小期(a・b)に細分する。甕Aは鹿谷Ⅰ期の特徴を引き継ぐが、口縁形態b-1類の甕Bが比率を高める。高杯は、口縁形態の内湾するc類、脚部内面はケズリ調整であるe類及びf-2類が卓越し、脚部裾の屈曲がより著しくなる高杯Cが普及する。接合法は、手法3が多い。鉢はⅡb期には減少し、代わって小形椀が登場する。須恵器は陶邑窯産と判断される製品と園部窯産と考えられるものとがある。製塩土器はすべて丸底砲弾形で、主として、大阪湾岸の沿岸地域から供給されていると思われる。

**鹿谷Ⅲ期** 当センターの調査でこの時期に該当する住居跡はないが、亀岡市教育委員会調査区にこの時期に該当する資料がある。鹿谷Ⅱ期の器種が残るか否かで前後2小期(a・b)に細分する。甕B・大形甕・壺・椀・須恵器などが主体となる。甕A、高杯A・B・C及び製塩土器は前半期で消滅する。この時期の詳細な土器の様相については、1992年度春期の亀岡市教育委員会の調査結果の公表を待ちたい。

**鹿谷Ⅳ期** 口縁形態c類の甕Cの出現・普及を画期とする。把手杯鍋の出現に伴い、大形甕が消滅する時期をb期、暗文状ミガキ施文の椀の出現をc期とする。Ⅳb・c期は、古墳時代的な土器様式から律令的な土器様式への移相を呈しているとみなせよう。この時期では、山陰や近江などの広域的な土器様式が崩壊し、山城地域の甕が認められる一方で、在地独特の形態をもった甕がある。これは、2段のナデをめぐらせることで、口頸部を引きのばした形態を呈し、ハケ調整した球形の胴部をもつ甕である。当センターの調査区では出土例はないが、古墳時代後期における「丹波型甕」と仮称<sup>(注17)</sup>したい。

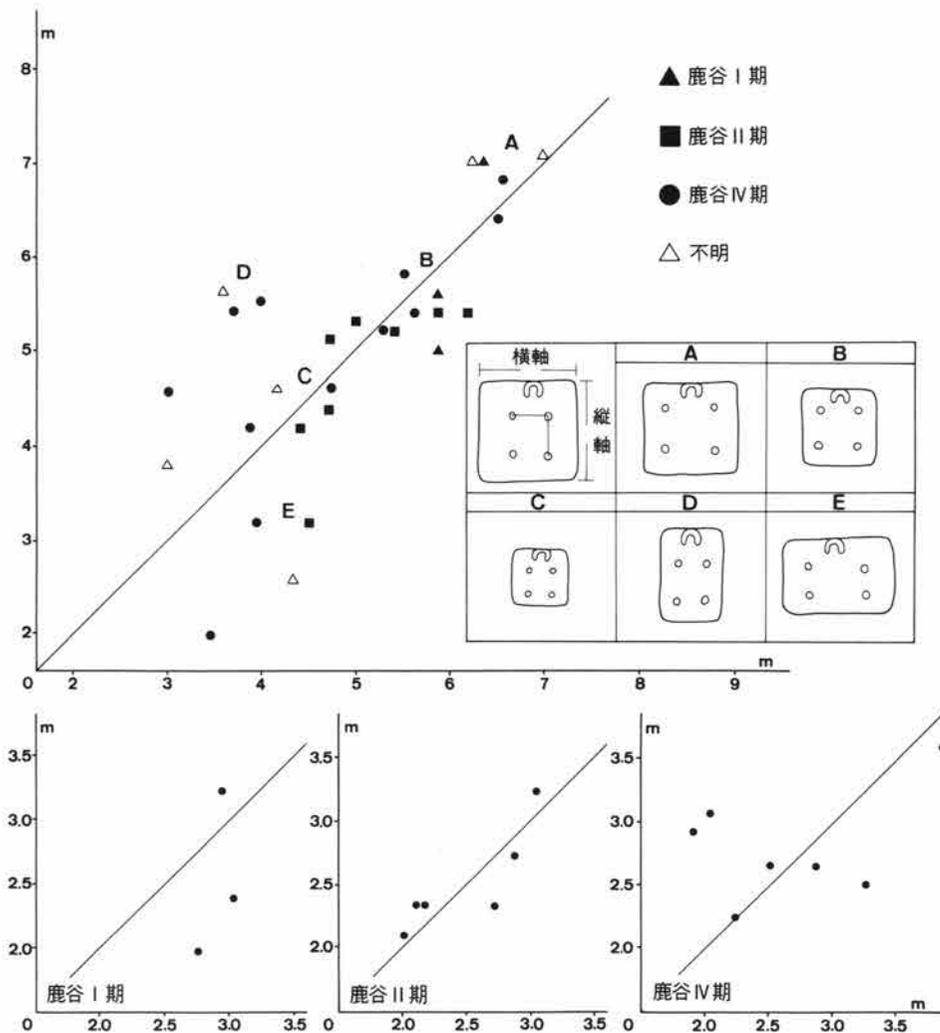
鹿谷遺跡から検出された土器様式は、以上の四期9小期に整理することができる。各期の年代をあてるならば、それぞれ、Ⅰ期に5世紀後半、Ⅱ期に5世紀末～6世紀初頭、Ⅲ期に6世紀中葉～6世紀後半、Ⅳ期に6世紀後葉～7世紀中葉と年代の1点を押さえる

ことができよう。なお、この分期は土器のみの変化にとどまらず、遺構及び集落の動向とも密接に関連した画期である。

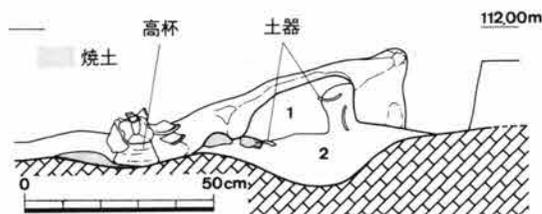
#### 4. 総括

前章までの報告を土台として、鹿谷遺跡の変遷を復原し、あわせて南丹波の古墳時代史の中で歴史的に評価することが本節での課題である。その前提として、土器の変化における画期が、住居跡形態、竈、住居内祭祀の変遷に対応している状況を述べていきたい。

住居跡 まず、住居跡の規模を検討してみよう。竈の付く辺を横軸、それに直交した辺



第54図 竪穴式住居跡及び主柱穴の規模分布図  
(上図；住居跡規模 下図；主柱穴間隔規模)



第55図 SH9226住居跡竈断面図

1. 乳白色粘土 2. 墨片・灰の混じる褐色土

を縦軸としてグラフを描くと第54図に示したようにA～Dの5領域にまとまる。A・B・Cは正方形住居における大・中・小の関係、D・Eは縦長か横長かを示すことになる。そこで、鹿谷Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ期の時期別規模分布を見ると、Ⅰ期はA・Bに、

Ⅱ期はB・C・Eに、Ⅳ期はA・B・C・D・Eとなる。したがって規模の変化は、Ⅰ期は大形ならびに中形、Ⅱ期は中形及び小形、Ⅳ期は規模、平面形とも多様なものへと分散するという結果が出た。これをさらに明確に示すものが支柱穴どうしの距離である。グラフで提示したとおり、Ⅱ期の住居の支柱穴の配置は正方形に近い。言うまでもなく、支柱穴の配置は住居の上屋構造と連動しているため、正方形に近いということは上屋が規格的なものであったことを示唆している。したがって、規模の検討の結果、Ⅰ期は大形で不正形な住居、Ⅱ期は小形で定型化した住居、Ⅳ期は多様な規模及び形態の住居へと分散するといった変遷を導き出すことができる。

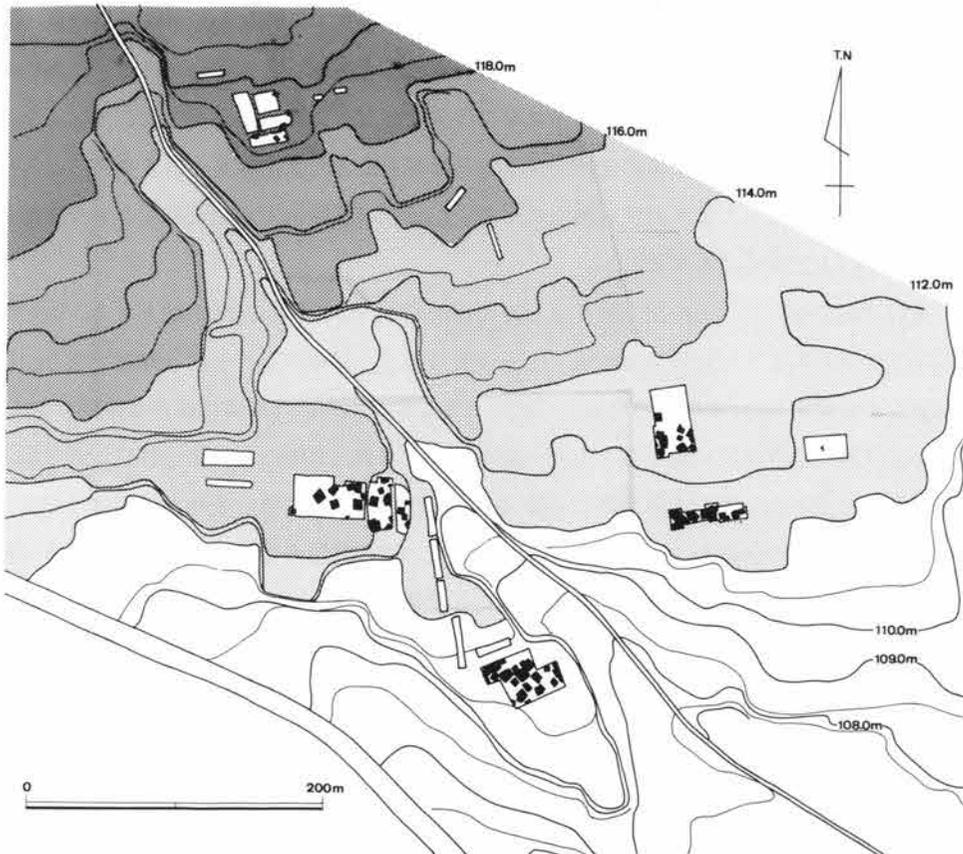
**竈** 今年度の調査区では竈の良好なものがなく、わずかにSH9226及びSH9230などの例から使用状況が推測できるにすぎない。ここでは鹿谷遺跡の竈の特徴を簡単にまとめておく。竈はⅠb期以降の住居に付設される。これは、南丹波地域でも初期の導入例と言えるが、構造がうかがえるほど遺存の良好なものはない。Ⅱ期になって本格的に普及するものの、Ⅰ・Ⅱ期の竈は住居の壁からやや離れて構築されたものが多い。支脚には高杯を転用した土器支脚と方柱状の花崗岩を用いる石製支脚があり、Ⅱ期は土器支脚と石製支脚、Ⅳ期は石製支脚のみという時期的変化がある。これは一貫して石製支脚を使用し続けた天若遺跡の集落とは異なっている<sup>(注18)</sup>。竈は地山を掘り残さず、すべてスサ入りの粘土で構築するが、中にはスサ以外に土器を塗り込めて竈壁体を構築した例も認められる。また、竈構築以前に、燃焼部に相当する位置に皿状の土坑を掘っていることが注意される(第55図)。これは、地中の水分が毛细管現象によって上昇することを防止するためと考えられ、この遺構面の下に湧水層の存在することが原因である。なお、支脚の位置から見て、竈は一つ掛けであったと想定される<sup>(注19)</sup>。

**土器破碎供献** 住居跡においても古墳と同様に、土器供献による祭祀行為、とりわけ土器の破碎供献の儀式がある。これはすでに加悦町有熊遺跡の調査などで注意されていた<sup>(注20)</sup>。鹿谷遺跡においては、Ⅱ期までは土器を使用した祭祀行為を確認することができる。それを、供献行為の場所によって分けるならば、Ⅰa期には住居四隅の屋内土坑中、Ⅰb期に

は住居壁際の屋内土坑中、Ⅱ期には竈付近などの住居床面へと屋内土坑の減少に伴って変化する。さらに、供献には土坑を意識的に埋め戻して上面に行うものと、底面に行うものがある。供献土器の種類には、杯部と脚部とを分割した高杯、甕体部、ミニチュア土器などがある。ただし、破碎された土器で接合するものはほとんどない。なお、これらの供献行為が、住居の建造から廃絶までのどの時点でなされたものかは明確にしがたい。強いて推定するならば、Ⅰ期は四隅という位置から地鎮祭的な色合いが強い一方、Ⅱ期は竈廃絶に対する儀式ではないかと思われる。また、既述したように、SH9207では住居覆土上面からミニチュア土器が検出されているから、住居埋没後の祭祀行為の存在も予想される。

#### 鹿谷遺跡の変遷

以上の多岐にわたる遺構及び遺物の検討から、鹿谷遺跡の変遷を以下のように復原することができる。まず、鹿谷地区の基盤となる扇状地は、楔形石器の存在(第24図2)によって、縄文時代にはすでに形成されていた。それ以前の扇状地堆積物の下位には少なくとも



第56図 鹿谷遺跡全調査区及び検出住居跡

3層の泥炭化していない有機物層があるので、古亀岡湖の一部か否かはともかくとしても、洪積世には寒冷で植物が繁茂していた環境を想像することができる。このような集落以前の調査については別稿にて詳述することにしたい。縄文・弥生時代に関しては、遺物はあるが、明瞭な遺構はない。ただし、1992年春期の亀岡市教育委員会調査においても縄文時代の石鏃が検出されており、周辺のおそらくより山麓部に縄文時代の生活域があったのではないかと考えられる。一方、弥生時代の鹿谷地区は、前期以来の拠点集落である太田遺跡とその墓域である天川遺跡<sup>(註21)</sup>とに挟まれて、居住地とはならなかったようである。したがって、鹿谷地区の集落形成は古墳時代中期以降と結論づけることができよう。

鹿谷Ⅰ期の鹿谷遺跡の土器は観察表で提示したように多様だが、特徴的な胎土にしたがって、石英あるいは黒雲母等の火成岩起源の鉱物を多量に含み、赤褐色に発色したものと、チャート粒などを含み黄褐色～灰褐色を呈したものとと二分される。これは、前者が鹿谷地区の位置する山内川水系、後者が大堰川水系の素地によって製作された土器であると考えられる。この理由は、山内川が花崗岩を基盤とする行者山を貫流するのに対して、大堰川はチャートを主体としたいわゆる丹波古生層から供給された粘土を形成していることに求められる。両者はⅠ～Ⅳ期を通じてみられるが、とりわけⅡ期以降に消滅する大形高杯(第39図24)の胎土が大堰川系であることに注目すれば、千代川地区から太田地区にかけての行者山東麓の大堰川水系の伝統的集落から分村してきた新開集落と言えるだろう。そうであれば、先述したⅠ期の住居内土坑への土器供献は新開地での地祇祭祀という意味をも含んでいると推定できよう。

鹿谷Ⅱ期になると、山内川に張り出した舌状扇状地の各地に生活域が拡大する。この時期は、先述したように住居域の拡大・土器様式の変化及び竈の定着という画期であり、園部窯産の供給を受け、製塩土器の搬入に示されるように恒常的な集落の存在が推定できる。特に、Ⅱ期の住居形態に類する、千代川遺跡第5次調査SH02や北金岐遺跡C地点SB01では5世紀後半から末の大坂湾岸系・備讃瀬戸系の製塩土器が認められ、亀岡盆地でも大堰川西岸地域との密接な交流がうかがえる。また、この時期の在地首長の墓域は集落北側の丘陵斜面に存在し、丘陵頂部の稗田野西山1号墳(一辺17mの方墳)がその嚆矢となる。亀岡盆地では、枅塚古墳、瀧の花塚古墳、坊主塚古墳などの30m級の方墳と、北之庄古墳、馬場ヶ崎1・2号墳などの17～20m級の方墳が認められる。亀岡盆地ではこのような方墳という共通の墳丘形態で造墓活動を行う在地首長と、首長の居館とは占地を異にする民衆とが小地域集団を形成しており<sup>(註22)</sup>、これらの小地域集団の結合によって各集落内での必要物資を他地域から搬入していたと思われる。

鹿谷Ⅲ期の住居跡は検出できなかったが、6世紀前半には多様な形態の横穴式石室をも

つ前方後円墳と小円墳にと、首長層でもその階層格差が著しくなる。ガウランドの調査した鹿谷古墳や拝田16号墳など石棚付きの横穴式石室を紀氏と関連づけるならば<sup>(註23)</sup>、在地首長層に対する畿内政権の介入がその背景として考えられ、横穴式石室の導入、定着の過程においてⅡ期とは異なる集団関係がⅢ期に成立したといえる。

鹿谷Ⅳ期には前述したように、Ⅱ期のような住居の規模の画一性はみられず、民衆内部の均質性は失われる。この時期にはS H9225で検出した須恵器杯内面に赤色顔料の付着がみられる。Ⅳc期には青野型に類する住居(S H9238)が現われ住居が廃絶する。集落廃絶の直接的な原因について想定することはむずかしいが、今後の課題であろう。

(野島 永・河野一隆)

付表1 出土遺物観察表(数字の単位はcm)

石、石英 長、長石 雲、黒雲母 角、角閃石 チャ、チャートの含有鉱物を示す。

図版 番号	出土遺構	器種及び 細部形態	法量(cm)				色調	含有鉱物
			A; 口径 C; 器高	B; 底径 D; 胴径				
7	S H9207	鉢A	D; 9.3				橙褐色	長、石、雲
8	S H9209	手捏ね土器	B; 1.8				橙褐色	
9	S H9207	手捏ね土器	A; 2.4				黄褐色	
10	S H9207	手捏ね土器	A; 6.3	B; 4.7			黄褐色	
11	S H9201	高杯B(b類)	A; 12.7				橙褐色	
12	S H9201	高杯B(b類)	A; 14.8				橙褐色	
13	S H9207	高杯B(a、d類, 手法2)	A; 14.4 C; 13.0	B; 10.5			橙褐色	雲
14	S H9207	高杯B(b類)	A; 16.2				暗褐色	石、長、雲
15	S H9201	高杯B(b類)	A; 16.2				橙褐色	長
16	S H9207	高杯B(a類)	A; 16.0				黄褐色	長
17	S H9207	高杯B(b類)手法1	A; 13.4				橙褐色	長
18	S H9207	高杯脚(d類)	B; 11.6				橙褐色	長、チャ
19	S H9207	高杯B(a類)	A; 16.8				暗褐色	長
20	S H9207	高杯A					黄褐色	長、雲、チャ
21	S H9201	高杯脚(e類)	B; 11.3				橙褐色	長
22	S H9207	高杯B(b類)手法2	A; 16.4				橙褐色	石、長
23	S H9207	高杯(b類)手法4	A; 19.2				暗褐色	石、長、雲
24	S H9201	高杯A(a類)	A; 22.0				橙褐色	長
25	S H9201	高杯脚	B; 14.0				灰褐色	長、雲
26	S H9207	高杯脚(d類)手法3	A; 11.8				橙褐色	長
27	S H9207	甕A(a-1類)	A; 14.7				橙褐色	石、長
28	S H9207	甕A(a-1類)	A; 15.2				橙褐色	長
29	S H9207	甕A(a-2類)	A; 14.5				橙褐色	石、長、雲
30	S H9207	甕A(a-2類)	A; 13.0				橙褐色	長
31	S H9207	甕A(a-2類)	A; 13.1				橙褐色	石、長
32	S H9207	鉢	A; 14.2				灰褐色	石、長

33	S H9207	甕A(a-1類)	A; 15.0			暗褐色	長
34	S H9209	甕(近江系)				赤褐色	雲
35	S H9207	甕(山陰系)				灰褐色	雲
36	S H9207	甕(丹後系か)				赤褐色	長
37	S H9207	甕A(a-2類)	A; 14.6			暗褐色	石
38	S H9204	杯蓋	A; 13.3	C; 4.9		灰白色	長、雲
39	S H9209	杯蓋	A; 12.6			青灰色	
40	S H9229	コップ形土器	A; 7.2 C; 6.5	B; 5.9		青灰色	長
41	S H9204	高杯	A; 10.6 C; 10.8	B; 10.7		灰白色	長
42	S H9209	杯蓋	A; 11.7			青灰色	長、雲
43	S H9209	杯蓋	A; 12.3			青灰色	石、長
44	S H9226	杯蓋	A; 11.8			青灰色	長
45	S H9237	杯身	A; 10.3			青灰色	長、雲
46	S H9229	甕	A; 21.2			青灰色	長
47	S H9209	杯身	A; 10.9			灰白色	長
48	S H9202	杯身	A; 12.5			青灰色	長、雲
49	S H9230	高杯脚	B; 8.8			黄灰色	長
50	S H9230	小形椀	A; 10.5			橙褐色	長
51	S H9204	鉢A	A; 7.7			黄褐色	石、長、チャ
52	S H9211	直口壺	A; 10.1			黄褐色	長、雲
53	S H9226	直口壺	A; 10.4			黄褐色	長、雲、チャ
54	S H9226	大形椀	A; 12.6			橙褐色	長
55	S H9237	鉢B	A; 14.1			橙褐色	長、チャ
56	S H9211	直口壺	A; 11.2			黄褐色	長、雲
57	S H9211	小形椀	A; 10.2			橙褐色	?
58	S H9204	大形椀	A; 12.2	C; 5.2		赤褐色	?
59	S H9204	高杯脚(e類)	B; 9.6			橙褐色	石、長
60	S H9226	高杯B(b類、手法2)	A; 14.2			橙褐色	
61	S H9211	高杯C(c類、手法2)	A; 15.4			橙褐色	長、チャ
62	S H9211	高杯C(c類)	A; 14.3			橙褐色	長
63	S H9226	高杯脚(g類)	A; 12.2			橙褐色	石、長、雲
64	S H9229	高杯B(b、g類、 手法3か)	A; 13.8 C; 11.7	B; 10.4		橙褐色	石、長、雲
65	S H9230	高杯脚(e類)	A; 10.1			暗褐色	長
66	S H9229	高杯脚(g類)	A; 11.4			黄褐色	長、雲
67	S H9204	高杯C(c、e類、手法3)	A; 16.0 C; 12.3	B; 10.2		橙褐色	長、雲、チャ
68	S H9226	高杯C(c、e類 手法3)	A; 14.6 C; 12.0	B; 9.4		黄褐色	長
69	S H9211	甕B(b-1類)	A; 15.6			黄褐色	石、長
70	S H9209	甕A(a-1類)	A; 15.4			橙褐色	長
71	S H9226	甕A(a-2類)	A; 19.5			赤褐色	長、チャ

72	S H9205	甕A (a-2類)	A; 16.0		黄褐色	石、長
73	S H9226	甕A (a-1類)	A; 13.8		橙褐色	長、チャ
74	S H9204	甕A (a-2類)	A; 16.2		橙褐色	長、雲
75	S H9205	甕Aか	A;		橙褐色	?
76	S H9209	甕	A; 26.5 C; 25.9	B; 14.5	橙褐色	長、雲
77	S H9204	甕B (b-2類)			橙褐色	長、雲
78	S H9204	甕A (a-1類)			橙褐色	長
79	S H9202	甕把手			黄褐色	長、雲
80	S D9201	杯蓋	A; 15.1	C; 4.3	灰色	
81	S H9218	杯蓋	A; 14.4	C; 3.4	青灰色	長
82	S H9239	杯蓋	A; 14.6		青灰色	
83	S H9221	杯蓋	A; 12.8	C; 3.9	青灰色	長
84	S H9215	杯蓋	A; 12.0	C; 3.9	青灰色	長
85	S H9211	杯身	A; 10.6		青灰色	長
86	S H9230	杯身	A; 14.5		青灰色	長
87	S H9232	杯身	A; 13.6		青灰色	長
88	S H9223	杯身	A; 10.0	B; 3.6	淡青灰色	長
89	S H9223	杯身	A; 10.2	B; 3.9	淡灰色	長
90	S H9217	杯蓋	A; 9.1	B; 3.6	青灰色	長
91	S H9221	杯蓋	A; 10.6	B; 3.6	青灰色	
92	S H9227	杯蓋	A; 10.9		青灰色	
93	S H9214	杯蓋	A; 10.6	B; 3.0	青灰色	長
94	S H9232	杯身	A; 9.5	B; 3.3	淡青灰色	
95	S H9225	杯身	A; 9.8		青灰色	漆付着
96	S H9232	杯身	A; 9.1	B; 3.1	青灰色	
97	S H9227	杯身	A; 11.0	B; 2.9	青灰色	
98	S H9215	甕B (b-2類)	A; 11.8		暗褐色	長、雲
99	S H9215	甕B (b-2類)	A; 15.8		橙褐色	長
100	S H9216	甕B (b-2類)	A; 13.5		橙褐色	
101	S H9236	甕C (c-2類)	A; 14.8		橙褐色	長、角
102	S H9220	甕B (b-2類)	A; 15.8		灰褐色	雲
103	S H9215	甕C (c-2類)	A; 20.1		橙褐色	石、長、雲
104	S H9215	甕B (b-2類)	A; 18.6		橙褐色	長、雲
105	S H9218	甕C (c-2類)	A; 20.6		淡褐色	
106	S H9224	甕B (b-2類)	A; 16.6		淡褐色	
107	S H9227	甕C (c-1類)あるいは鍋	A; 26.2		黄褐色	石、長
108	S H9221	甕B (b-1類)	A; 15.2		淡褐色	
109	S H9236	甕C (c-2類)	A; 14.8		橙褐色	長、角
110	S D9201	短頸壺	A; 7.0		白灰色	
111	S H9215	把手付き鍋	A; 28.4		橙褐色	石、長、雲、チャ
112	S H9238	把手付き鍋	A; 26.4		黄褐色	長、雲、角
113	S H9215	大形椀	A; 17.2		淡青灰色	
114	S H9214	小形椀	A; 10.2	C; 3.1	橙褐色	長

115	S H9215	杯B	A;	11.2	B;	8.4	青灰色	
			C;	8.8				
116	S K9229	鉢(張り付け高台)	A;	16.0	B;	12.2	黄褐色	長
			C;	15.9				
117	S H9204	製塩土器	A;	4.5			黄褐色	長、チャ
118	S H9204	製塩土器	A;	6.2			淡褐色	雲、チャ
119	S H9211	製塩土器(煤付着)	A;	4.8			黄褐色	長、チャ
120	S H9211	製塩土器	A;	5.7			褐色	石、雲
121	S H9211	製塩土器	A;	4.8			淡褐色	石、長
122	S H9211	製塩土器	A;	4.4			淡橙褐色	長、雲
123	S H9211	製塩土器	A;	3.2			灰白色	雲、チャ
124	S H9204	製塩土器	A;	3.8			灰白色	石、長
125	8トレ S K01	製塩土器	A;	4.3			灰褐色	石、長
126	8トレ S K01	製塩土器	A;	4.2			淡黄褐色	石、雲
127	8トレ S K01	製塩土器	A;	4.2			黄白色	長、チャ
128	S H9211	製塩土器	A;	4.4			灰白色	石、雲
129	S H9211	製塩土器					灰褐色	石、長
130	8トレ S K01	製塩土器(格子叩き)	A;	4.0			褐色	石、雲
131	S H9211	製塩土器(平行叩き)	A;	5.2			褐色	長、雲
132	S H9211	製塩土器					淡褐色	長、雲
133	S H9211	製塩土器					灰褐色	石、長
134	S H9201	甕口縁部	A;	16.6			青灰色	
135	S H9203	甕口縁部(細片)					青灰色	
136	S H9207	陶質土器?(格子刻線)					青灰色	
137	S H9211	独立逆刺付鉄鎌	長	15.3				
138	9トレ	尖根三角式鉄鎌	長	4.0				
139	9トレ表採	方頭斧箭式鉄鎌	長	5.1				
140	S H9215	広根式鉄鎌	長	10.2				
141	S H 9226	不明鉄器	長	5.0				
142	S H9207	滑石製紡錘車	長	4.6				
143	S H9207	砥石	長	6.1				
144	S D9201	砥石	長	17.0				

注1 調査参加者は下記の通りである(順不同、敬称略)

橋本 稔、波部 健、見須俊介、小松佳彦、柳川和也、寺内寿明、義久 仁、伊藤義敏、松尾和也、鶴飼 崇、笠井英応、植田和幸、山本泰史、横山成己、吉田 靖、大窪淳司、木村隆之、三黒広史、畑 謙治、片岡美絵、石黒朋美、佐々木直、小瀬えり子、岡本明子、岡野由美、中田知孝、村上典子、岡本美和子、荻野富紗子、西川悦子、丹新千晶、牧野當子、小田英子、松下道子、森川敦子、鈴木みかる、吉田八重子、堀 源一、高田眞由美、関口睦美、田村末雄、湯浅義雄、石橋愛子、山田きん子、湯浅彰郎、法貴浩治、金城龍成、松本芳雄、田中寛治、竹岡喜代子、山脇キミエ、吉岡繁雄、竹岡昭子、桂 清、高田政也、高田賢治、荒木和子、法貴ひろ子、堤 和子、堤 弘子、島崎綾子、南馬美貴子、吉岡和美、谷 照枝、

今西敬子、小林昌子、八木美重子、八木きみ子、俣野照恵、竹岡美恵子、松山晃子、野々村礼子、俣野静子、山内きくの。

注2 なお、大阪大学大学院文学研究科の杉井 健氏から竈に関して紙上でご教示いただいた。また、亀岡市教育委員会の樋口隆久氏、亀岡市文化資料館の中沢 勝氏には鹿谷遺跡の遺物見学の便宜を図っていただいた。深謝したい。

注3 先行調査の結果は以下のとおりである。

第1次；京都府教育委員会、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

鶴島三壽「鹿谷遺跡平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

第2次；亀岡市教育委員会(1992年1月22日～3月26日)、報告書作成中。

注4 William Gowland ; The Dolmens and Burial Mounds in Japan, Archaeologia, 1897.

William Gowland ; The burial mounds and dolmens of the early Emperors of Japan, Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland XXXVII, 1907.

なお、朝日新聞1992年11月27日付の紙上で、石棚付の横穴式石室の写真が公開された。地元での聞き取りによれば、現在、旧大谷鉾山の造成地には「鹿谷の三ツ塚」と呼ばれた古墳があったというから、これがガウランドの調査した石室の可能性が高い。また遺物は大塚初重氏が「大阪府芝山古墳出土遺物をめぐる諸問題」(『考古論集』慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集 松崎先生退官記念事業会 広島大学 1977年)の中で、杏葉を紹介しているほか、大英博物館からも写真が公開されている。

L.V.H.Smith and T.Clark.;Japanese Art, Masterpieces in British Museum,1990

注5 水谷壽克・村尾政人・田代 弘ほか「太田遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

注6 現地の自然科学的ならびに地理学的な調査は、寒川 旭氏及び中塚 良氏の指導を受けたが、今回の概報では紙幅の都合で触れられなかった。調査地からは、噴砂や地割れなどの地震の痕跡も検出されている。これらの概要は、近く『京都府埋蔵文化財情報』に報告する予定である。

注7 古墳時代より新しい時期の遺構としては、第3トレンチ全体に近世の素掘り溝が検出されている。この他にも、中・近世の遺物が少量出土している。

注8 石井清司「京都府下における竪穴式住居跡について」『京都考古』第42号 1986

注9 この図は、現地形のレベル高からコンターラインを復原し、そこに第1次、第2次調査の遺構配置図をはめ込んだ。それらは、上記の概報第48冊をはじめ、現地説明会資料から引用した。

注10 青野型住居の特徴は次のとおりである。

中村孝行「青野遺跡第5次調査発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982、及び近澤豊明「青野型住居について」(『古墳時代の竈を考える』埋

蔵文化財研究会) 1992

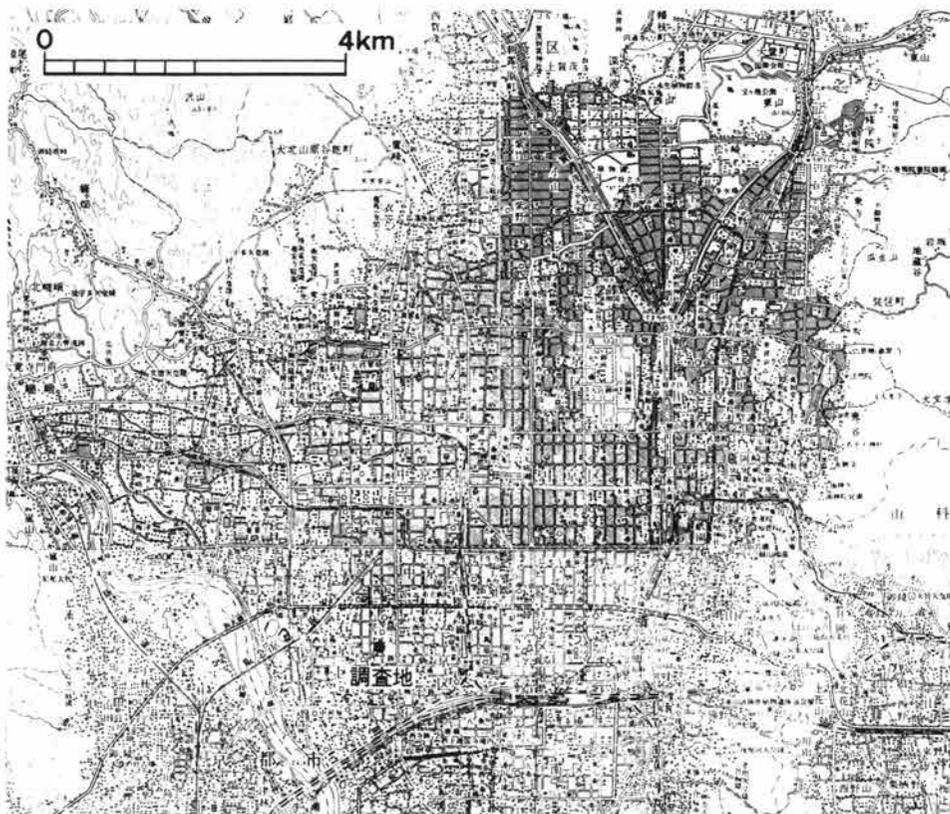
- 注11 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2冊 1974、p. 123。
- 注12 このような土坑の例として、長岡京市下海印寺遺跡例があげられる。  
岩崎 誠「乙訓地域出土の製塩土器」『京都考古』第43号 1986
- 注13 菱田哲郎氏が指摘するように、円形透かしの高杯は丹波地域一帯に分布する。これは陶邑古窯跡群の光明池支群の技術的特徴を継承している(菱田哲郎「須恵器生産の拡散と工人の動向(考古学研究会第38回総会研究報告要旨)」『考古学研究』第38巻第4号 1992)。
- 注14 高橋美久二「園部町の古窯跡群」『京都考古』第7冊 1974
- 注15 同志社大学考古学実習室園部町遺跡分布調査研究会「園部町における考古学的調査—分布調査の成果」Ⅲ 1981
- 注16 山田邦和「園部窯址群とその問題点」(注15文献所収)
- 注17 丹波地域における在地型式の甕形土器は、亀岡市池尻遺跡の報告の中で、すでに田代 弘氏が口縁部内面に強いナデをめぐるせた甕が丹波、丹後、但馬に見られることを指摘している。次いで小池 寛氏は、木津川河床遺跡土器の検討の中で、前期の甕形土器の中に「丹波系の要素」に注意した。この甕は肥後弘幸氏が志高遺跡の報告の中ですでに注意し、由良川中流域に分布の中心を見るという。今後の資料の増加に伴い、この型式の甕形土器への注意の喚起を促したい。
- 注18 三好博喜・鍋田 勇ほか「天若遺跡平成元、2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第42冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991  
三好博喜・柴 暁彦ほか「天若遺跡平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注19 杉井 健「竈研究の可能性」(前掲『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会) 1992
- 注20 家根祥多編『有熊遺跡第1・2次発掘調査概報』(立命館大学文学部学芸員課程研究報告第3冊 立命館大学文学部) 1991
- 注21 亀岡市教育委員会 1992年度調査。
- 注22 古墳時代の集落形成と空間利用については近年、東日本地域の事例について多くの論考がある。おおむね、時期が下るほど、階層分化が進行するという見解が多い。
- 注23 河上邦彦「石棚を有する古墳について」(『平群・三里古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第33集 榎原考古学研究所) 1977

## 6. 平安京跡右京七条三坊二町発掘調査概要

### 1. はじめに

平安京跡右京七条三坊二町の発掘調査は、京都府土木建築部住宅課が計画・施工する府営西七条住宅団地改築に伴う事前調査である。調査地は、京都市西京区名倉町に所在し、表題のように平安京跡右京七条三坊二町に該当する(第57図、図版第37-(1))。

今回の発掘調査は、右京七条三坊二町に該当することと、調査地東側にはしる道祖大路の西側側溝の有無を確認する目的で350m<sup>2</sup>のトレンチ設定を行ったが、既存の西七条団地の建物基礎によって遺構面が著しい攪乱を受けている可能性が高かったため、新設建物の工事計画範囲内で極力、南端にトレンチを設定し、調査を行った。

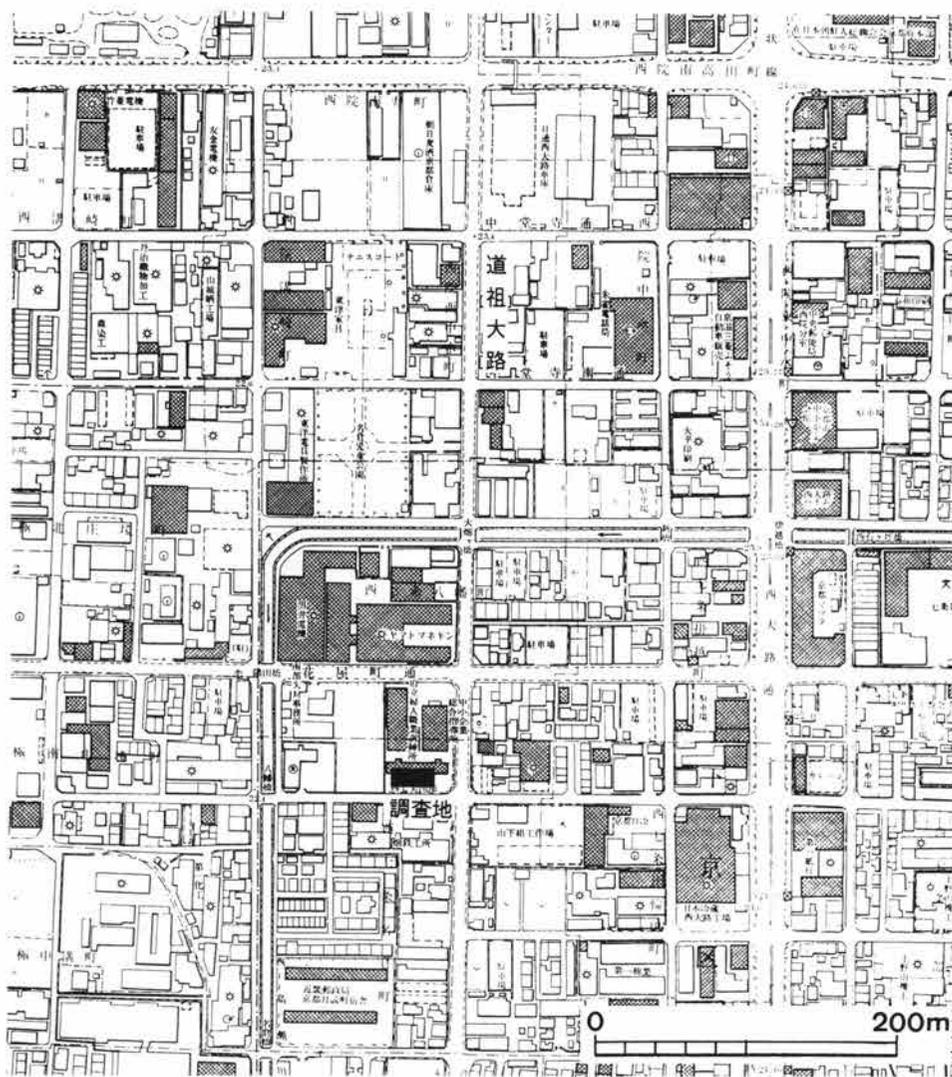


第57図 調査地位置図

発掘調査は、平成4年9月24日から同年11月13日の間行い、一定の整理ができた同年11月10日に関係者説明会を開催し、関係諸機関に調査成果を公表した。調査は、当調査研究センター調査第2係長 奥村清一郎、同調査員 小池 寛が担当し、本概要の執筆は小池が行った。調査を進めるに当たり、関係諸機関から多くの援助をえた。なお、本発掘調査に係わるすべての経費は、京都府土木建築部が負担した。

## 2. 調査概要

調査地は、道祖大路の西側に隣接した地点に該当し、調査地の南方には、七条坊門小路



第58図 調査地位置図

が通っている。また、東北方には西市が所在している。それらの条件から平安時代に比定できる遺構・遺物の検出が予想された(第58図、図版第37-(2)・第38-(1))。

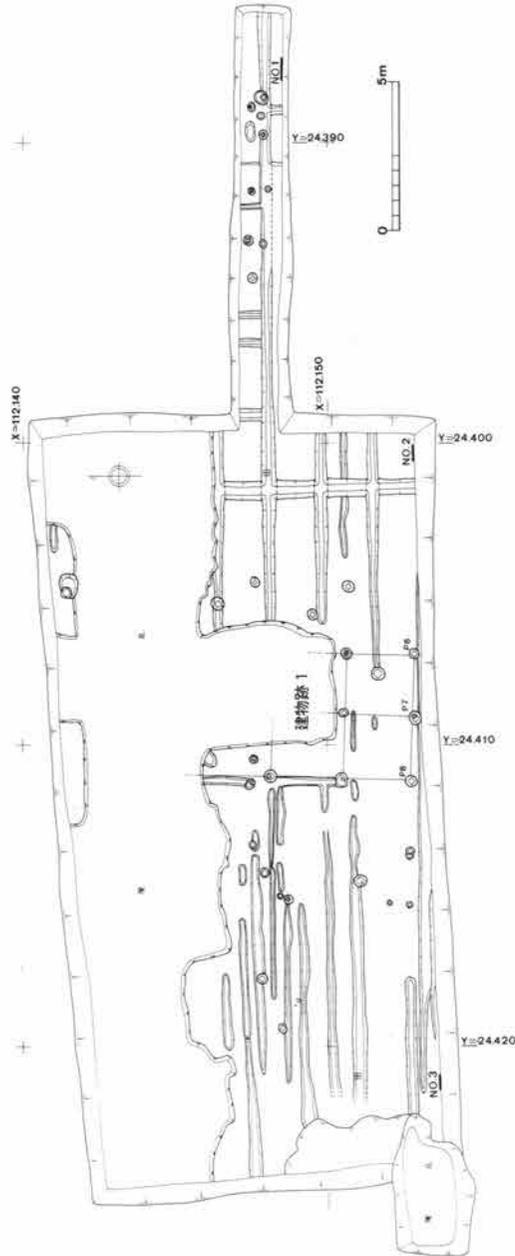
(1)土層堆積状況(第60図、図版第38-(2))

旧団地の解体などに伴う造成搬入土(L.N.1)は、トレンチ全面に約60cm程度堆積しており、旧耕作土(L.N.2)が約20cm、床土である濁黄褐色土(L.N.3)が約20～30cm堆積している。遺構は、それらの下層に堆積する濁暗茶褐色土層上面で検出しており、概して、東に厚く西に薄く堆積している。遺構検出面である(L.N.4)の下層には、褐色礫層が堆積しており、西方から東方にかけて傾斜している。これは、西方に流れる西高瀬川の氾濫によって形成された傾斜面である。

(2)検出遺構(第59図、図版第39-(1))

トレンチは、南北12m・東西25mの規模を有し、東方に長さ12.5m・幅2.2mの拡張を行った。トレンチの北半は、旧西七条団地の建物基礎により、攪乱されており、遺構の検出はできなかったが、島状に遺構面が残存する部分を確認し、後述する耕作に関連する溝を検出した。

一方、トレンチ南半検出の遺構は柱穴・土坑・溝であるが、遺構の密度は比較的希薄である。以下、検出遺構毎に概観する。



第59図 遺構実測図(1/250)  
(No.1～No.3は、土層柱状図作成地点を示す。)

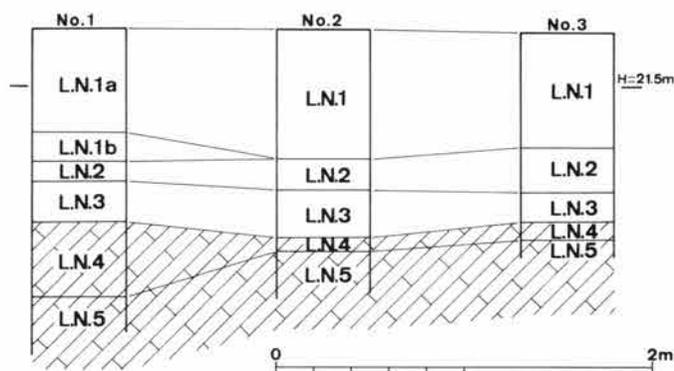
掘立柱建物跡(第61図、図版第39-(2)) トレンチ中央で検出した東西2間・南北2間以上の掘立柱建物跡である。建物跡の主軸線は真北と一致しており、建物跡の北半部は攪乱により消失している。東西の柱間は、西から2.2m・2mを測り、南北はすべて2.3mを測る。

建物跡を構成する柱穴は、基本的には直径30~40cmの円形を呈しているが、一部、隅丸方形に近似する掘形を有する柱穴も含まれている。柱穴の下部構造からP6・P7(図版第40)のように柱穴底面に扁平な礫を置き、その上部に柱を立て、掘形を埋める工程を確認しうる。なお、柱を抜き取った可能性も指摘できるところではあるが、P8のように最下部に礫を充填しない柱穴も同一の掘立柱建物跡内で確認している。

一方、掘立柱建物跡の周囲と東側の拡張区では、建物跡としては認識できない柱穴群を確認している。掘立柱建物跡周辺の柱穴群は、建物跡の主軸線と軸線を一にする柱列を確認しており、掘立柱建物跡と同時期に成立した可能性が高い。また、東側の柱穴群は、狭少なトレンチであるため建物跡として復原できないが、何らかの施設が存在したものと考えられる。柱穴内からの出土遺物は、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などがあるが、いずれも細片であり、正確な法量などは不明である。なお、瓦器・瓦質土器片が出土する柱穴も検出している。

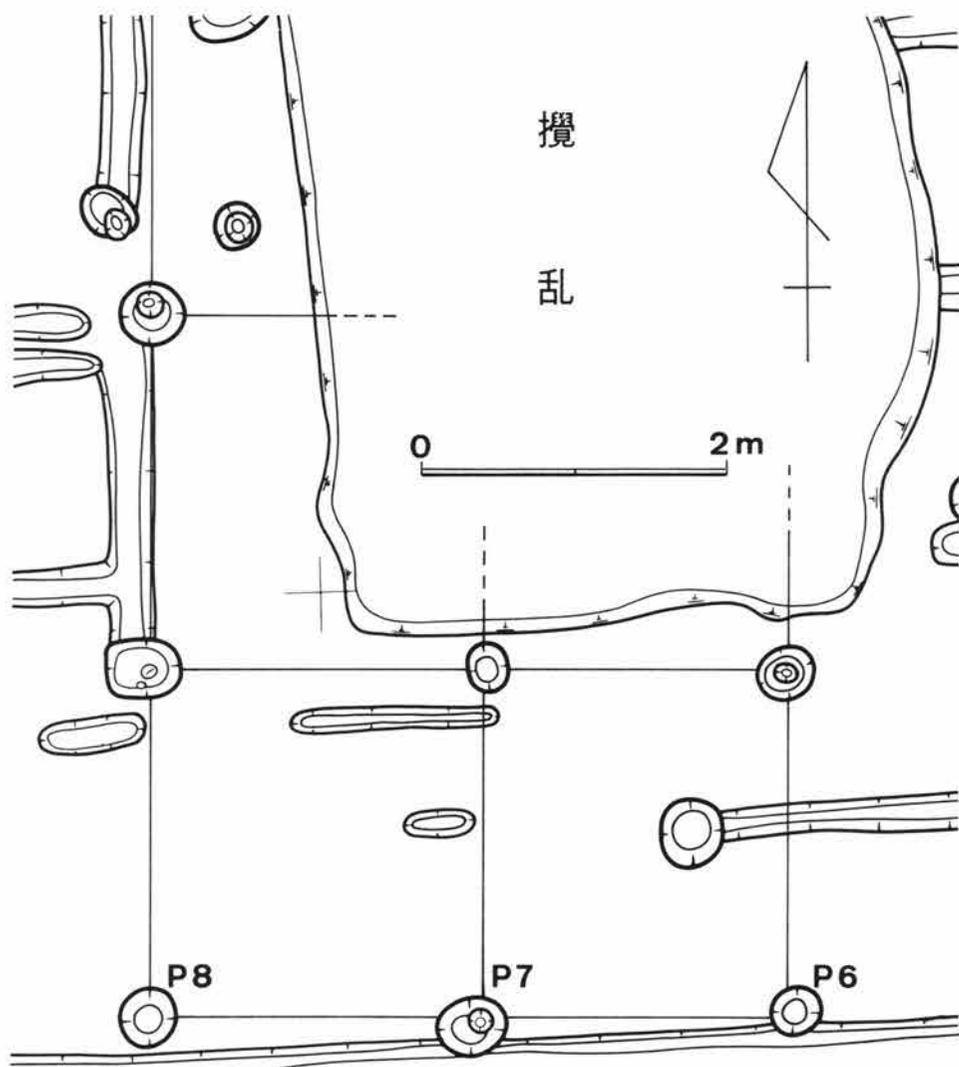
耕作溝 耕作に伴う溝は、遺構面の全域に広がっている。西方の溝群は、幅が20cm前後で、残存する深さは10cm未満である。基本的には、東西方向に多く穿たれているが、各々の切り合いは確認できない。トレンチ中央では、南北にはしる溝が一条穿たれており、この溝を境に東方には広がらない点に注目すれば、耕作地の区画を示唆する溝である可能性もある。溝内から土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・瓦質土器などの破片が出土しており、溝の帰属時期を中世に比定し得る。

一方、東側に穿たれた溝群は、幅が30cmであり、深さは約20cmである。これらの溝は、



第60図 土層断面柱状図

L.N. 1a: 造成搬入土      L.N. 1b: 造成土      L.N. 2: 旧耕作土      L.N. 3: 濁黄褐色土  
L.N. 4: 濁暗茶褐色土      L.N. 5: 褐色礫

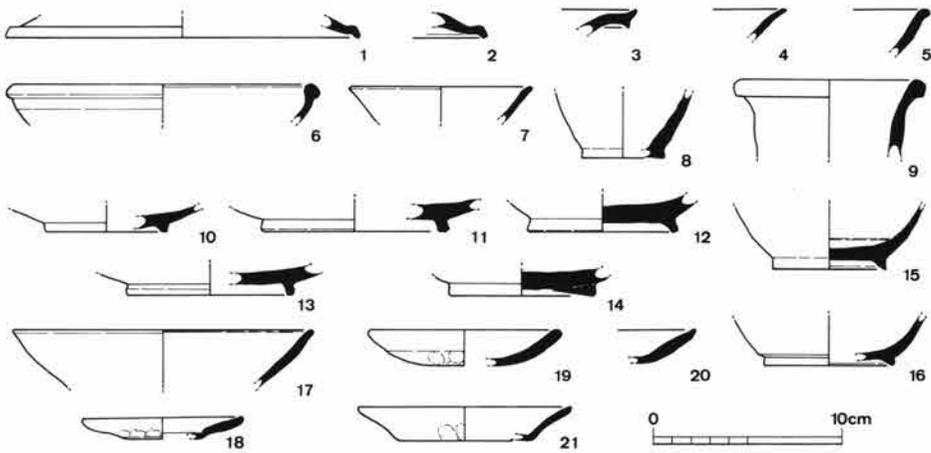


第61図 掘立柱建物跡平面図  
(+の座標 X=-112,150 Y=-24,410)

西側で検出した溝よりも規模の点で大きく、帰属時期の違いによるものと考えられる。土層堆積状況を概観すると、これらの溝群の上層に堆積する旧耕作土(L.N.2)が、溝の影響を受けていることから、溝の帰属時期を近世以降に比定できる。

### (3) 出土遺物

出土遺物の多くは細片であるが、遺構の時期設定を行う際の基礎資料であるため、法量が不明な細片についても図示を行った(第62図)。



第62図 出土土器実測図(1/4)

須恵器：1・3・6・8・10・12・14      緑釉陶器：4・11・13・15・16  
 灰釉陶器：5・7・9      土師器：18～21      瓦器：17

須恵器は、口縁端部に面をもつ1・2の蓋と、高台・蛇の目高台をもつ杯がある。その中でも6は、亀岡市篠窯跡群で焼成された製品で、黒岩1号窯前後に比定できる。緑釉陶器は、東海・近江・洛西の製品が出土している。中世に比定できる資料としては、瓦器17がある。

### 3. まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡と耕作溝を検出した。掘立柱建物跡を構成する柱穴からは、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土しているが、柱穴が直径30cm前後であることと総柱の建物跡であることから、中世に帰属する可能性も指摘できる。また、トレンチ東端には、道祖大路の内溝の検出が予想されたが、トレンチ内では確認できなかった。

今回の調査では、明確な遺構を検出できなかったが、9～10世紀の遺物は出土している。これらの遺物群は、同時期に何らかの土地利用があったことを示唆する資料である。

(小池 寛)

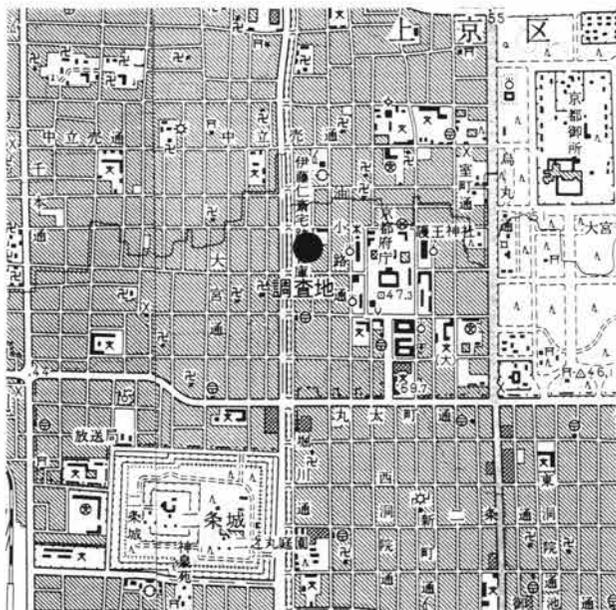
調査参加者（順不同・敬称略）

前田暁宏・河野幸代・森川教子・中瀬かほり・阿部達雄

## 7. 平安京跡左京一条二坊十町発掘調査概要

### 1. はじめに

今回の発掘調査は、公立学校共済組合京都宿泊所(京都堀川会館)の増改築に伴うものである。当調査地は平安京の条坊によると左京一条二坊十町にあたる。現状では京都堀川会館の駐車場となっていた。調査地周辺は平安京跡の調査が比較的少ない場所ではあるが、(財)京都市埋蔵文化財研究所の試掘・立会調査の結果によると、近世～中世にかけての遺物包含層及び遺構が、現地表面下約40～150cmの深さで確認されている<sup>(注1)</sup>。



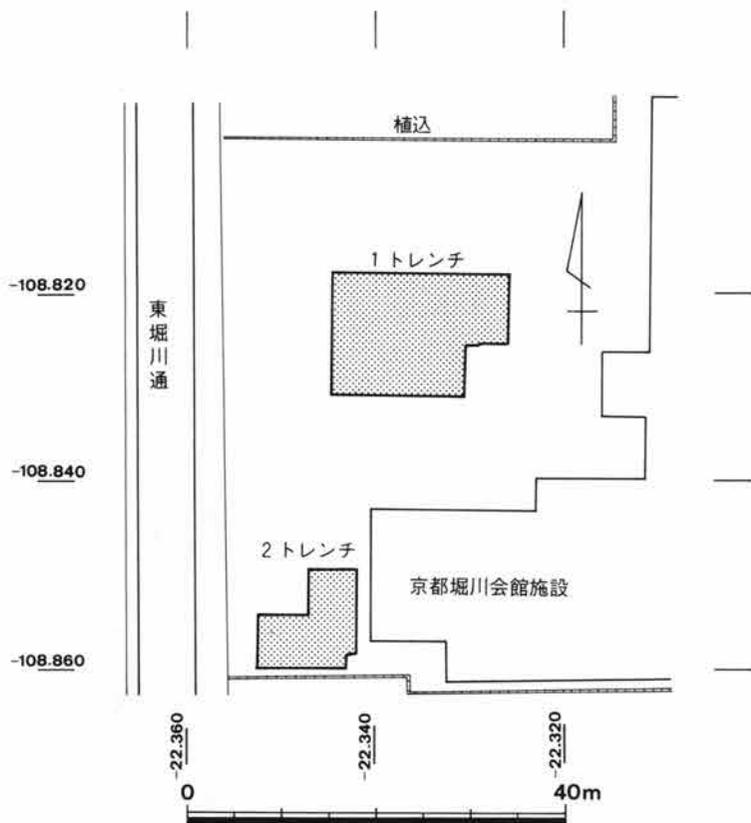
第63図 調査地位置図(1/25,000)

調査は平成4年5月6日に開始し、同6月29日に終了した。調査面積は約350m<sup>2</sup>である。

また、調査に際しては調査補助員、整理員の多大なる協力を<sup>(注2)</sup>。記して感謝の意を表します。なお、今回の調査に係る費用は、全額公立学校共済組合京都支部の負担による。

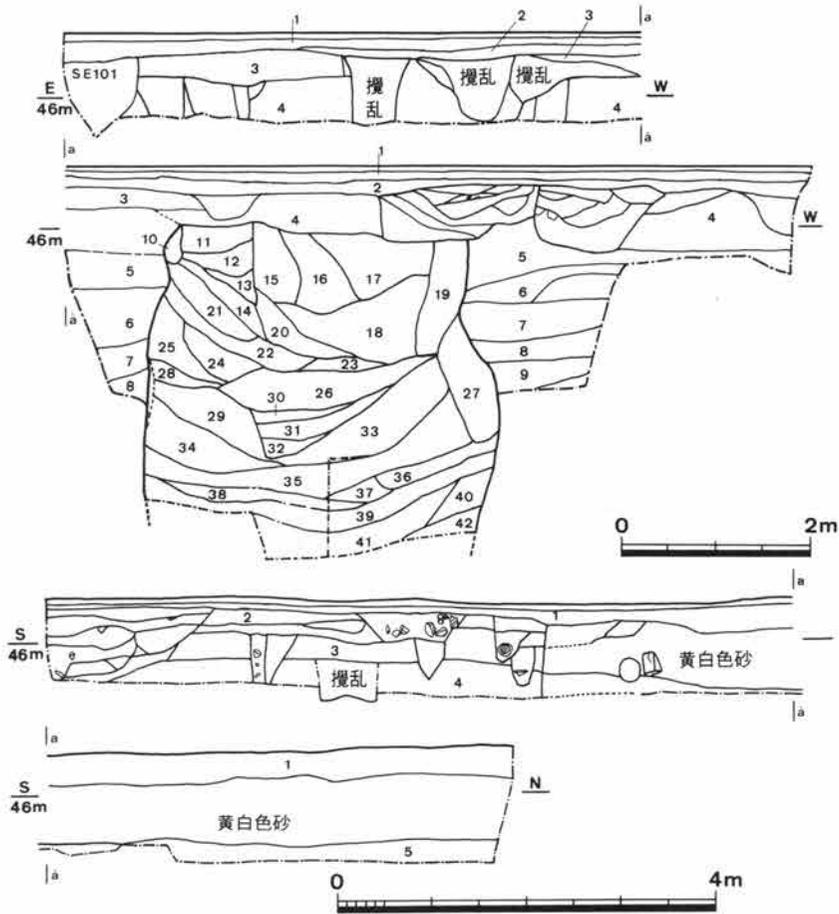
### 2. 調査概要

調査トレンチは2か所に配分した。トレンチは会館の正面玄関西側を1トレンチ、その南側を2トレンチとした(第64図)。はじめに重機により現代の層を除去したのち、人力による掘削に入った。しかし、調査地内に現在使用中の水道管などの地下埋設物が走っていたため、調査にかなりの制約を受けた。次に各トレンチの概要を述べる。1トレンチは遺構の残存が良好な部分では、現地表面から約60cmのところまで遺構を検出した。検出した遺構には掘立柱建物跡2棟・石組井戸5基、土坑・ピットなどがある。トレンチ南半の遺



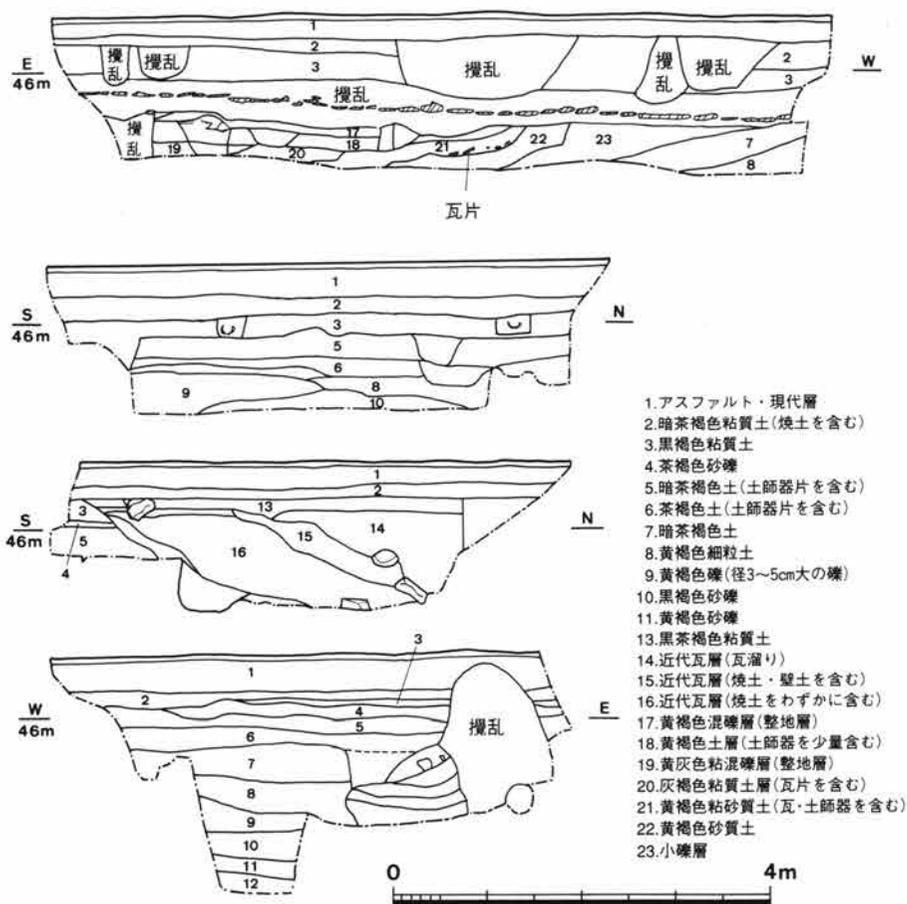
第64図 調査トレンチ配置図

構検出面は一部で中世の遺構埋土を切り込んでいる遺構もあるが、大半の遺構は黄褐色砂質土の地山を掘り込んでいた。しかし、北半は水道管などの地下埋設物を埋設した際に遺構面が削平され、黄白色砂で埋め戻されていた。遺構検出面は南半よりさらに約50cm下がった面、すなわち、現地表から約1.1m下であった(第65図)。そのため、石組井戸1基、土坑のほかは顕著な遺構は検出できなかった。遺構の所属時期は大半が18世紀以降であったが、土坑S K173は出土遺物からみて、13世紀後半にさかのぼる遺構である。一方、2トレンチでは現地表面から約70cmのところでは1トレンチ同様の黄褐色砂質土の安定面を確認し、この部分に遺構も集中していた。しかし北壁寄りでは、1トレンチで確認した黄白色砂が見られた。また、南壁寄りでは瓦や土師器皿を含む17世紀の整地層が存在していた(第66図)。検出した遺構には掘立柱建物跡・土坑・ピットがある。遺構の所属時期は18世紀後半以降のものが大半を占めるが、一部の遺構は13～14世紀にさかのぼる。



第65図 1トレンチ土層断面図

- |                           |                             |                        |
|---------------------------|-----------------------------|------------------------|
| 1. アスファルト・現代層             | 19. 茶褐色砂礫                   | 37. 黄灰褐色砂              |
| 2. 茶褐色粘質土                 | 20. 暗茶褐色粘質土                 | 38. 灰褐色粘砂礫             |
| 3. 暗茶褐色土<br>(炭化物・土師器片を含む) | 21. 暗茶褐色粘質土(炭化物を含む)         | 39. 茶灰褐色砂<br>(土師器を含む)  |
| 4. 暗褐色粘質土<br>(焼土・炭化物を含む)  | 22. 暗茶褐色粘質土(炭化物を含む)         | 40. 暗茶褐色粘砂<br>(炭化物を含む) |
| 5. 茶褐色砂礫土                 | 23. 茶褐色砂礫                   | 41. 黄褐色粘砂礫<br>(土師器を含む) |
| 6. 暗茶褐色砂礫                 | 24. 黄褐色粘砂礫(土師器を含む)          | 42. 茶褐色粘砂              |
| 7. 黄褐色砂礫                  | 25. 暗茶褐色粘質土                 |                        |
| 8. 茶褐色砂礫(細粒)              | 26. 礫層(拳大の礫)                |                        |
| 9. 茶褐色砂礫(粗粒)              | 27. 暗茶褐色粘砂礫(炭化物を含む)         |                        |
| 10. 暗茶褐色土                 | 28. 暗茶褐色粘砂礫                 |                        |
| 11. 黄褐色砂礫<br>(土師器・炭化物を含む) | 29. 茶褐色砂礫                   |                        |
| 12. 黄褐色砂礫                 | 30. 暗茶褐色粘質土<br>(炭化物・土師器を含む) |                        |
| 13. 黄褐色砂礫                 | 31. 茶褐色粘砂礫土(土師器を含む)         |                        |
| 14. 茶褐色砂礫(拳大の礫を含む)        | 32. 黄茶褐色粘混礫土(土師器を含む)        |                        |
| 15. 暗茶褐色砂礫                | 33. 暗茶灰色粘混礫土                |                        |
| 16. 黄褐色砂礫(径5cm大の礫を含む)     | 34. 茶褐色砂礫                   |                        |
|                           | 35. 暗茶褐色砂礫                  |                        |
|                           | 36. 茶褐色粘質土(土師器を含む)          |                        |



第66図 2トレンチ土層断面図

### 3. 検出遺構

#### (1) 1トレンチ

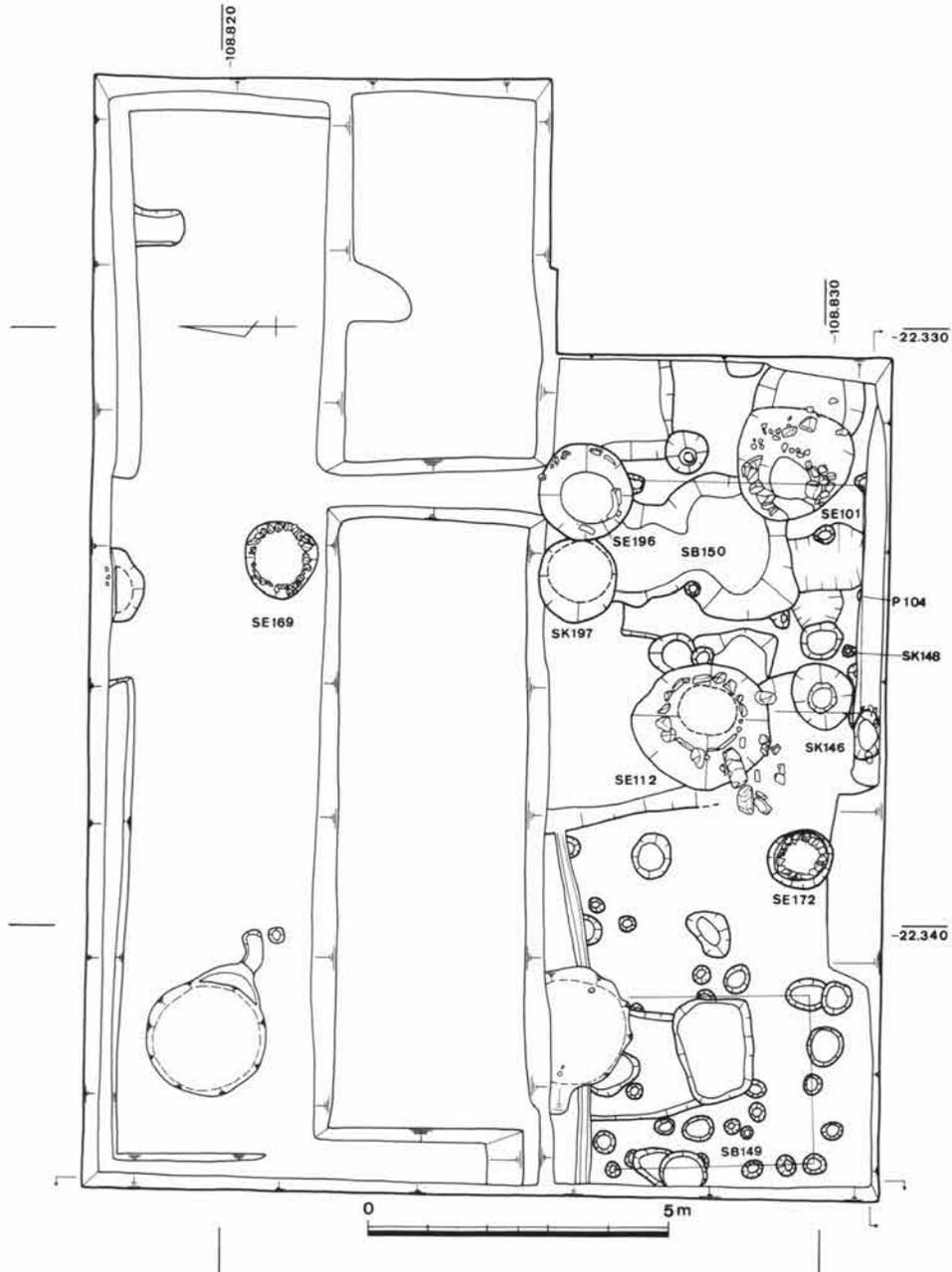
##### 近世の遺構(第67図)

掘立柱建物跡 S B 149(第68図) トレンチ南半西隅で検出した。東西2間、南北2間以上である。柱穴の掘形は径約20cmと小規模である。根石は抜き取られていた。ピットからの出土遺物は土師器皿の細片であり、時期は不明である。

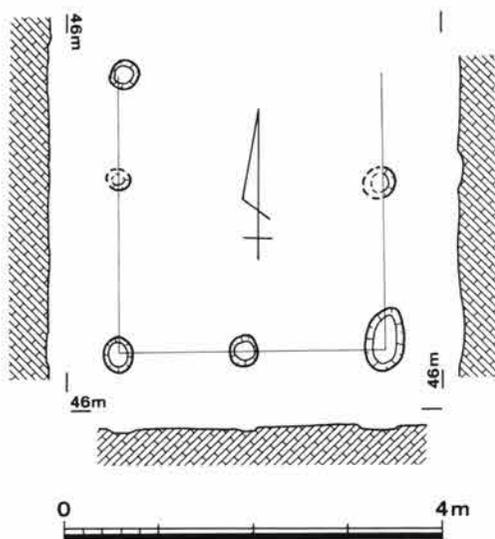
掘立柱建物跡 S B 150(第69図) トレンチ南半東側で検出した。東西2間、南北2間以上である。柱穴の底部に接して扁平な拳大の礫が置かれていた。この建物跡も掘立柱建物跡 S B 149同様出土遺物は少ないが、土師器皿98・99が柱穴から出土していること、また、柱穴と切り合い関係のある、井戸跡 S E 196が18世紀後半に比定できることから、18世紀

におさまるものと思われる。

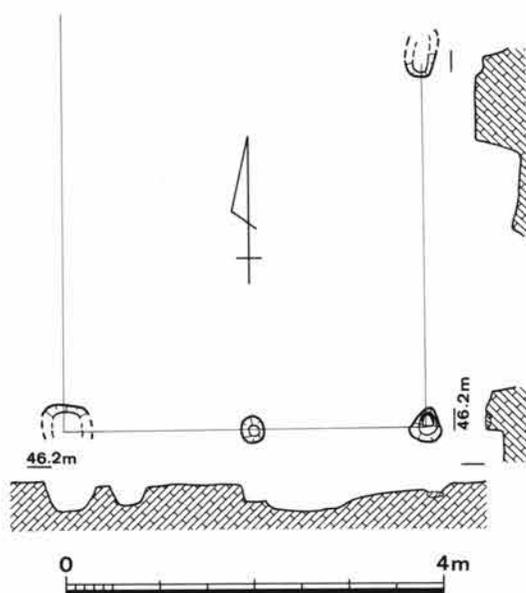
井戸跡 S E 101(第70図) トレンチ南東隅で検出した、石組井戸である。石組内法の長径約1.05m・短径約0.8m、深さは約1.4mを測る。平面形は楕円形を呈していた。石組に用



第67図 1 トレンチ遺構配置図



第68図 掘立柱建物跡 S B 149実測図



第69図 掘立柱建物跡 S B 150実測図

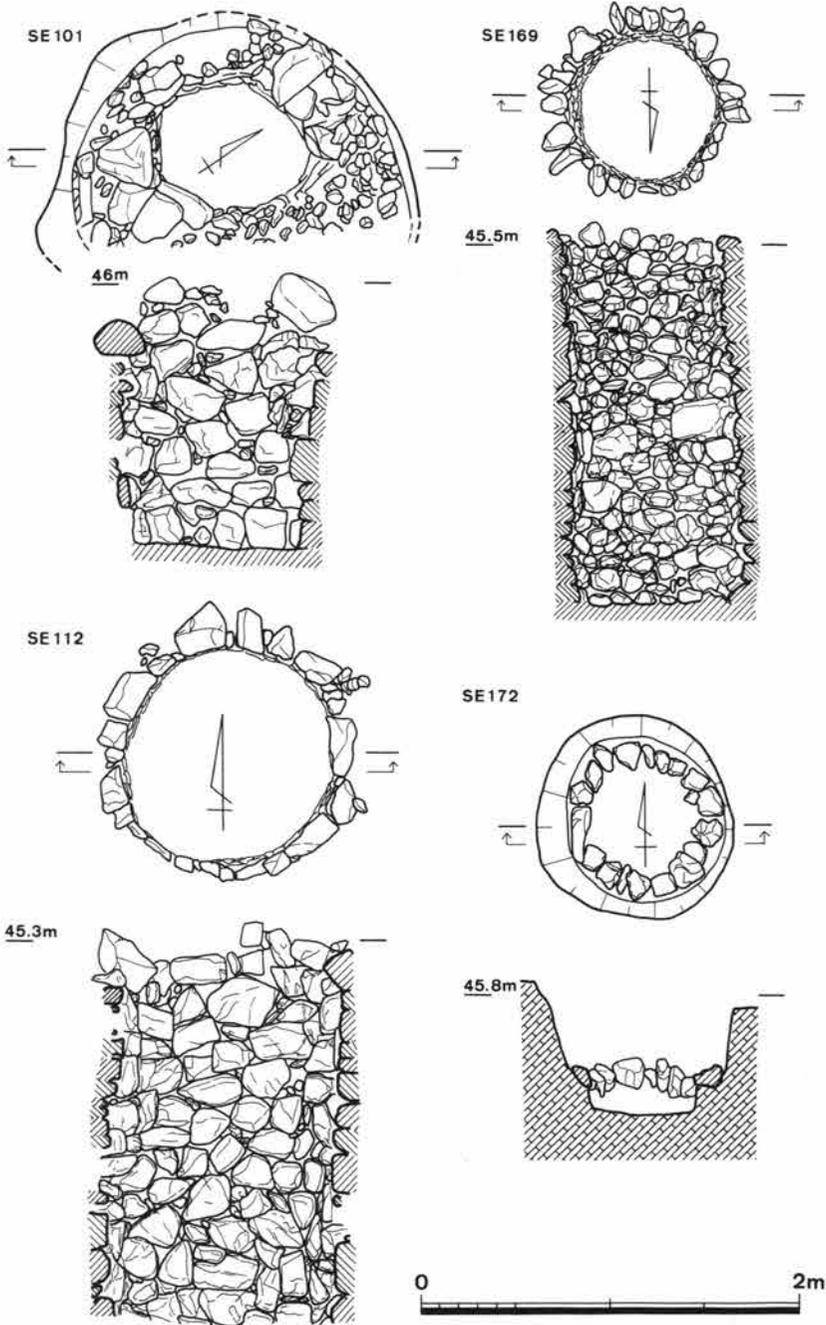
いられていた礫は人頭大の川原石であるが、石組の積み方は乱雑で石組に隙間が認められた。また、掘形は径約1.88mを測り、裏込めの状況は、拳大の礫と灰褐色粘質土で充填されていた。出土遺物には土師器皿のほか伊万里焼の椀などがある。時期は18世紀後半になると思われる。

井戸跡 S E 112 トレンチ南半ほぼ中央で検出した。石組の内法径約1.48mを測る。石組石材は花崗岩の割石が用いられており、整然と積まれていた。裏込めは暗灰褐色粘質土である。約2.1m掘削したが、まだ底に到達しなかったため、掘削は途中で中止した。出土遺物には織部焼の水注、丹波焼の徳利などがある。井戸の時期は石組の手法や遺物から19世紀に下ると思われる。

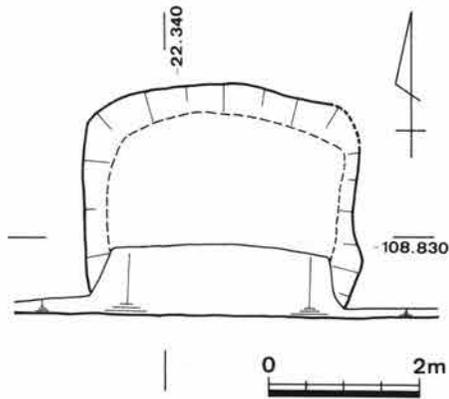
井戸跡 S E 169 トレンチ北半の中央部で検出した。石組内法の径約0.76m・深さ約2.0mを測る。石組に使用された礫は大半が拳大のチャートを主体とした川原石を用いている点に特徴がある。石組はほとんど掘形に接していたが、裏込めには粘質土が用いられていた。出土遺物は土師器皿、ミニチュアの小さな壺などがあ

る。時期は18世紀後半になると思われる。

井戸跡 S E 172 トレンチ南半の中央やや西寄りで検出した。掘形の径約1.04m・深さ約0.68mを測る。上面の礫は遺構を廃棄した際に投棄されたと思われ、折り重なっていた。底部には拳大の礫がころうじて掘形周囲をめぐるように敷き詰められていた。裏込め等は確認できなかったこ



第70図 井戸跡実測図



第71図 土坑S K 173実測図

土坑S K 173 井戸跡S E 112の西側で検出した。掘形の規模は東西約2.2m・南北2.6m以上・深さ2.5m以上を測る。平面形は隅丸方形を呈すると思われる。黄褐色土の下層は旧河川の堆積物と思われるしまりのない礫層であり、礫層面でオーバーハングして袋状を呈していた。埋土と掘形の間には空隙が見られた。周囲を拡張して掘削したが、完掘は不可能であった。規模の大きな土坑であったが石組等の施設は存在しなかった。出土遺物には土師器皿、青磁碗、瓦質土器のほか、常滑焼甕の破片などがある。混入した遺物に8・9世紀の土器が少量あるが、遺構の所属時期は13世紀後半から14世紀前半になるものと思われる。

#### 中世の遺構(第71図)

土坑S K 173 井戸跡S E 112の西側で検出した。掘形の規模は東西約2.2m・南北2.6m以上・深さ2.5m以上を測る。平面形は隅丸方形を呈すると思われる。黄褐色土の下層は旧河川の堆積物と思われるしまりのない礫層であり、礫層面でオーバーハングして袋状を呈していた。埋土と掘形の間には空隙が見られた。周囲を拡張して掘削したが、完掘は不可能であった。規模の大きな土坑であったが石組等の施設は存在しなかった。出土遺物には土師器皿、青磁碗、瓦質土器のほか、常滑焼甕の破片などがある。混入した遺物に8・9世紀の土器が少量あるが、遺構の所属時期は13世紀後半から14世紀前半になるものと思われる。

#### (2) 2 トレンチ

##### 近世の遺構(第72図)

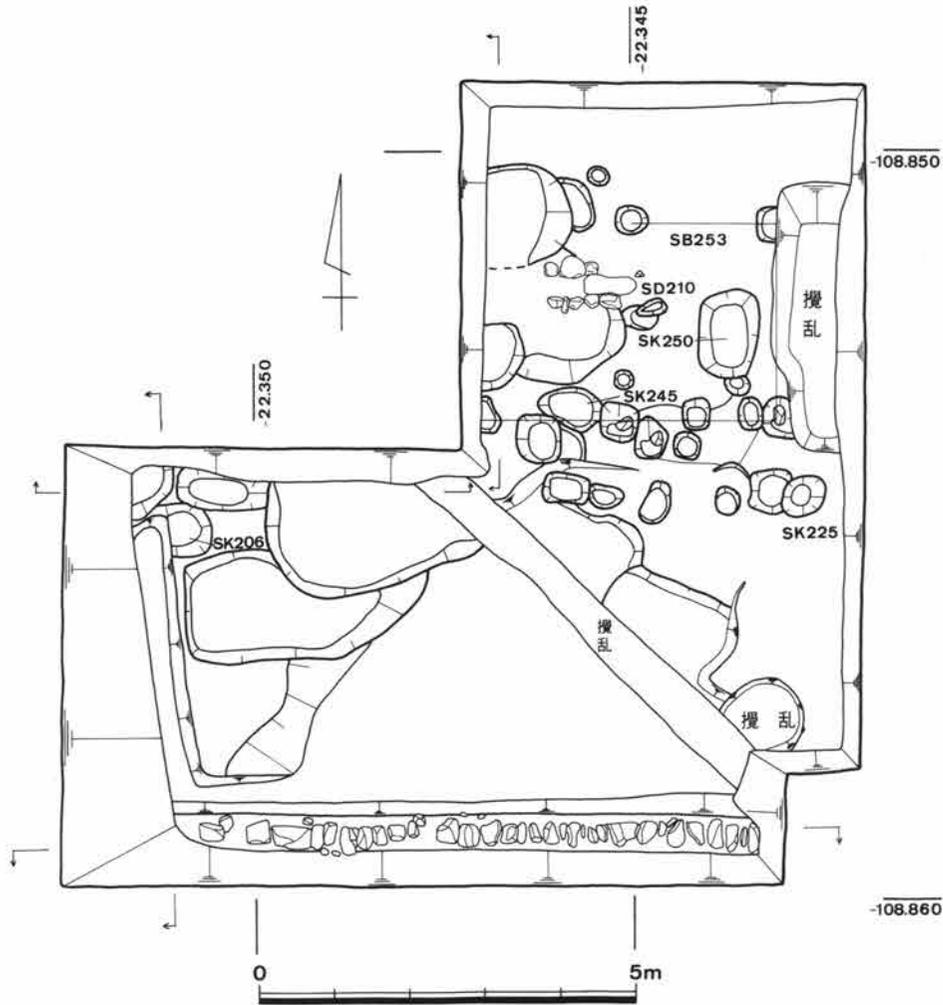
漆喰溝S D 210(第73図) 東西方向にのびる漆喰溝である。残存していたのは溝のごく一部分にすぎない。溝の構造は溝の肩部を人頭大の礫で押さえ、底面を漆喰で固めていた。時期は19世紀であると思われる。

掘立柱建物跡S B 253(第74図) トレンチ北側で検出した。東西2間、南北1間を検出した。根石は南側2本の柱穴に残存していたが、いずれも上面を水平に保って置かれていた。柱穴の1つに根石が上下に重なっている状況が見られたが、柱穴の底面では根石が確

とから、掘形に沿って礫を積んだものと思われる。出土遺物はなかった。

井戸跡S E 196 掘形の径約1.5m・深さ約1.4mを測る。わずかに底面に礫が残存していた。出土遺物には土師器皿、信楽焼すり鉢、伏見人形などがある。

土坑S K 146 井戸跡S E 112の南、南壁に接した部分で検出した。長軸約0.52m・短軸0.2m以上・深さ約0.18mを測る。土坑の掘形周囲には拳大の礫が並べられていた。埋土中には炭化物とともに多量の土師器皿が大小重なりあって出土した(図版第42)。大半のものは底部を上にして伏せられていた。土師器皿は口縁部内外面に煤が付着しており、灯明皿として使用していたものが廃棄されたと思われる。この土坑の時期は18世紀であろう。

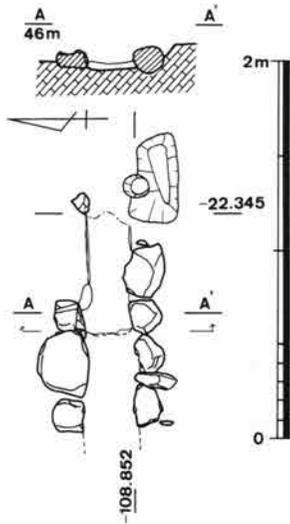


第72図 2トレンチ検出遺構平面図

認できなかったことから、これらの根石を利用して上屋が建っていたことになる。しかし、この状態では柱の沈下が考えられ、居住を目的とした建物ではなく、小屋程度の建物が想定される。

#### 中世の遺構

土坑 S K 245 長径約0.8m・短径約0.65m・深さ約0.25mを測る、平面楕円形を呈する土坑である。出土遺物は土師器皿、瓦質土器、常滑焼甕破片、滑石製石鍋、砥石がある。この土坑の時期は出土遺物から13世紀後半から14世紀前半であると思われる。



第73図 漆喰溝 S D210実測図

#### 4. 出土遺物(第75~79図)

出土遺物は土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、瓦質土器、国産陶磁器、土製品、石製品、釘、銭貨、瓦などがある。ここでは主な遺物についての概要を述べる。

なお、個々の遺物については末尾の付表2を参照されたい。

##### 近世の土器

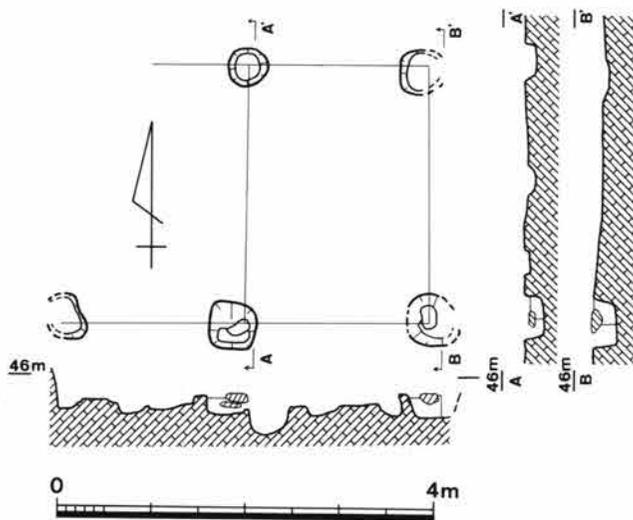
土師器皿(1・14・76~95・98・99) 口径約5~6cm、7~8cm、10~11cmの3タイプがある。小型のものは底部から内湾しながら立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。全体に粗雑な作りで底部外面には指頭圧痕が残り、歪みがある。色調は赤褐色を呈するものが多い。

中型のものは底部から外反しながら立ち上がり、端部は

丸くおさめるものと、尖り気味におさめるものがある。大型品は底部から外反しながら立ち上がる器形は中型品と同様であるが、底部内面を強くナデるために立ち上がり部分で器壁が薄くなる。これらの土師器皿は18世紀後半に比定できると思われる。

伊万里焼(15・19~

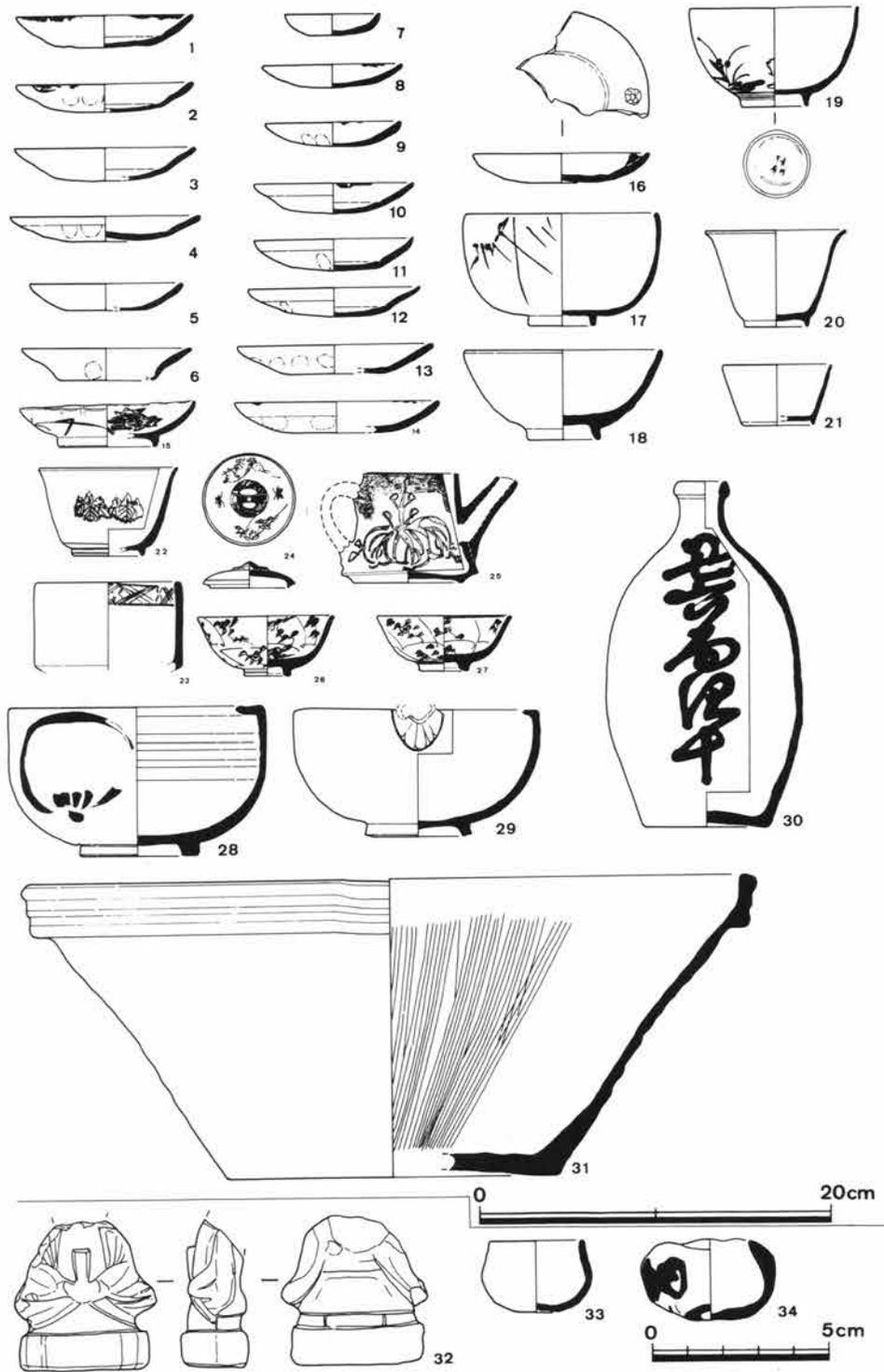
24・26・27・104) 19は



第74図 掘立柱建物跡 S B253実測図

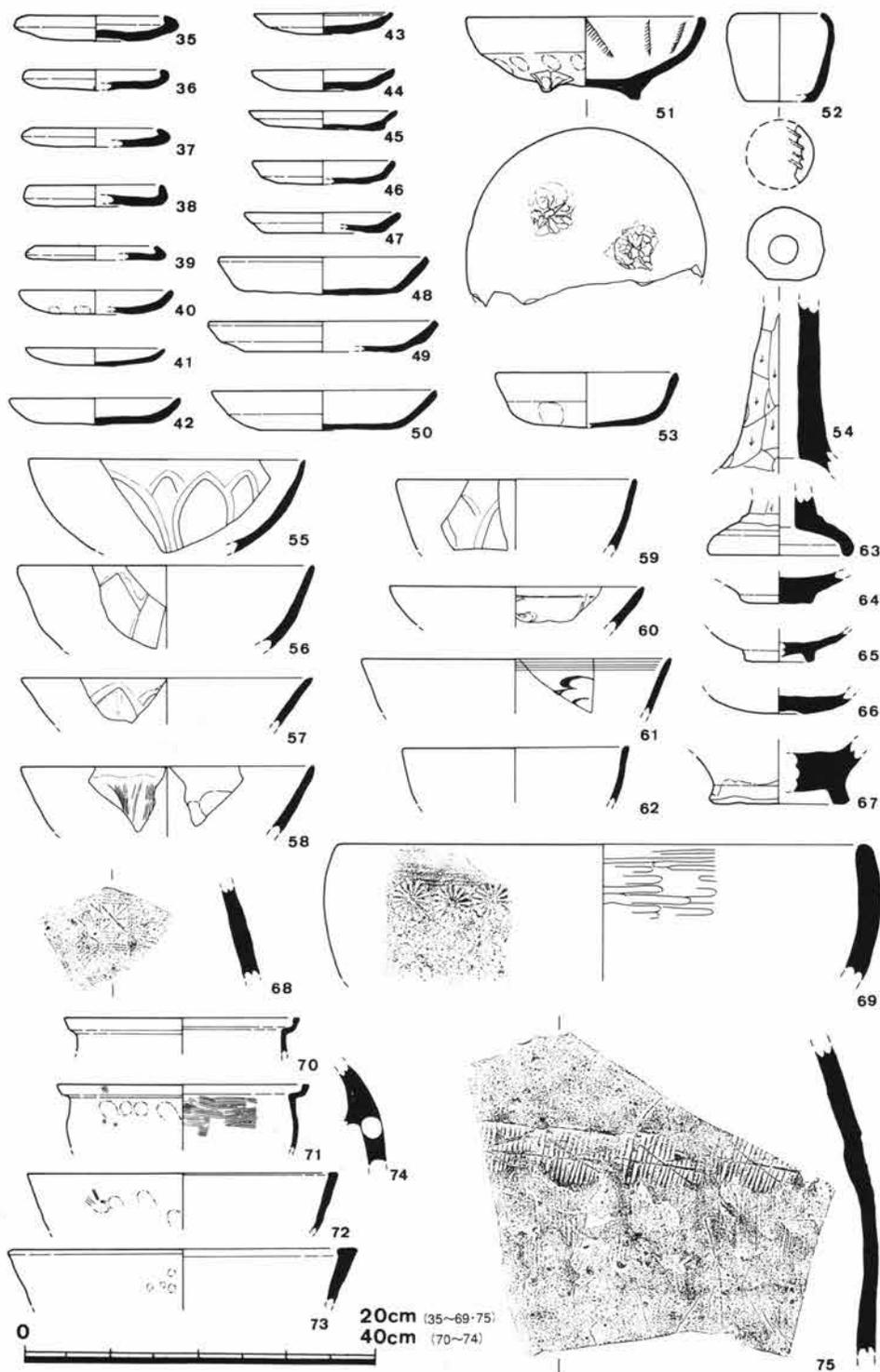
碗である。外面に草木が描かれている。松の木はコンニャク印判で押されている。高台裏には「大明年製」と銘が記されている。20・21は白磁である。22は碗である。外面にコンニャク印判で桐文が押されている。23は碗である。外面は青磁、内面は口縁端部内面に染付が施される。104は皿である。見込み部分にはやはりコンニャク印判の花文が押されている。高台裏には渦状の「福」の字が記されている。これらは18世紀のものと思われる。

唐津焼(18・105) 18は碗である。高台は削り出している。内外面はハケ塗りによる縞



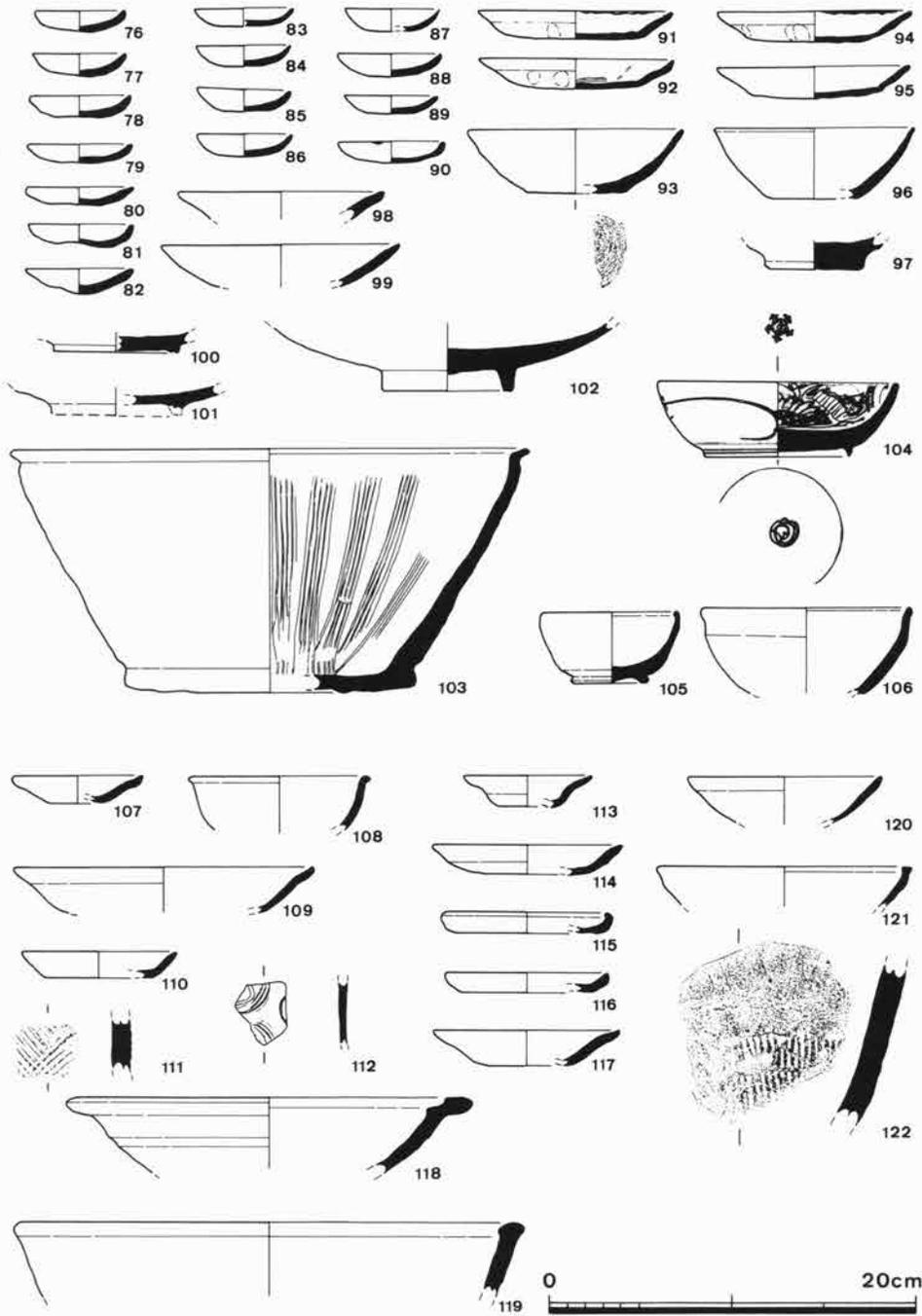
第75図 出土遺物実測図(1)

1~6・16~20. S E 101    7~12・21~24. S E 169    13・14・29・31・32~34. S E 196    25~28・30. S E 112



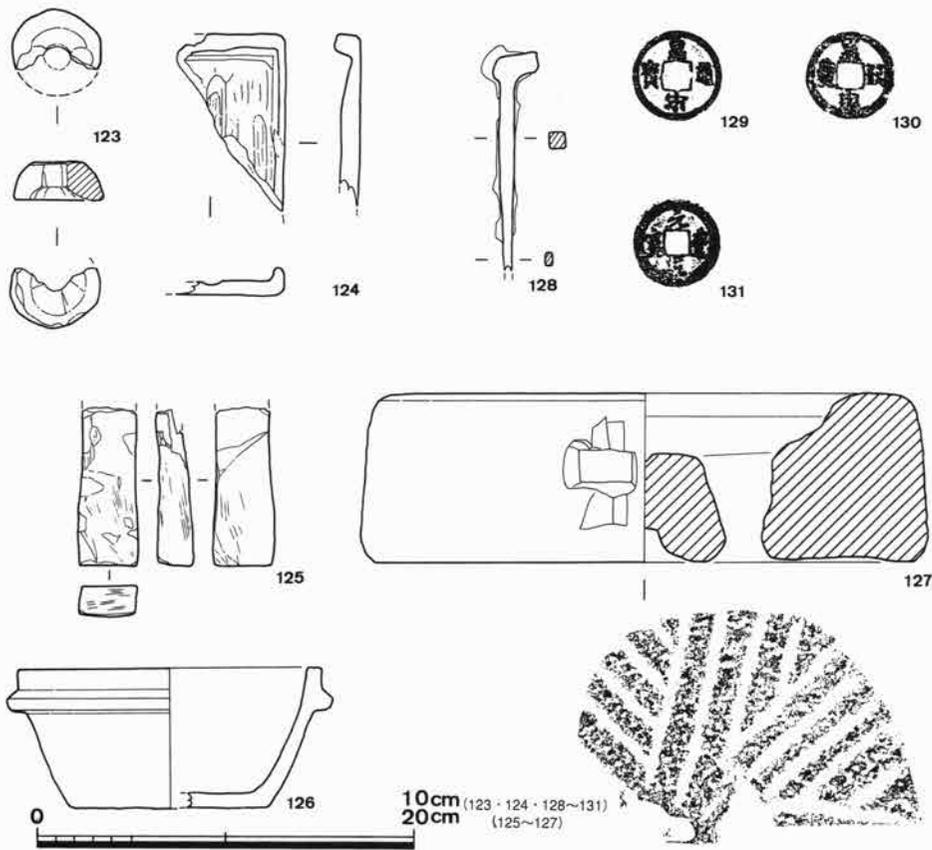
第76図 出土遺物実測図(2)

S K 173出土土器



第77図 出土遺物実測図(3)

76~79・83~92・95. S K146      80~82・93・96・97・102・103. S K197      98・99. P104  
 100. S K148      101・104. 1 トレンチ包含層      105・106. 1 トレンチ排土      107・108. S K225  
 112. S K206      111・118. S K250      113~117・111~122. S K245



第78図 出土遺物実測図(4)

123. S K 173 124. S E 101 125・126. S K 245 127・129~131. 1 トレンチ排土  
128. S E 169

模様がある。105は小椀である。体部下半は露胎である。高台は削り出し高台である。17世紀のものと思われる。

織部焼(25) 水注である。蓋と把手が欠失している。体部には桐の文様が描かれている。

瀬戸美濃焼(106・118) 106は天目茶椀である。118は灰釉の鉢である。

丹波焼(30) 30は徳利である。体部3面に文字が書かれている。図示したものは「蕎麦道中」の文字が白土で筒描きされている。

信楽焼(31・103) 31はすり鉢である。かなり大型のものであるが、約1/2が出土した。内面は密にハケ目が施される。103は丹波焼を模したすり鉢である。底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部を外側に屈曲させている。1単位5本のハケ目が施される。よく使用されており、底部及び底部に近い部分はハケ目が擦り減り、凹凸がなくなっている部分も見られる。焼成は堅緻であり、色調は内外面とも暗紫色、断面は暗灰色を呈してい

る。17世紀に比定できる。<sup>(注3)</sup>

#### 中世の土器(35～75)

##### 土坑 S K 173出土土器(第76図)

土師器(35～53) 35～39は白色系の皿である。内外面をヨコナデする。皿には小型品(40～47)と大型品(48～50)がある。いずれも色調は褐色を呈する。51は三足椀である。内面のみ黒色化している。内面にはハケによる調整痕が放射状に残る。外面の脚は貼り付けている。脚は底部に対し、位置をずらして貼り付けられている。52は器種不明の土器である。小さな底部から内湾しながら立ち上がり、肩部でさらに内湾させ端部を丸くおさめる。底部に3mm間隔で切れ目が入る。内外面はヨコナデを施す。53は椀である。底部から外反しながら立ち上がり、端部外面をわずかに肥厚させ、尖り気味におさめる。色調は褐色を呈する。

青磁椀(55～61・65・67) 55～59は外面に輪花が浮き彫りにされるものである。60・61は内面に文様の施されるものである。底部は高台を持つもの(65・67)と持たないもの(66)に分かれる。

瓦質土器(69～74) 69は瓦質火舎である。内外面に密に横方向のミガキが入る。外面口縁部下に花卉のスタンプ文が入る。70・71は口縁が鈎形に屈曲する瓦質の鍋である。内面に横方向のハケ目を施している。72・73は鍋である。口縁端部内面を肥厚させている。外面に指頭圧痕が残る。

#### 2 トレンチ出土土器

青磁(108・110) 108は椀である。口縁端部を外反させている。110は皿である。扁平な底部から斜め上方に立ち上がり、端部を尖り気味におさめる。口縁端部内面幅約2mmが露胎となっている。

青白磁(112) 112は青白磁の壺体部破片である。外面に陰刻文がある。断面及び内面は灰色を呈し、焼成は堅緻である。

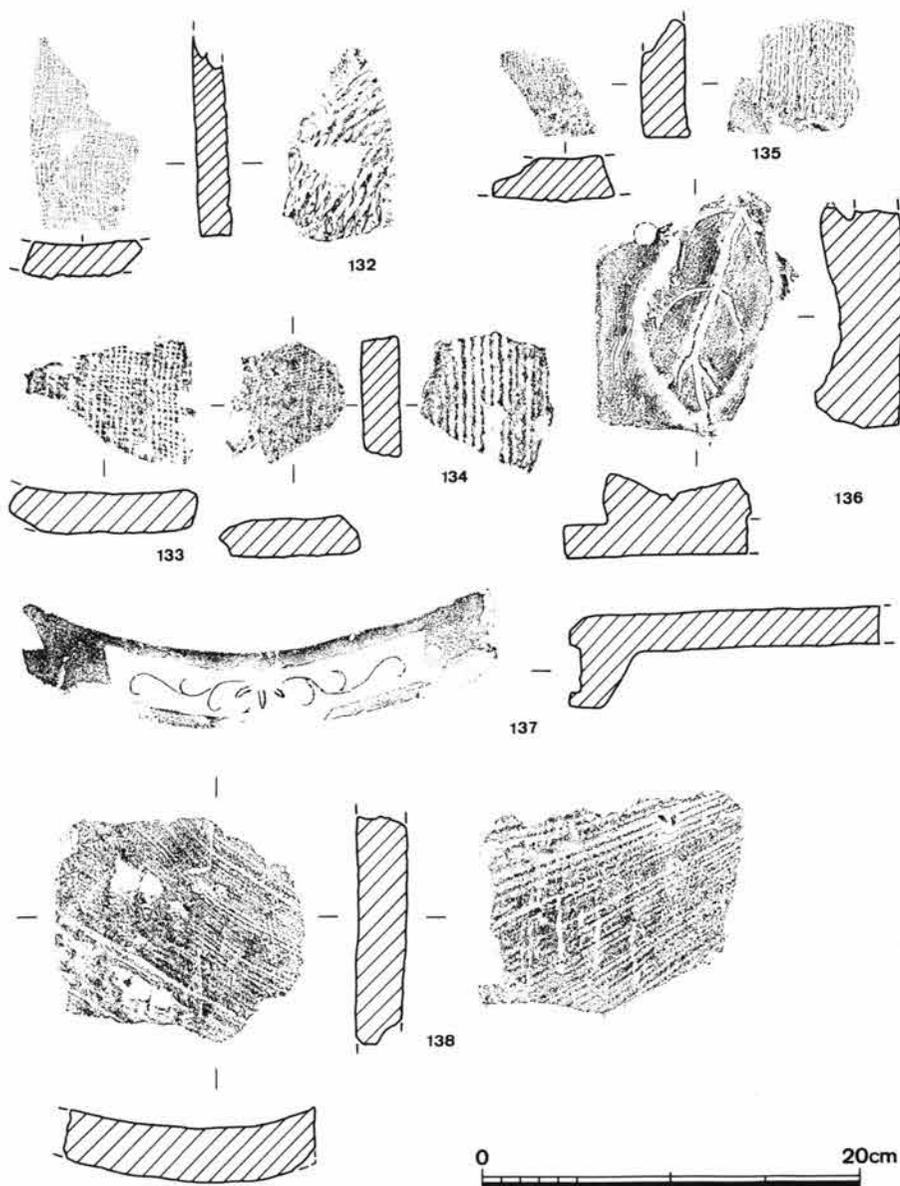
瓦質土器(121) 121は片口椀の口縁部破片である。外面は燻され黒色を呈し、内面は淡褐色を呈している。

#### 土製品(第75図)

伏見人形(32～34) 32は神像である。首から上部が欠失している。前後の合わせ型作りである。33・34は壺である。33は型作りであるが、34は手捏ねによる成形である。外面には人面と思われる墨書が施される。<sup>(注4)</sup>

#### 石製品(第78図)

123は滑石製紡錘車である。約1/2が欠損している。外面に装飾は見られない。124は硯



第79図 出土遺物実測図(5)

132・135. S K 173    133・134. S K 197    136～138. 2 トレンチ整地層

である。大半が欠損している。陸部分の2か所の凹みは砥石としての2次的利用によるものであろう。125・126は土坑S K 245の共伴遺物である。125は手持ち砥石である。上半部が欠損している。126は滑石製石鍋である。内外面にわずかに製作痕が残る。色調は黒灰色を呈している。底部には切削痕が残る。これは破損した石鍋を温石として利用した痕跡

付表2 出土遺物観察表 (単位はすべてcm)

番号	種類	器種	口径	高台径	器高	遺構	備考
1	土師器	皿	(10.2)		1.85	SE101	口縁部内外面煤付着
2	土師器	皿	(10.2)		(1.65)	SE101	口縁部内外面煤付着 残存率33%
3	土師器	皿	(10.4)		(1.9)	SE101	口縁部内外面煤付着 残存率25%
4	土師器	皿	(11.0)		(1.45)	SE101	口縁部内外面煤付着 残存率25%
5	土師器	皿	(8.8)		(1.5)	SE101	口縁部内外面煤付着 残存率33%
6	土師器	皿	(9.6)		(1.9)	SE101	口縁部内外面煤付着 残存率20%
7	土師器	皿	5.6		1.25	SE169	ほぼ完形
8	土師器	皿	7.8		1.4	SE169	残存率90%
9	土師器	皿	7.7		1.5	SE169	口縁部煤付着 残存率 80%
10	土師器	皿	(9.1)		(1.5)	SE169	口縁部煤付着70%
11	土師器	皿	(9.1)		(1.8)	SE169	ほぼ完形
12	土師器	皿	(9.8)		(1.7)	SE169	ほぼ完形
13	土師器	皿	(11.0)		(1.7)	SE196	残存率20%
14	土師器	皿	11.6		1.85	SE196	残存率20%
15	肥前磁器	小皿	9.9	5.6	2.7	SE101	ほぼ完形 伊万里染付
16	施釉土師器	皿	(10.0)	4	(1.75)	SE101	柿釉 灯明皿
17	陶器	椀	(10.7)	3.8	6.4	SE101	残存率50% 京焼?
18	肥前陶器	椀	11.2	4.2	5.2	SE101	残存率36% 唐津焼
19	肥前磁器	椀	9.8		5.7	SE101	伊万里染付
20	中国製磁器	椀	7.85	3.55	5.5	SE101	残存率36% 白磁
21	肥前磁器	小型椀	6.2		3.5	SE169	残存率33% 白磁
22	肥前磁器	椀	7.8	4	4.95	SE101	残存率32% 円圈に圈 線伊万里焼
23	肥前磁器	椀	(8.0)		残存(5.05)	SE169	残存率33% 外面青磁 内面染付
24	肥前磁器	蓋	4.4		2	SE169	完形 伊万里染付
25	織部	水注	5.6		6.1	SE112	
26	肥前磁器	椀	7.6	2.7	3.5	SE112	残存率80%
27	肥前磁器	椀	(7.5)	2.8	3.15	SE112	残存率70% 見込みに 渦卷文
28	陶器	椀	(14.4)	6.7	8.5	SE112	残存率80%
29	陶器	片口鉢	12.4	4.9	7.2	SE169	残存率64%
30	丹波	德利	2.7	低径7.0	19.4	SE112	残存率75%
31	信楽	すり鉢	41	19	17	SE169	残存率50%

32	土製品	伏見人形	最大幅4.2 断面幅2.0		4.9	SE196	前後合わせ型作り
33	土製品	小壺	(2.8)		2.1	SE169	残存率60%
34	土製品	小壺	2.5		2.4	SE169	完形 外面に人面様の 墨書あり
35	土製品	皿	(7.9)	(4.2)	残存(1.5)	SK173	残存率11%
36	土製品	皿	(7.7)	(6.1)	(1.1)	SK173	残存率11% 底部回転 糸切り
37	土製品	皿	(7.2)	(6.0)	(1.15)	SK173	残存率11%
38	土製品	皿	(7.6)	(6.9)	(1.25)	SK173	残存率11% 白色系
39	土製品	皿	(6.9)	(7.0)	(0.9)	SK173	残存率16% 色調明褐色
40	土製品	皿	(8.6)		(1.4)	SK173	残存率25% 色調明褐色
41	土製品	皿	8		1.1	SK173	残存率80%
42	土製品	皿	(9.5)		(1.6)	SK173	残存率25%
43	土製品	皿	7.9	5	1.25	SK173	残存率31%
44	土製品	皿	8	5.2	1.25	SK173	残存率31% 色調明褐色
45	土製品	皿	8.4		1.15	SK173	完形
46	土製品	皿	7.9	5.1	1.45	SK173	残存率42%
47	土師器	皿	(8.7)		(1.2)	SK173	口縁部明褐色 残存率 25%
48	土師器	皿	(12.0)		(2.2)	SK173	残存率90%
49	土師器	皿	(13.0)	(8.5)	(1.85)	SK173	残存率52% 明褐色
50	土師器	皿	(12.8)		(3.4)	SK173	残存率73%
51	土師器	椀	(13.8)		(4.85)	SK173	残存率60% 内面黒色 化
52	土師器	不明	(4.8)		(5.2)	SK173	底部に3mm間隔で切り 込みあり
53	土師器	杯	(10.2)		(3.25)	SK173	残存率50% 色調内外 面とも褐色
54	土師器	高杯脚			残存高(10.0)	SK173	
55	中国製磁器	椀	(16.0)		残存高(5.2)	SK173	青磁
56	中国製磁器	椀	(16.8)		(4.85)	SK173	口縁残存率5% 青磁
57	中国製磁器	椀	(16.5)		(2.8)	SK173	口縁残存率11% 青磁
58	中国製磁器	椀	(16.8)		(3.7)	SK173	口縁残存率8% 青磁
59	中国製磁器	椀	(13.6)		(4.0)	SK173	口縁残存率4% 青磁
60	中国製磁器	椀	(14.4)		(2.4)	SK173	口縁残存率13% 青磁
61	中国製磁器	椀	(17.6)		(3.2)	SK173	口縁残存率7% 青磁
62	灰釉陶器	椀	(12.8)		残存(3.1)	SK173	口縁残存率2%
63	土師器	高杯 脚底部		底径(7.7)	(3.4)	SK173	

64	土師器	皿		3.6	残存(1.6)	SK173	底部糸切り痕あり
65	中国製磁器	椀	(3.2)	(1.8)	(3.5)	SK173	見込に露胎部 青磁
66	中国製磁器	皿		底径2.9	(1.2)	SK173	青磁
67	中国製磁器	椀		(7.4)	(3.5)	SK173	青磁
68	常滑	甕	長さ(6.5)			SK173	
69	瓦質土器	火舎	(29.6)		(7.8)	SK173	菊花形スタンプ文あり
70	瓦質土器	鍋	(26.8)		残存(4.15)	SK173	残存率10%
71	瓦質土器	鍋	(28.8)		残存(7.3)	SK173	残存率10% 内面ハケ
72	瓦質土器	鉢	(35.6)		(6.6)	SK173	残存率11% 外面指頭 圧痕あり
73	瓦質土器	鉢	(38.8)		残存(6.5)	SK173	残存率11% 外面指頭 圧痕あり
74	瓦質土器	羽釜(足)			残存(11.5)	SK173	
75	常滑	甕			残存(17.7)	SK173	体部片 接ぎ目外面に タタキ
76	土師器	皿	5		1.15	SK146	完形
77	土師器	皿	5.2	2.5	1.3	SK146	完形 煤付着
78	土師器	皿	5.5	2.5	1.3	SK146	完形
79	土師器	皿	5.8		1.05	SK146	完形
80	土師器	皿	5.8	3.3	1.1	SK197	完形
81	土師器	皿	5.7	3	1.3	SK197	完形
82	土師器	皿	5.9		1.4	SK197	完形
83	土師器	皿	5.4		1.05	SK146	残存率50%
84	土師器	皿	8.8		1.5	SE101	残存率33%
85	土師器	皿	5.1		1.2	SK146	残存率66%
86	土師器	皿	5.1		1.3	SK146	残存率75%
87	土師器	皿	5.15		1.25	SK146	残存率40%
88	土師器	皿	5.6		1.25	SK146	残存率25%
89	土師器	皿	5.1		1.05	SK146	残存率50%
90	土師器	皿	5.8		1.2	SK146	ほぼ完形
91	土師器	皿	10.6		1.6	SK146	ほぼ完形
92	土師器	皿	10.75		1.55	SK146	底部75%
93	無釉陶器	皿	(11.6)	底径(5.5)	(3.6)	SK197	底部糸切 残存率22%
94	土師器	皿	10.6		1.6	SK146	完形 口縁部に煤付着
95	土師器	皿	10.5	7.1	1.8	SK146	ほぼ完形
96	土師器	皿	(10.8)	底径(4.3)	(4.0)	SK197	底部糸切 残存率22%
97	土師器	皿		底径4.9	(1.5)	SK197	残存率75%
98	土師器	皿	(11.2)		(1.6)	SK104	残存率7%
99	土師器	皿	(13.0)		(2.35)	SK104	残存率12%
100	緑釉陶器	椀		6.9		1 トンチ 包含層	残存率40% 京都系
101	緑釉陶器	椀				SK148	高台剥離 近江系残存 率40%

102	瀬戸美濃	皿			(3.8)	SK197	底部 残存率75%
103	信楽	すり鉢	(28.0)	底径(15.7)	(13.25)	SK197	残存率16% 17世紀?
104	肥前磁器	皿	(13.0)	7.8	4.2	包含層	残存率97% 伊万里染付
105	肥前陶器	椀	(7.2)	(4.0)	(3.9)	排土中	残存率33% 唐津
106	瀬戸美濃	椀	(9.3)		(4.7)	攪乱	天目茶椀 残存率16%
107	土師器	皿	(7.0)		(1.6)	SK225	残存率33%
108	中国製磁器	椀	(9.3)		(3.9)	SK225	残存率16% 青磁
109	土師器	皿	(16.3)		(2.5)	SK225	残存率33%
110	中国製磁器	小皿	(8.4)	底径(5.9)	(1.45)	SK250	残存率11% 青磁 口縁端部内面露胎
111	瓦質土器	甕	長さ(8.9)				
112	中国製磁器	壺				SK206	青白磁
113	土師器	皿	7	3	1.75	SK245	残存率13%
114	土師器	皿	(10.2)	(4.8)	(1.65)	SK245	残存率16% 色調褐色
115	土師器	皿	(8.1)	(7.6)	(1.15)	SK245	残存率11%
116	土師器	皿	(8.8)	(7.0)	(1.1)	SK245	残存率14%
117	土師器	皿	(10.1)		(2.0)	SK245	残存率14%
118	瀬戸美濃	鉢	(21.0)		(4.25)	SK250	残存率11%
119	瓦質土器	鉢	(26.85)		(4.1)	SK250	残存率5%
120	土師器	皿	(10.5)		(2.6)	SK250	残存率16%
121	瓦質土器	片口椀	(13.7)		(2.15)	SK250	残存率8% 外面ヨコナデ
122	常滑	甕	長さ(8.9)			SK250	
123	石製品	紡錘車	(1.35)	(2.35)	1	SK173	滑石
124	石製品	硯	長さ(4.25)	幅(2.90)	(0.7)	SE101	砥石として二次の使用
125	石製品	砥石	長さ(8.40)	厚さ3.90	最大幅3.20	SK245	
126	石製品	石鍋	(15.3)	(20.5)	7.5	SK245	滑石 温石として底部利用
127	石製品	石臼	表(24.3) 裏(28.7)		9	1トレン チ排土	
128	金属製品	釘	長さ(6.0)	最大幅0.45		SE169	
129	銭貨	皇宋通寶	径2.4			1トレン チ排土	北宋銭 楷書 初鑄年 1039
130	銭貨	皇宋通寶	径2.4			1トレン チ排土	北宋銭 篆書 初鑄年 1039
131	銭貨	元豊通寶	径2.4			1トレン チ排土	北宋銭 行書 初鑄年 1078
132	瓦	平瓦				SK173	
133	瓦	軒平瓦				SK197	
134	瓦	軒平瓦				SK197	
135	瓦	平瓦				SK173	外面 青灰色 断面灰色 堅緻

136	瓦	方形飾り瓦				2トレンチ 整地層	文様部分金箔押、釘穴 残存
137	瓦	軒平瓦				2トレンチ 整地層	
138	瓦	平瓦				2トレンチ 整地層	外面切取痕、内面タタキ

と思われる<sup>(注5)</sup>。127は花崗岩製の石臼である。廃棄された後、2次的に被熱している。石臼は上臼であり、8分画4～5溝のものと思われる。挽木穴も残存しており、深さ3.2cmを測る。

銭貨(129～131) 129・130は皇宋通寶である。129は楷書体、130は篆書体である。131は元豊通寶で、行書体である。いずれも北宋銭である。

#### 瓦(第79図)

132～135は近世の遺構に伴った混入品である。いずれも細片で残りは悪い。136～138は2トレンチの整地層出土である。136は金箔押方形飾り瓦である。桐文の一部で、全体に厚手の作りである。文様部分に金箔が施されているが、わずかに残存するのみである。文様の左上に釘穴がある。

## 5. ま と め

今回の調査面積はごくわずかではあったが、現地表面から1mほどで地山となることが明らかになった。調査地は堀川の氾濫の及んだ場所と思われたが、ところどころでしっかりと安定面が存在することが確認できた。今回確認できた遺構は大半が18世紀以降のものであったが、中世にさかのぼる遺構も同一面でわずかに見られた。調査結果によると、平安京のなかでも調査地周辺は比較的微高地状を呈していることが考えられ、今回検出できなかった平安京の遺構は中世以降に削平され、結果として平安時代の遺物が包含層中で採取されるに至ったものと思われる。また、1トレンチ及び2トレンチの双方で、遺構面である黄褐色土の下層、すなわち現地表下約1.5m以下では、旧流路に伴う砂礫層が続いていた。しかし、この砂礫層に伴う遺物は確認できなかった。少なくとも今回の結果を見る限り、13世紀の段階ではすでに黄褐色土が堆積し、安定した地盤が形成されたことに間違いはないと思われる。今後周辺調査での資料の蓄積を待ちたい。

(柴 暁彦)

注1 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和54年度・昭和56年度・昭和58年度・昭和60年度・昭和62年度・昭和63年度・平成元年度・平成2年度 京都市文化観光局 1979・1981・1983・

1985・1987・1988

注2 調査にあたっては以下の方々のお世話になった(順不同・敬称略)。

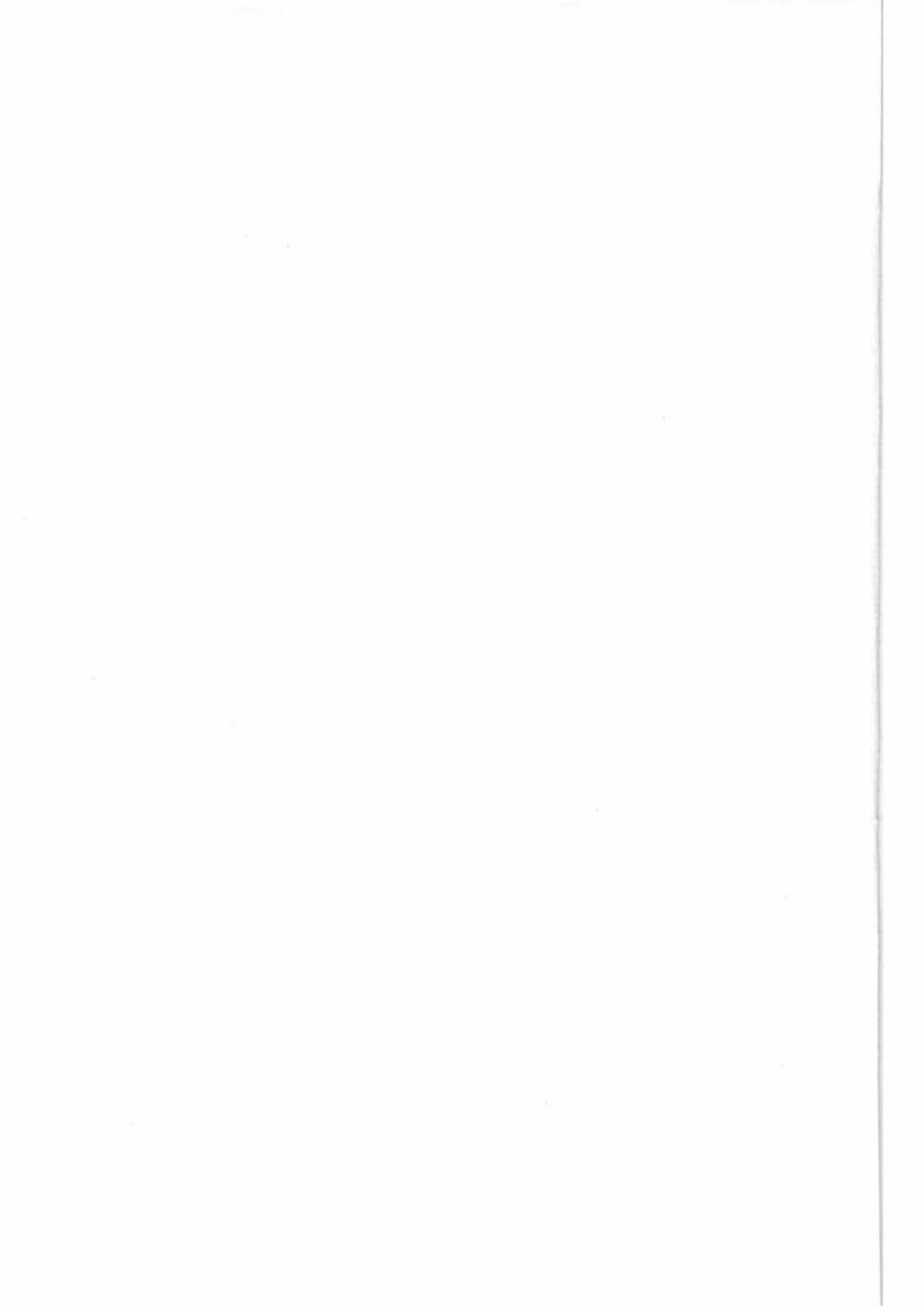
岩佐聖子・小田栄子・小滝初代・皿木 綾・丹新千晶・波部 健・前田暁宏・森川敦子・横山  
成巳

注3 伊野近富「平安京(左京近衛西洞院辻)」(『京都府遺跡調査概報』第33冊 (財)京都府埋蔵文  
化財調査研究センター) 1989

注4 片岡 肇ほか「高倉宮・曇華院跡第4次調査」(『平安京跡研究調査報告』第18輯 (財)古代  
学協会) 1987

注5 河内一浩「和歌山県下における石鍋について」(『中世土器の基礎研究』Ⅶ 中世土器研究会)  
1991

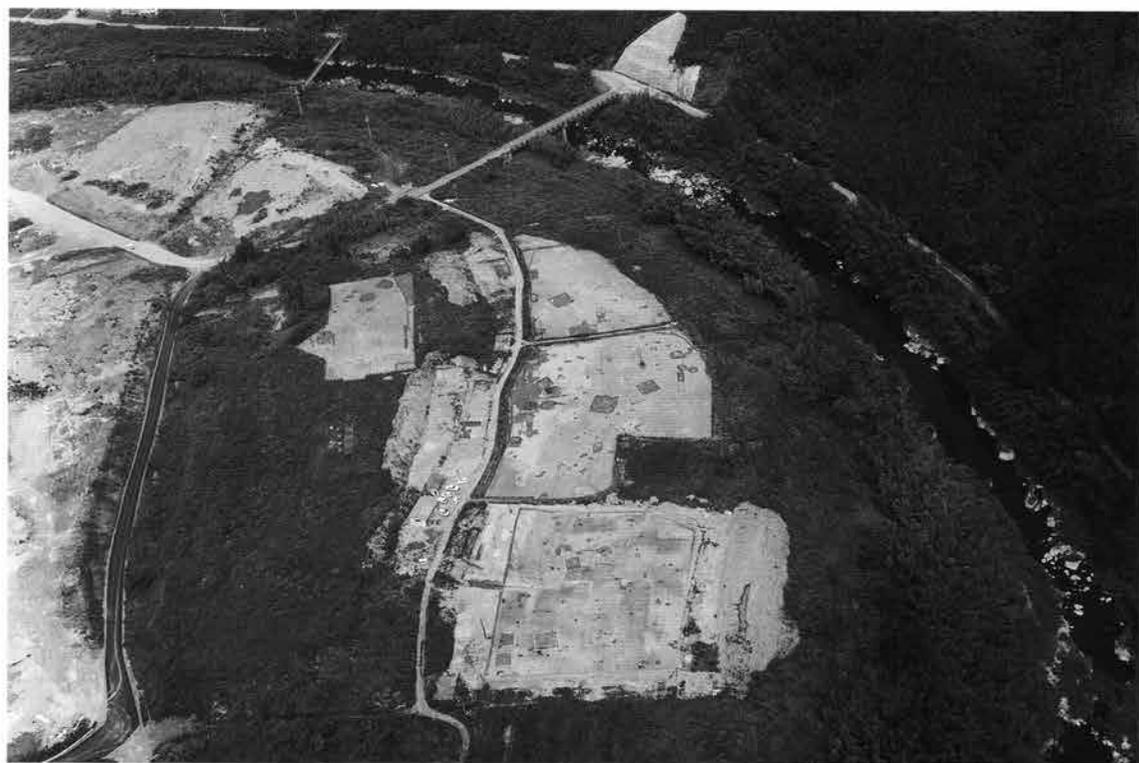
# 圖 版



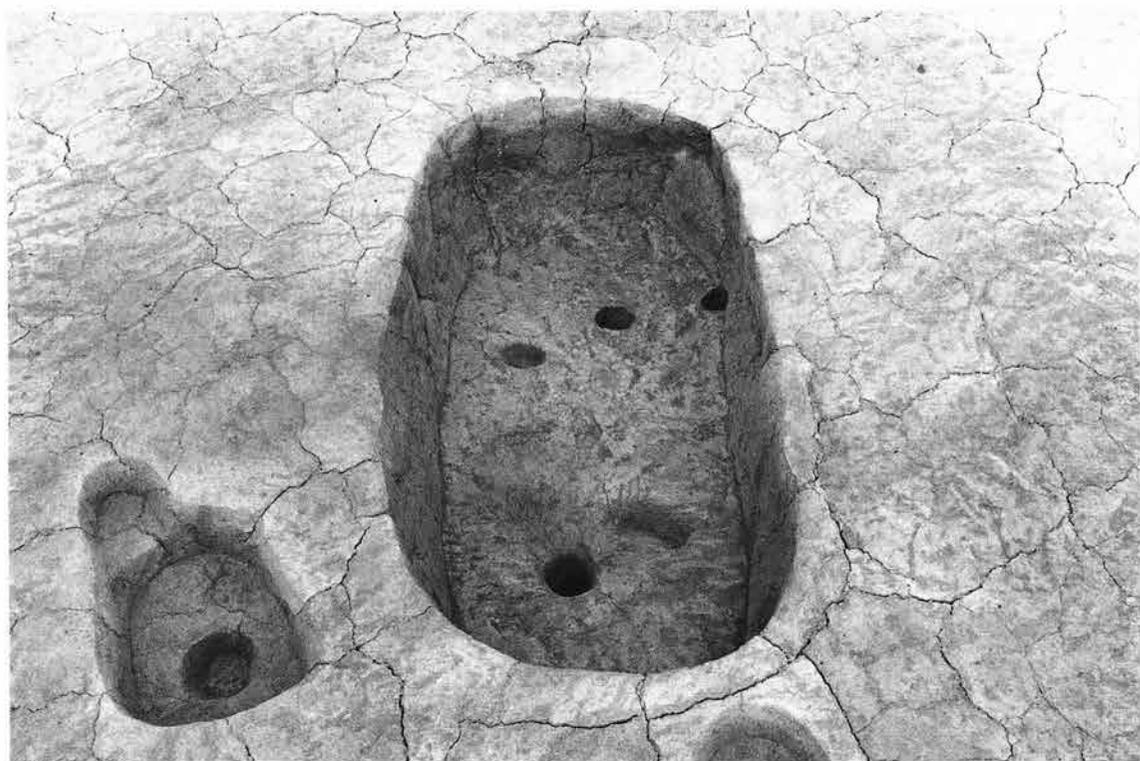
図版第1 天若遺跡



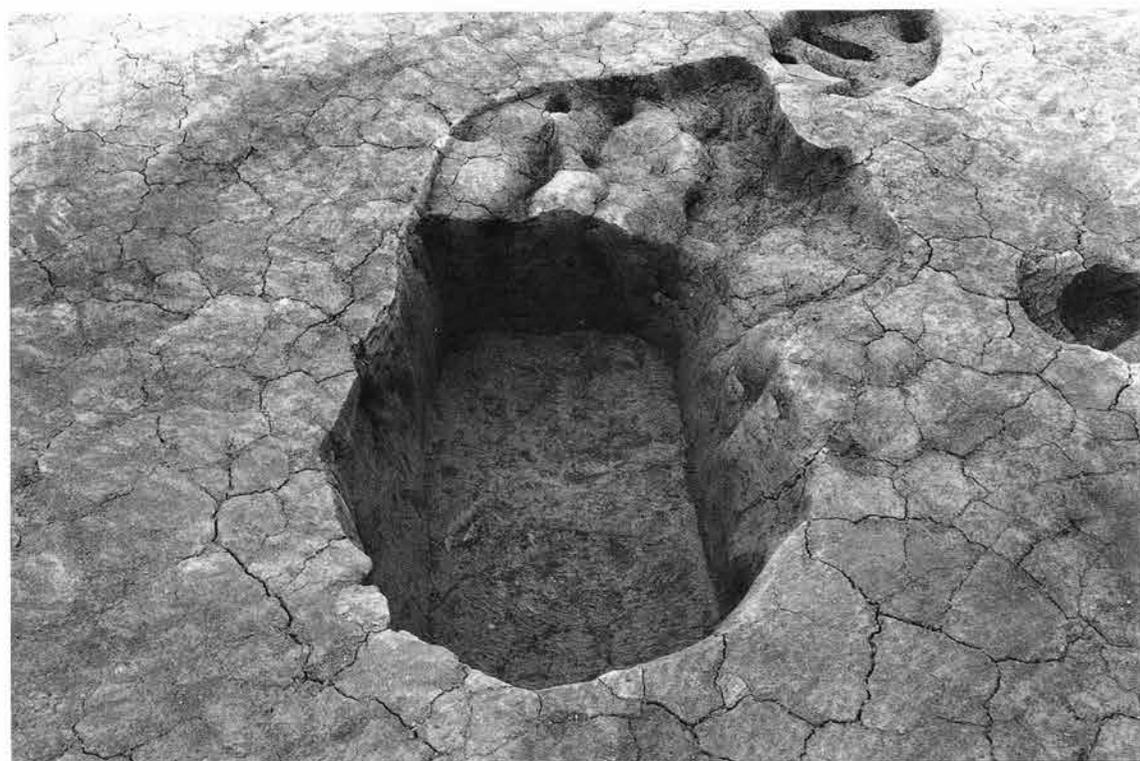
(1) 空中写真 (南西から)



(2) 空中写真 (南東から)



(1) 土坑SK40j-P4全景 (西から)



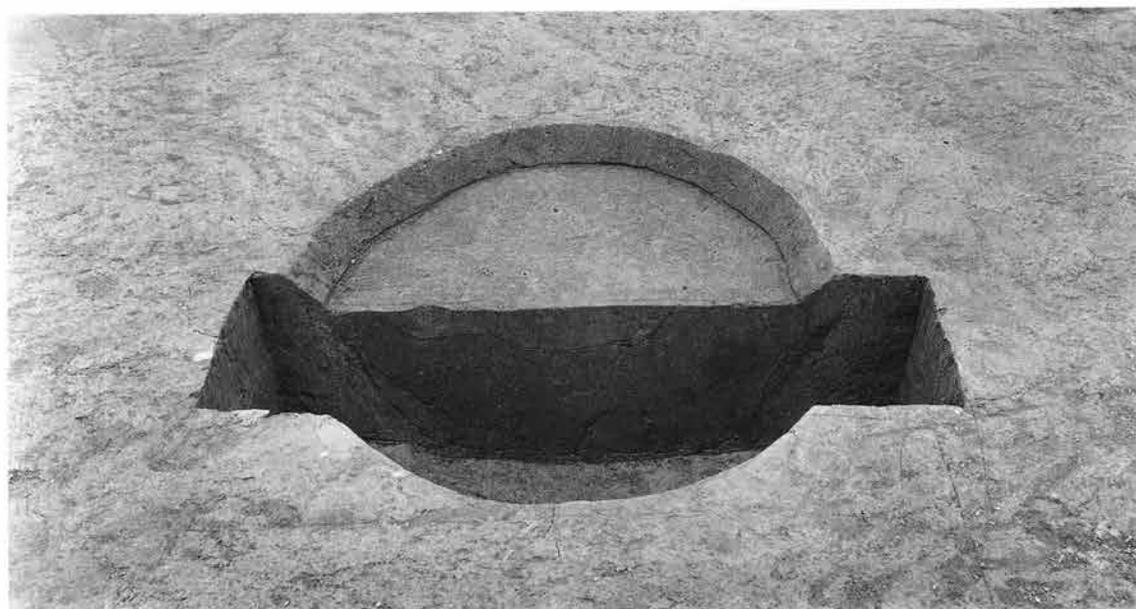
(2) 土坑SK35e-SK4全景 (東から)



(1) 陥穴状遺構40a-SK3全景（北東から）



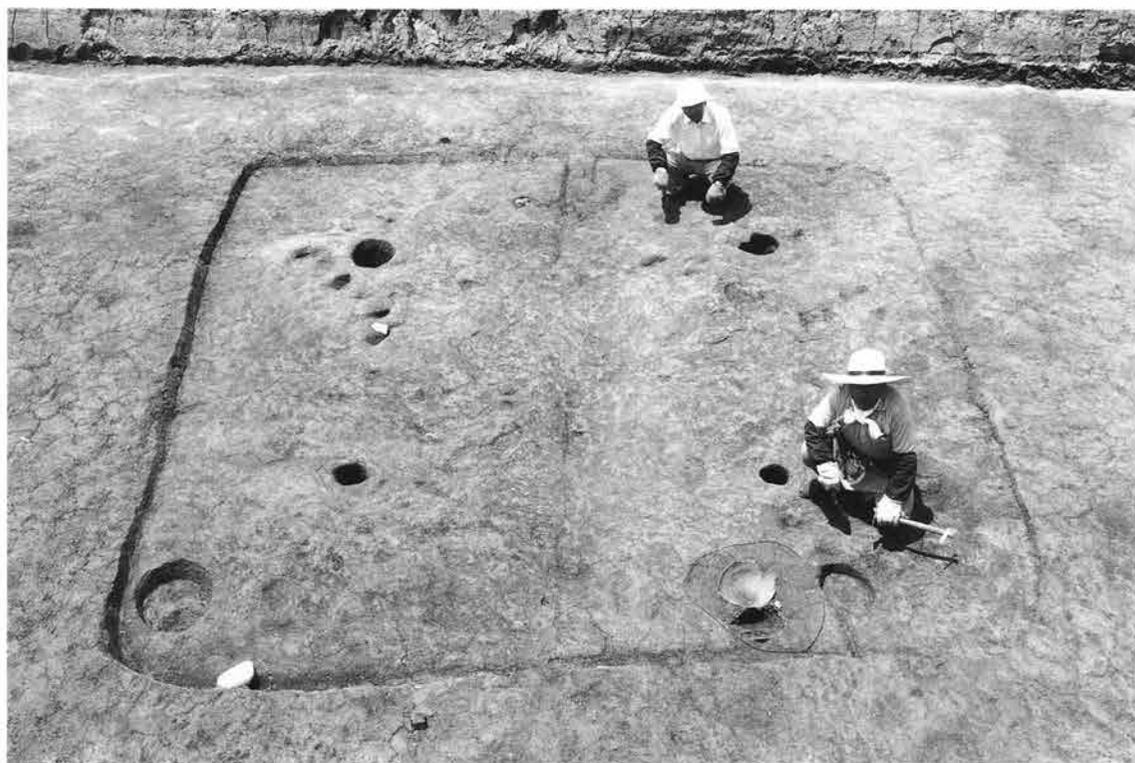
(2) 陥穴状遺構42h-P1全景（南東から）



(1) 陥穴状遺構46i-P1断面 (南から)



(2) 陥穴状遺構40a-SK3ほか復原 (南西から)



(1) 竪穴式住居跡SH9201全景（北東から）



(2) 竪穴式住居跡SH9202全景（南東から）



(1) 竪穴式住居跡SH9203全景（南東から）



(2) 竪穴式住居跡SH9204全景（南東から）



(1) 竪穴式住居跡SH9205全景（南から）



(2) 掘立柱建物跡SB9211全景（南西から）



5-2



5-1



5-3



5-10



5-4



5-8



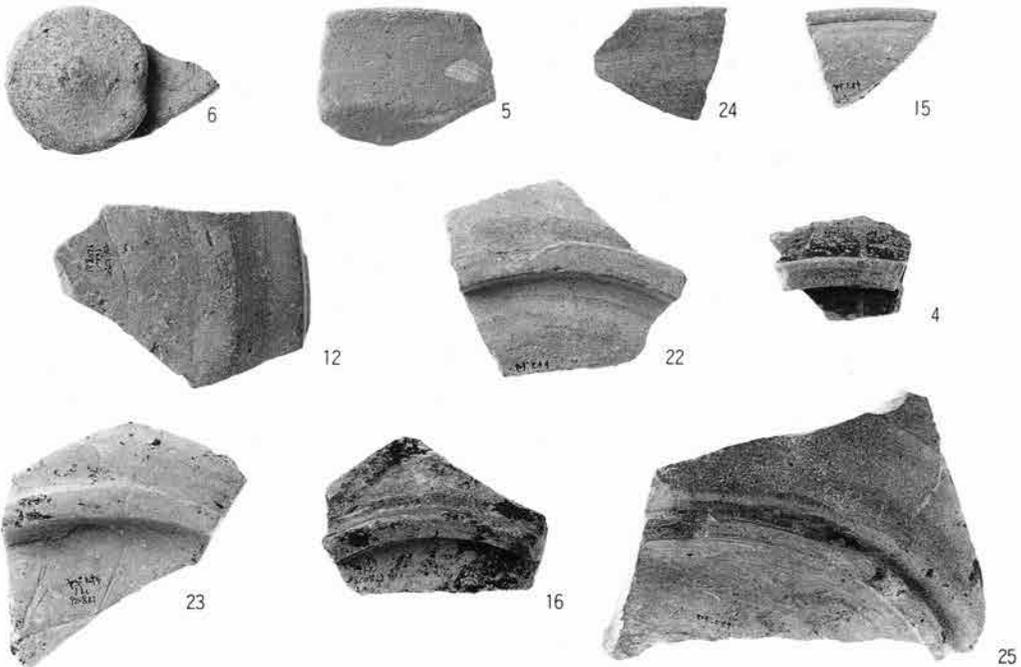
(1) 第1トレンチ全景 (東から)



(2) 第1トレンチ全景 (西から)



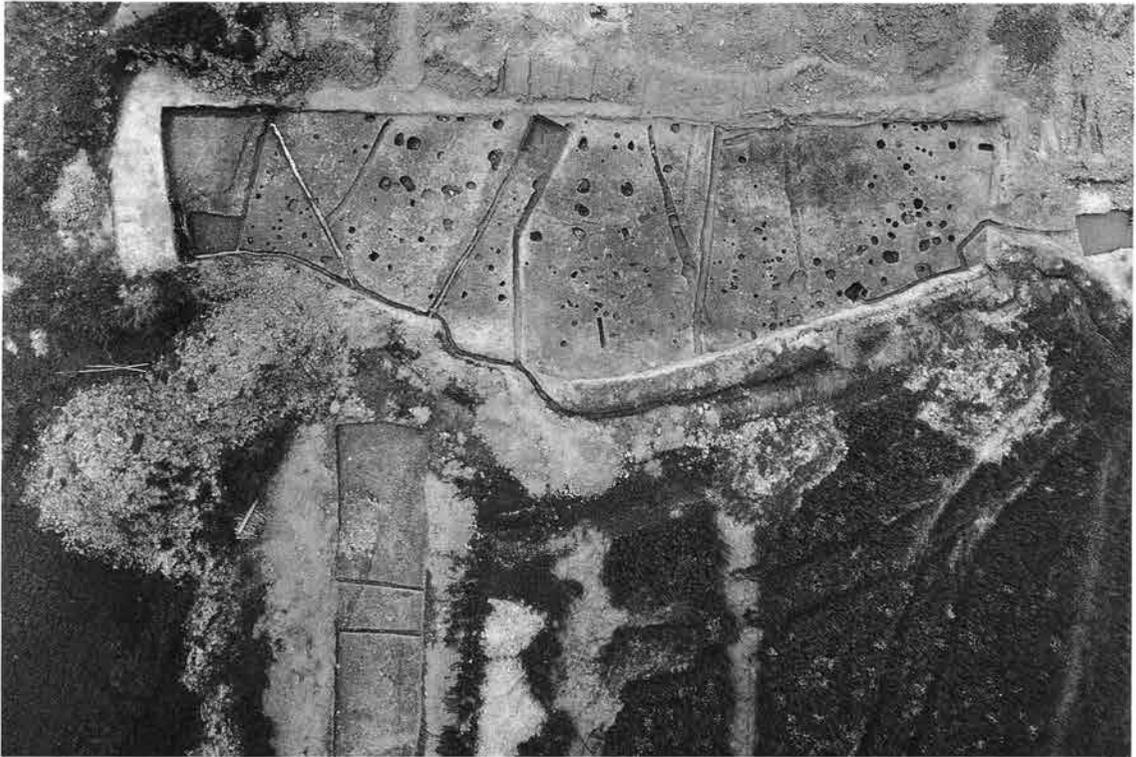
(1) 第2トレンチ全景(西から)



(2) 出土遺物



(1) 調査地遠景 (中央奥の建物が周山廃寺)



(2) 第1トレンチ空中写真



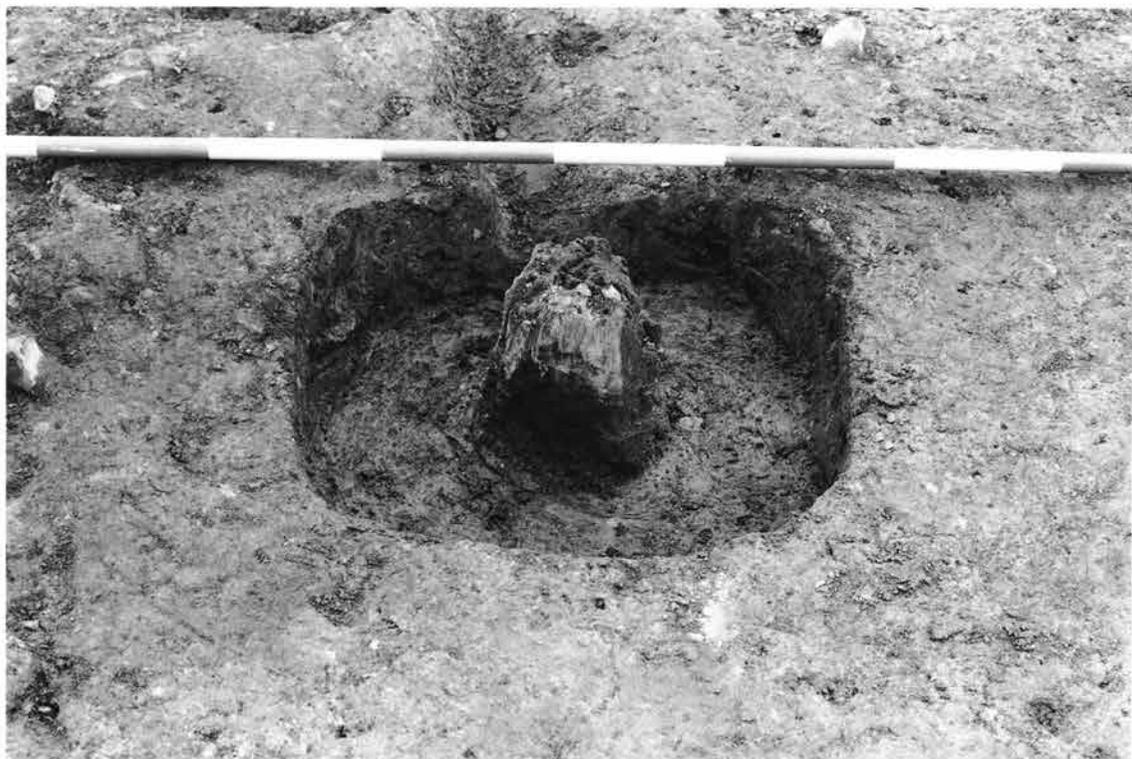
(1) 建物跡1完掘状況(南から)



(2) 溝1完掘状況(南から)



(1) 柱穴 (P1) 完掘状況 (東から)



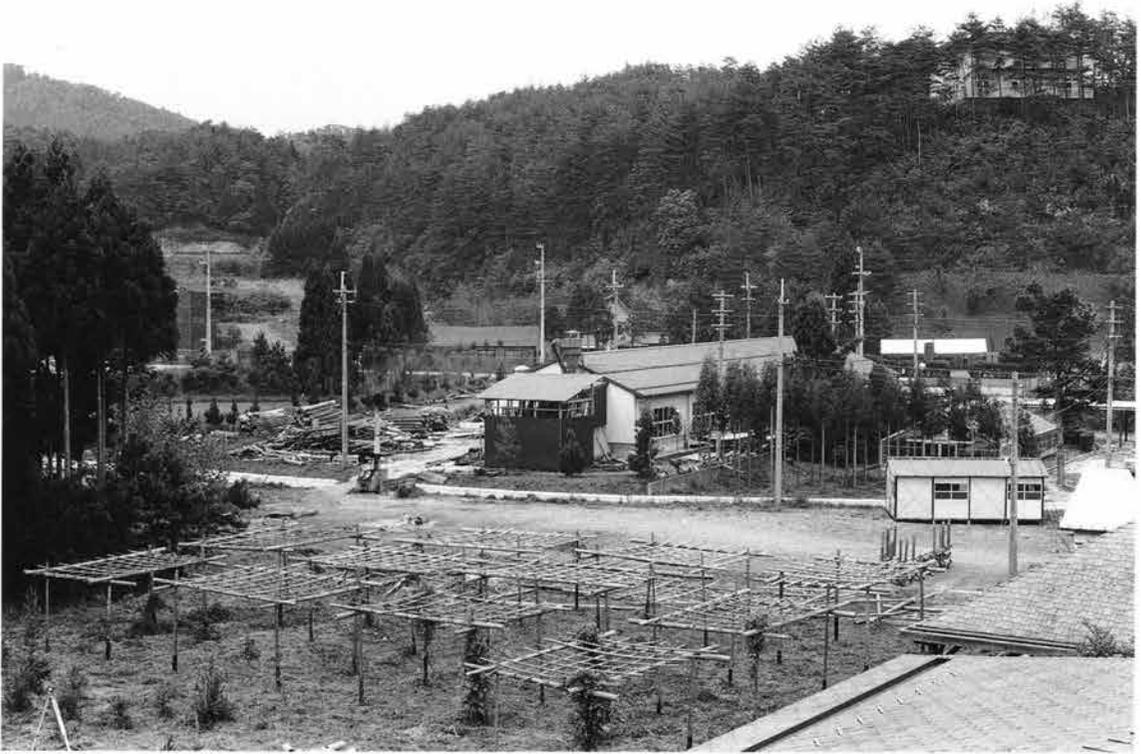
(2) 柱穴 (P2) 完掘状況 (西から)



(1) 関連遺跡現況 一周山廃寺一



(2) 関連遺跡現況 一周山瓦窯跡一



(1) 調査地近景 (西から)



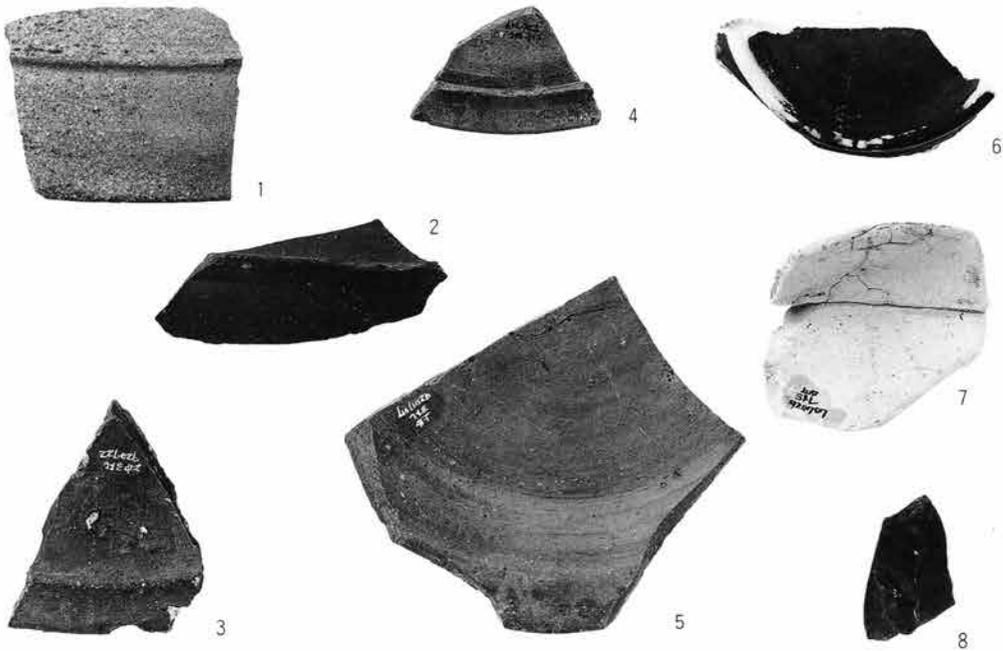
(2) 第1トレンチ北壁深掘り部分



(3) 第1トレンチ全景 (南から)



(1) 調査後全景 (南から)



(2) 出土遺物

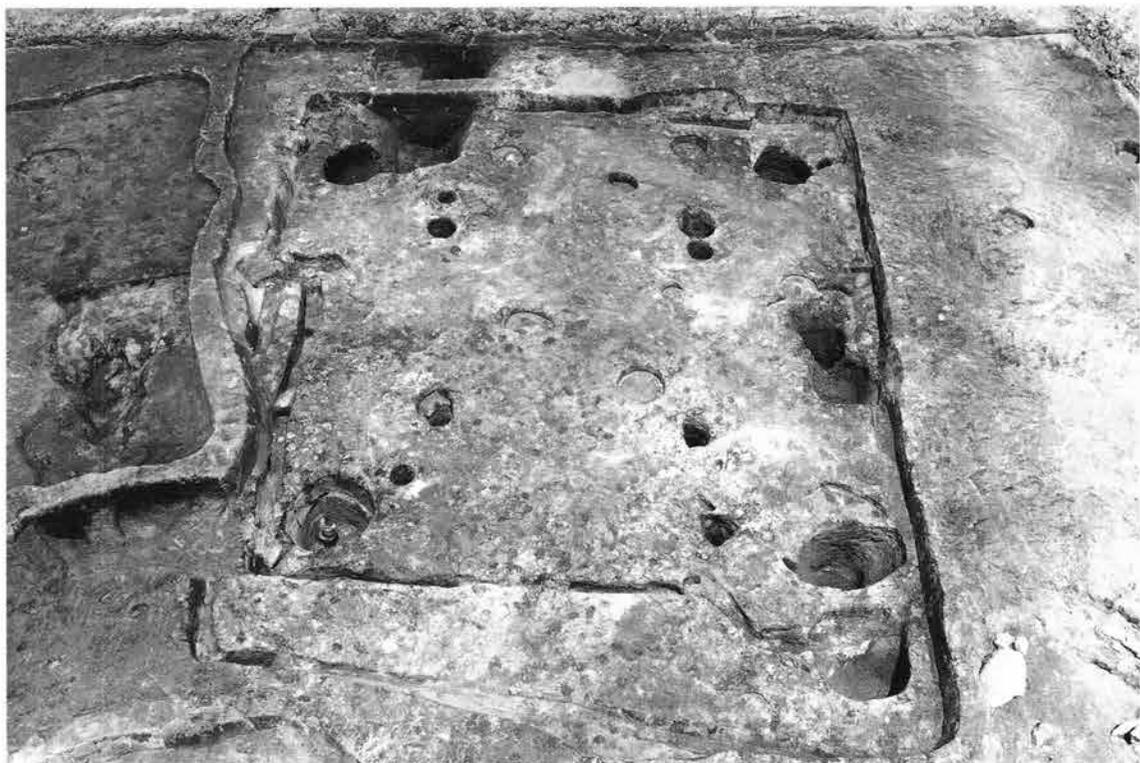
図版第17 鹿谷遺跡



(1) 調査地全景 (北西から)



(2) 第9トレンチ調査風景 (東から)



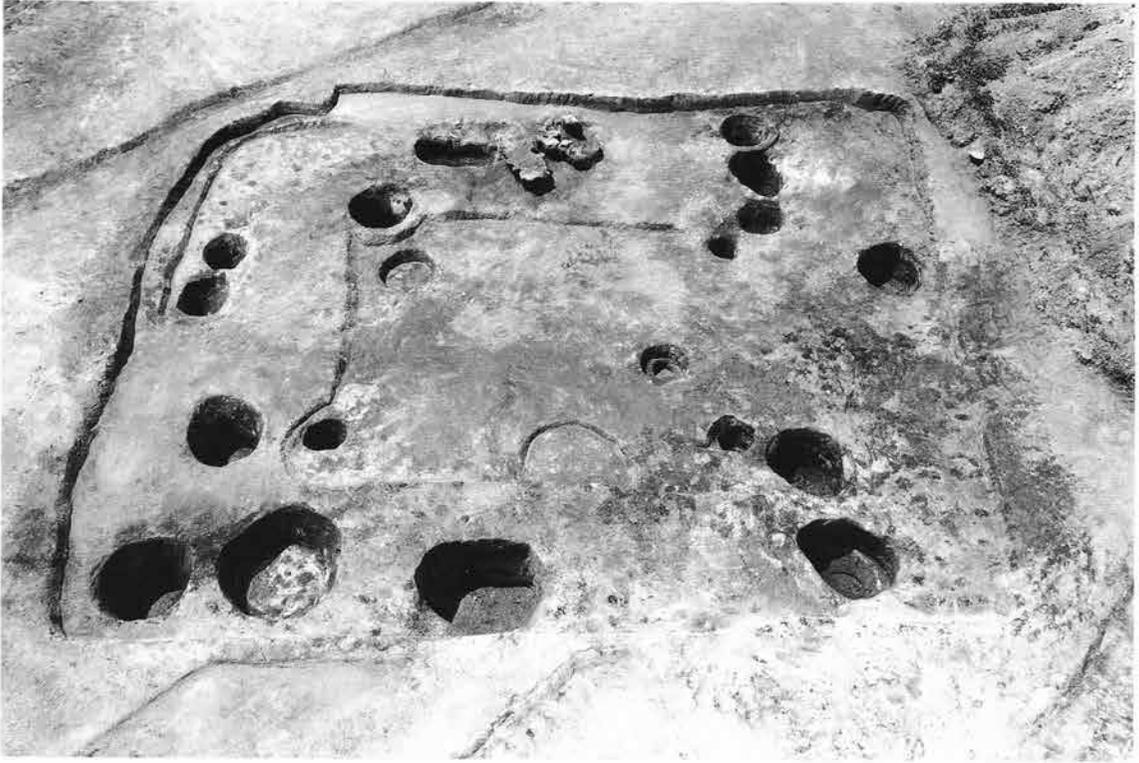
(1) 第3トレンチSH9207住居跡(南から)



(2) SH9207高杯検出状況 (2)



(3) 第3トレンチSH9207住居跡(南東から)



(1) 第3トレンチSH9201住居跡（南東から）



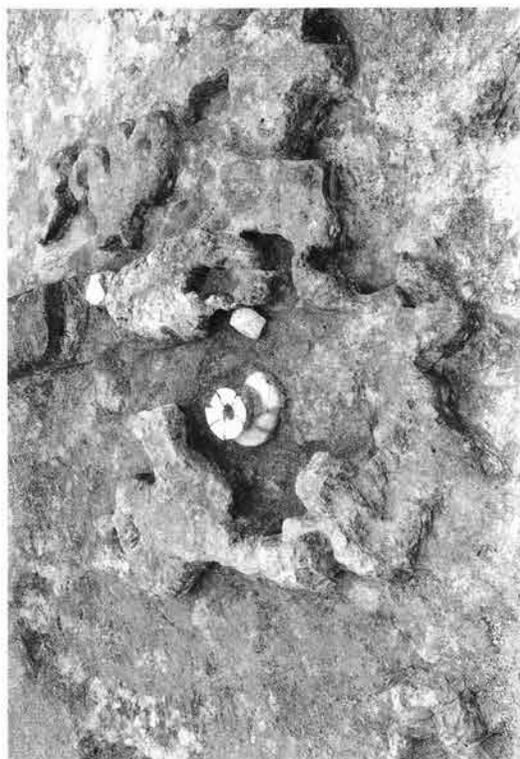
(2) SH9201住居跡高杯検出状況 (15)



(3) SH9201住居跡高杯検出状況 (24)



(1) 第3トレンチSH9204住居跡(南から)



(2) SH9204住居跡竈内高林転用支脚(67)



(3) SH9204住居跡P01土坑上検出遺物(68)



(1) SH9204住居跡P01土器検出状況 (38・41)



(2) SH9204住居跡P01土坑上土器検出状況 (59・74)



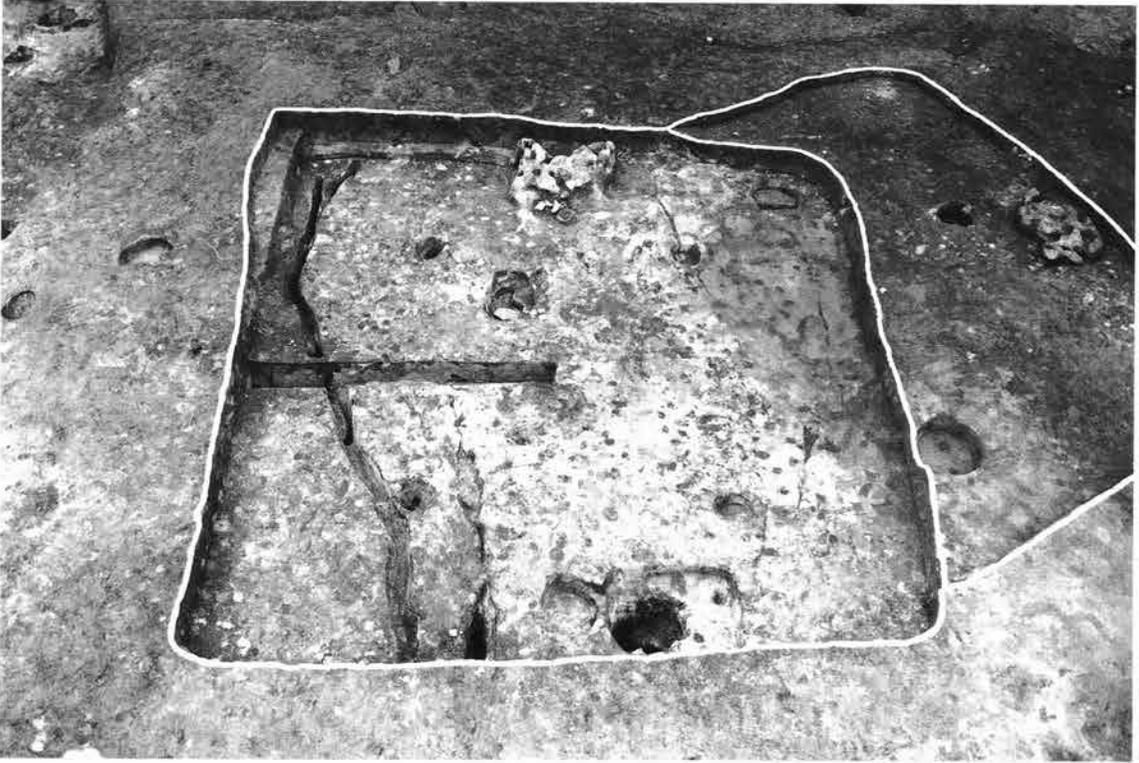
(3) 第3トレンチSH9202住居跡 (南から)



(1) 第3トレンチSH9209住居跡（南から）



(2) 第3トレンチ遺構検出状況（西から）



(1) 第9トレンチSH9226住居跡(南から)



(2) SH9226住居跡竈内高杯転用支脚(60・73)



(3) SH9226住居跡竈半截状況(60・73)(第55図参照)



(1) 第9トレンチSH9230住居跡(南から)



(2) SH9230竈西側土器破砕状況



(3) SH9230竈西側土器完掘状況



(1) 第9トレンチSH9229住居跡(東から)



(2) SH9229住居跡内須恵器検出状況(46)



(3) SH9229住居跡高杯検出状況(64)



(1) 第9トレンチSH9211住居跡竈内高杯検出状況(6)



(2) 第3トレンチSH9205住居跡(南から)



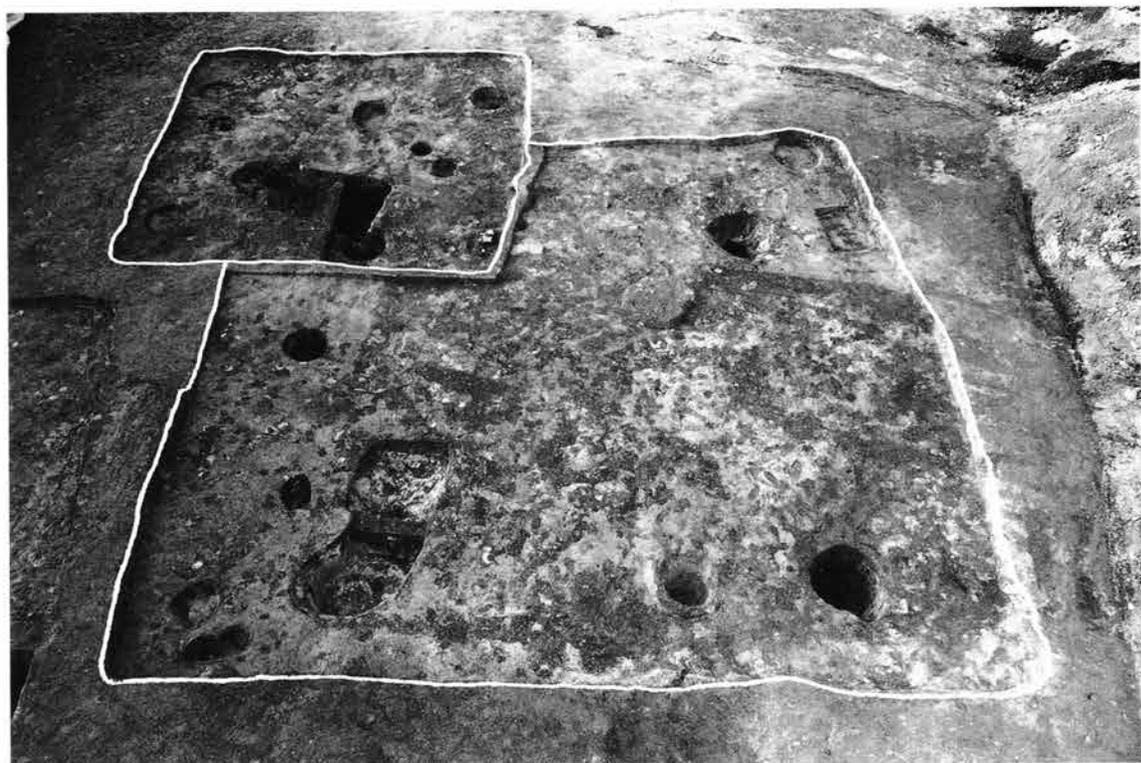
(1) 第9トレンチSH9215住居跡(南から)



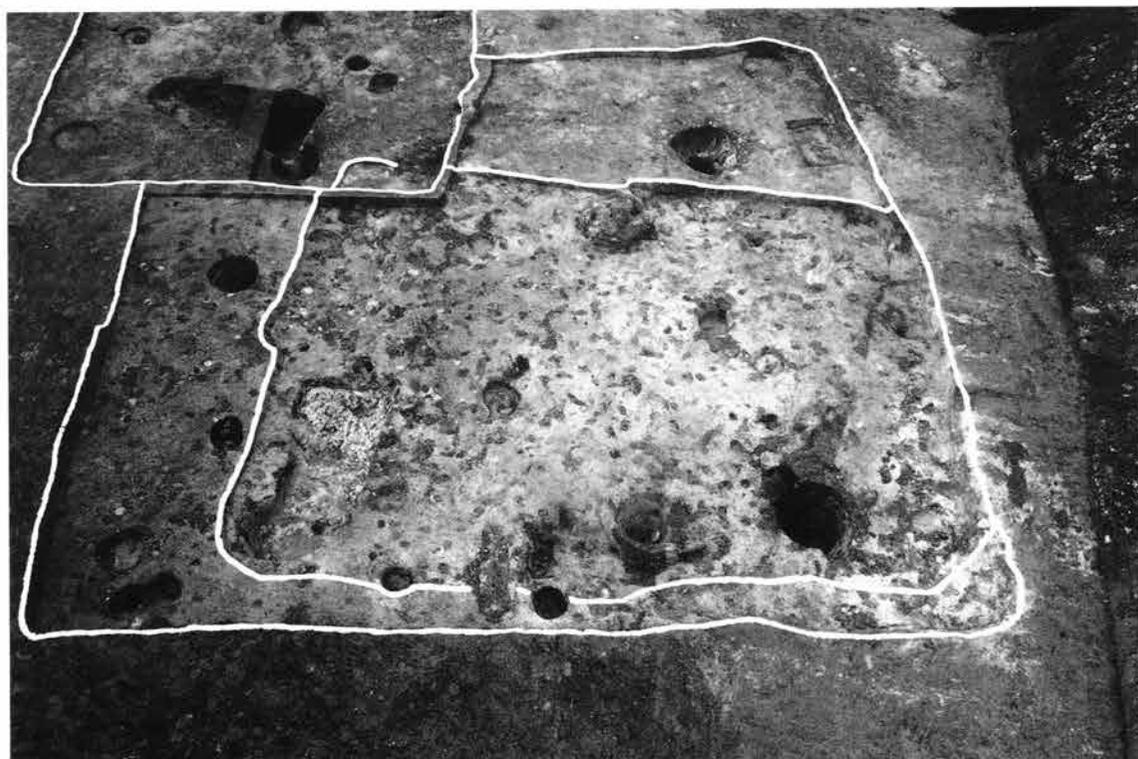
(2) SH9215住居跡内柱穴検出状況



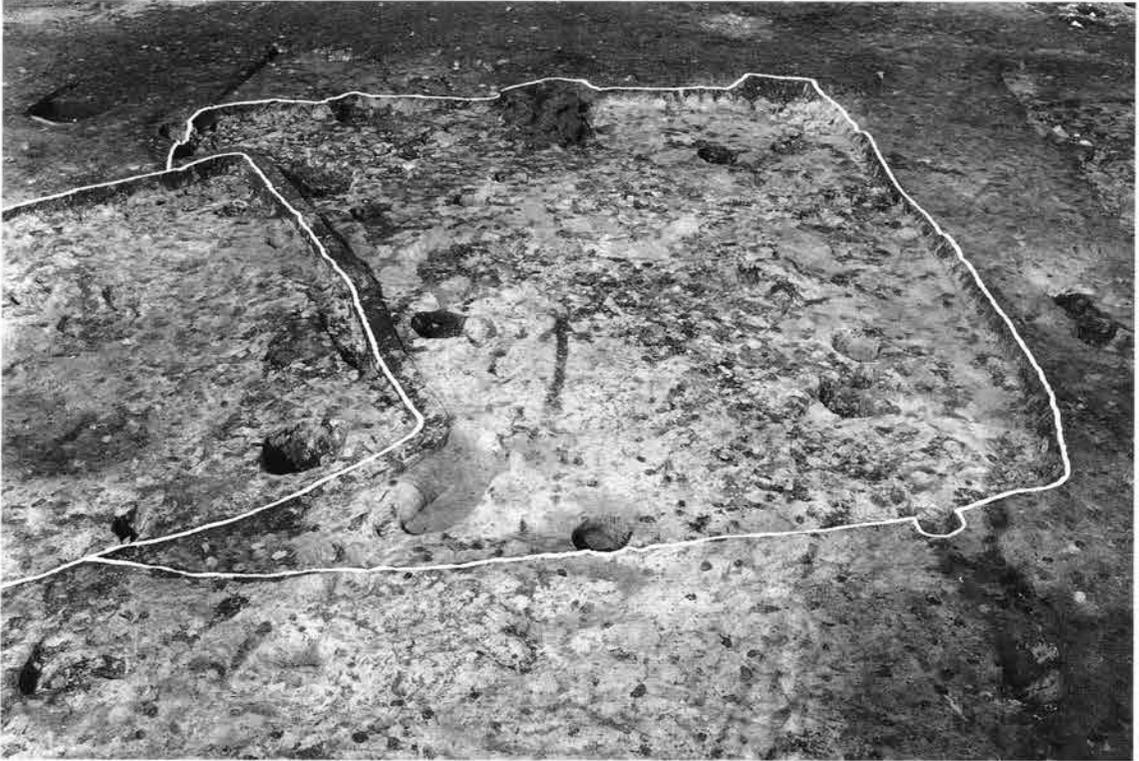
(3) SH9215住居跡床面遺物出土状況



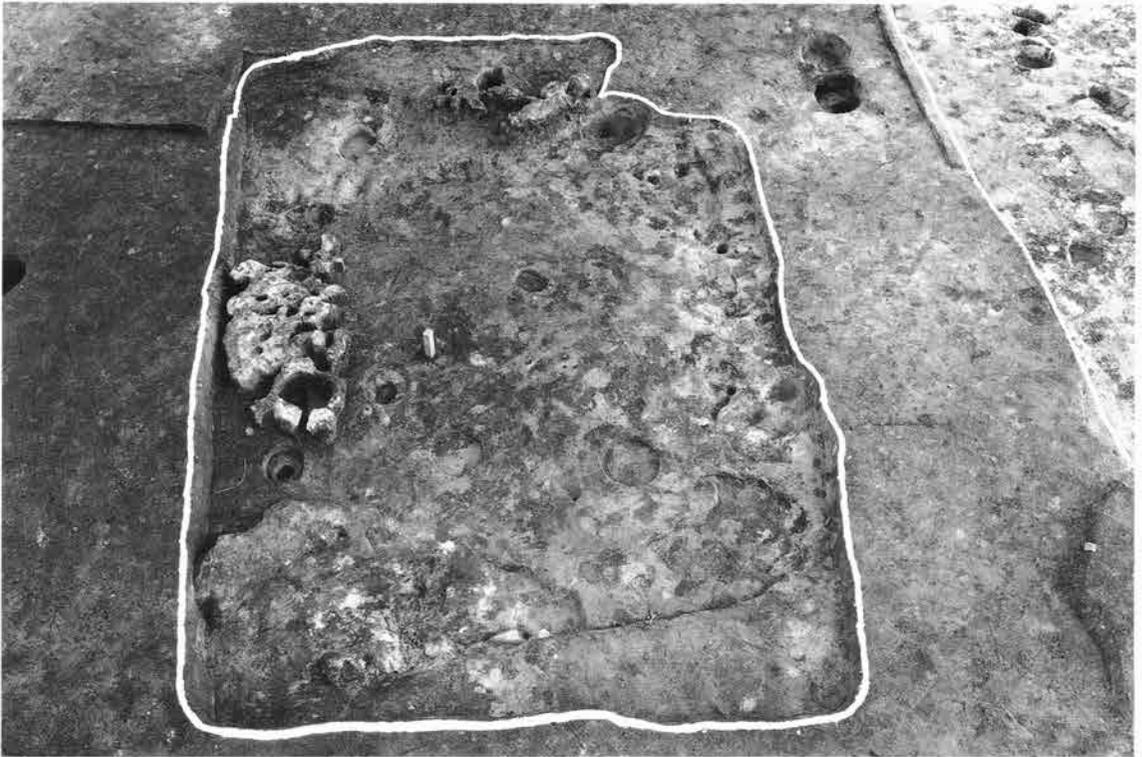
(1) 第9トレンチSH9220住居跡(中央)及びSH9219住居跡(左上)(南から)



(2) 第9トレンチSH9239住居跡(南から)



(1) 第9トレンチSH9228住居跡(中央)(南から)



(2) 第9トレンチSH9238住居跡(南から)



(1) 第9トレンチ遺構検出状況（東から）



(2) 第9トレンチ遺構検出状況（北から）



(1) 第3トレンチ全景 (東側は亀岡市教育委員会調査地)



(2) 第9トレンチ全景



38



48



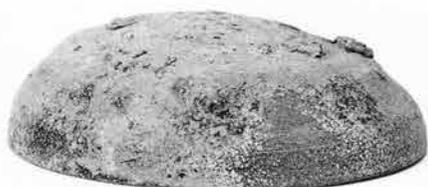
44



80



88



93



96



90



94



46



97



41



40



13



49



60



67



68



23



61



33



73



69



51



76



54



58



50



114

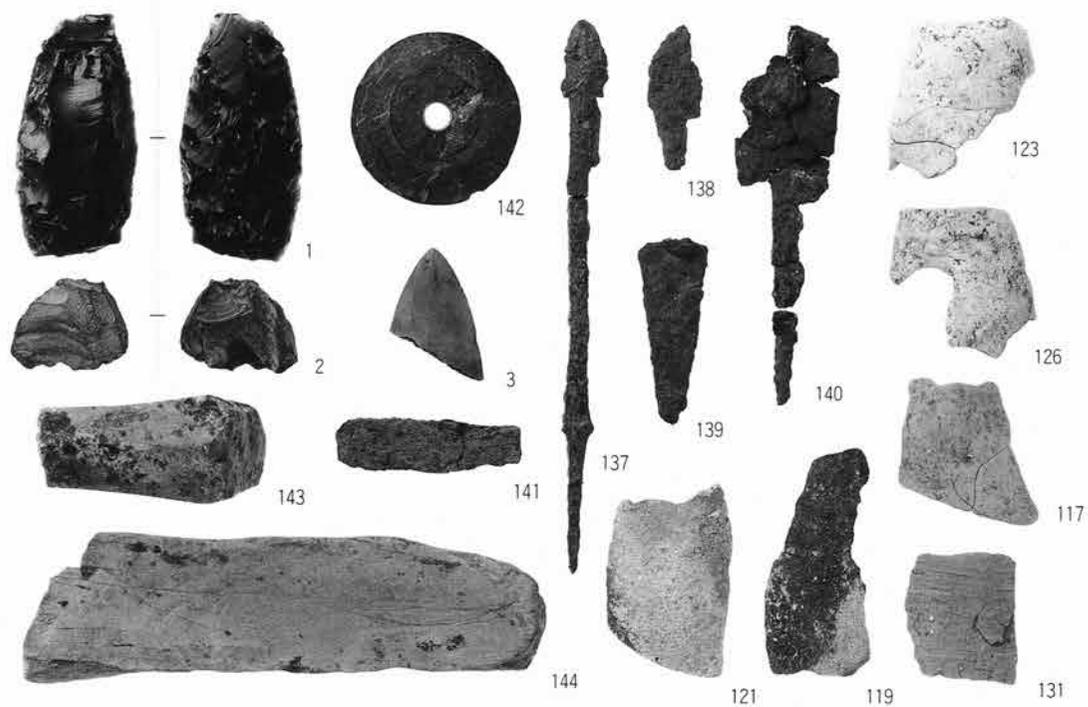


10



1

142

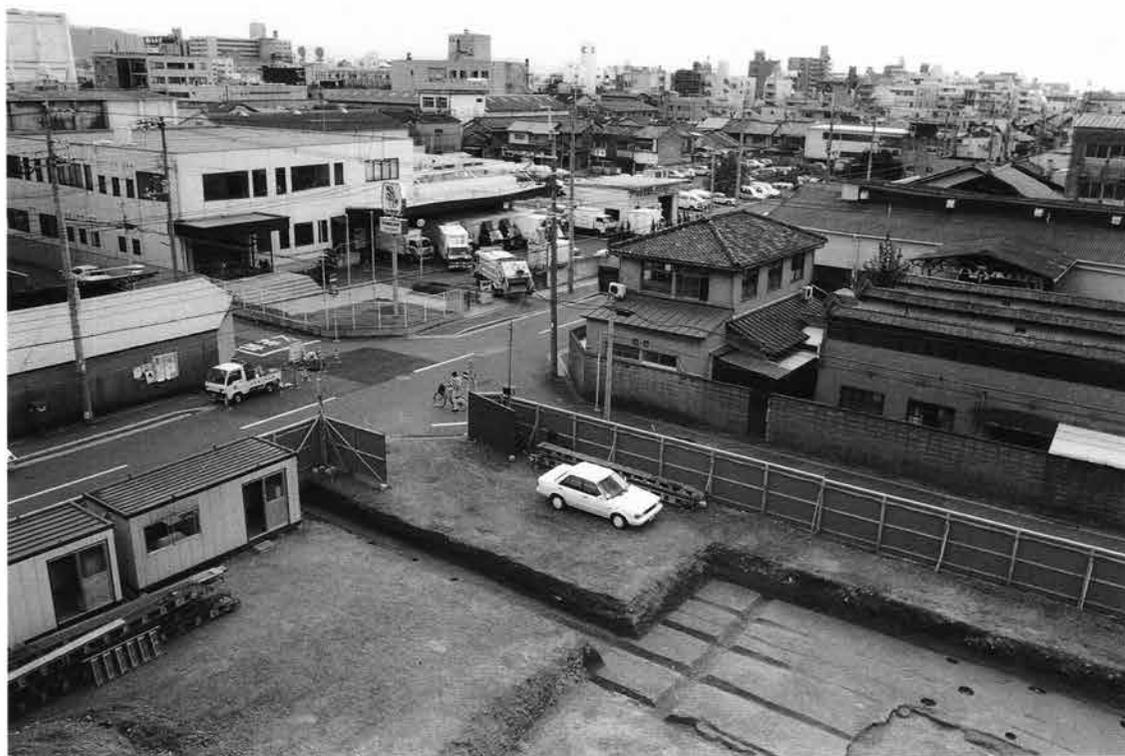




(1) 調査地遠景 (右下が調査地：1992年11月撮影)



(2) トレンチ空中写真



(1) 調査地及び道祖大路・七条坊門小路全景



(2) 土層堆積状況（西から）



(1) トレンチ全景 (北から)



(2) 建物跡1 検出状況 (北から)



(1) 柱穴 (P6) 完掘状況 (北から)



(2) 柱穴 (P7) 完掘状況 (北から)



(1) 1トレンチ全景 (南から)



(2) 2トレンチ全景 (北から)



(1) SK146遺物出土状況



(2) SK173検出状況 (北から)



出土遺物 (1)  
 (番号は実測図の番号と一致)



9



43



41



48



42



53



50



51



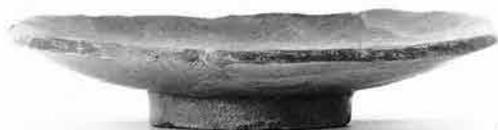
52



31



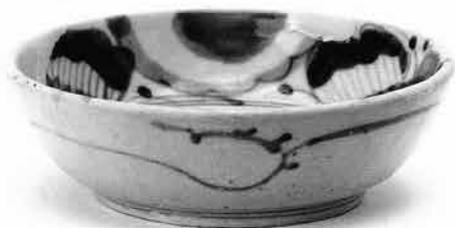
24



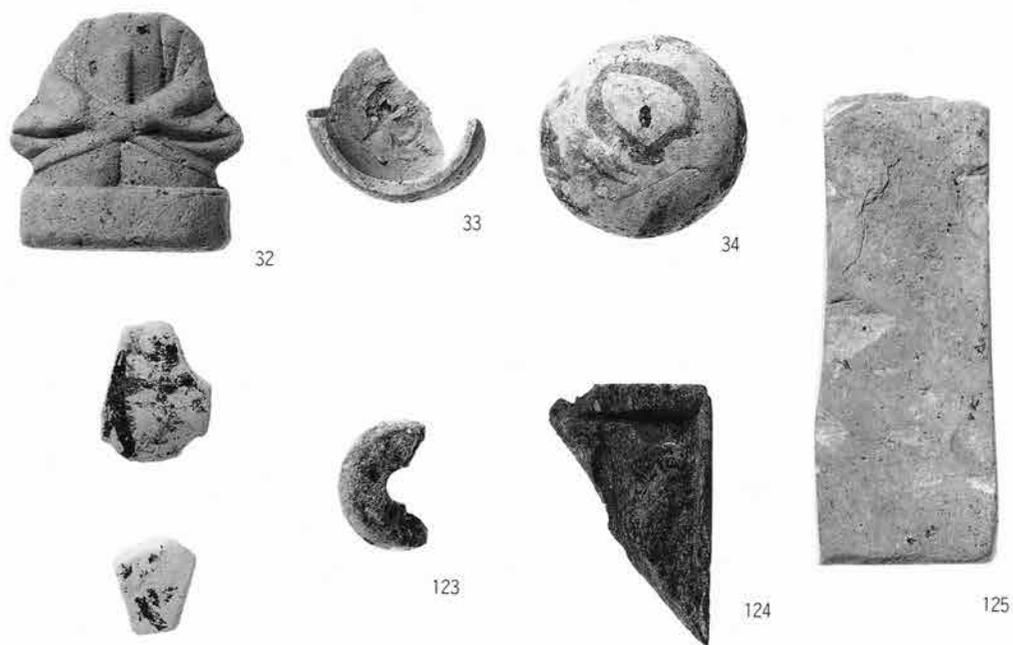
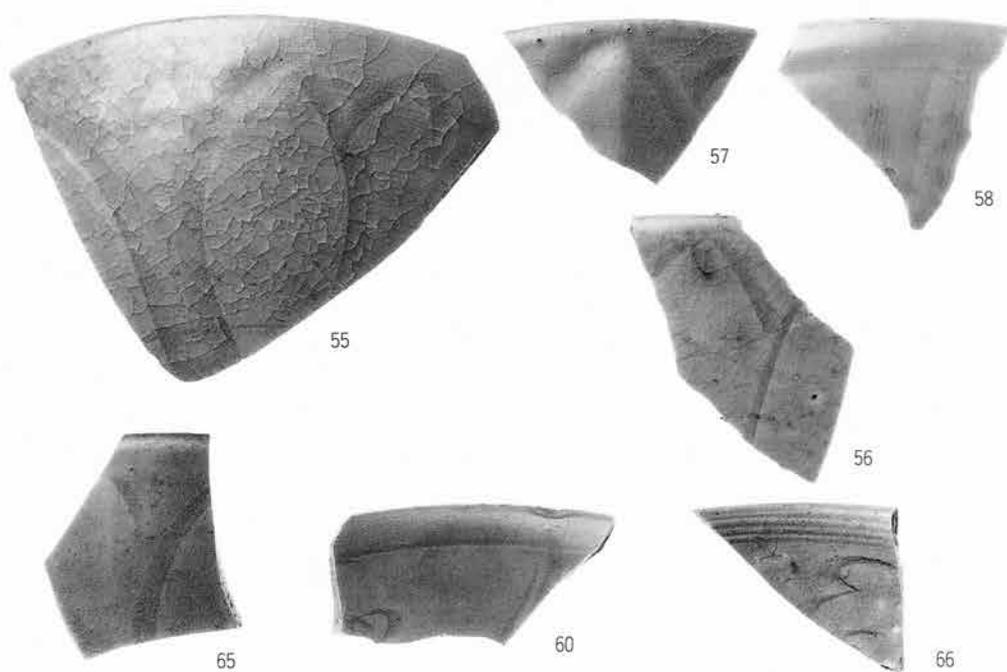
102



30



104

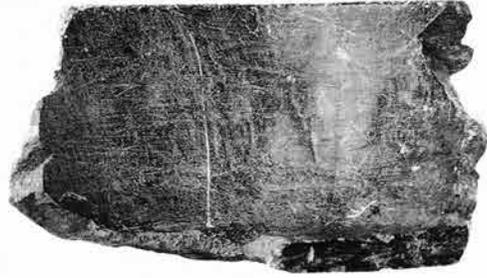




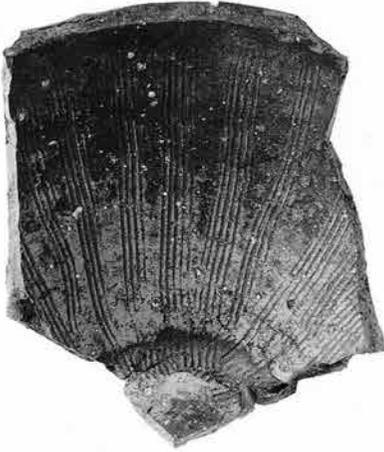
93



105



126



103



81



82



136



127



137

京都府遺跡調査概報 第52冊

平成5年3月24日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3  
Tel(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel(075)441-3155 (代)

